

精神分析トウィーティング・セミナー：

フロイト・ハイデガー・ラカン

Tweeting Seminar on Psychoanalysis :

Freud, Heidegger and Lacan

<https://twitter.com/ogswrs>

<http://twilog.org/ogswrs>

小笠原 晋也

精神分析家, 東京ラカン塾主宰

<http://www.lacantokyo.org>

<http://ogswrs.blogspot.jp/>

<https://www.facebook.com/ogasawara.s>

12 June 2014 : 存在のトポロジーは思考の鍵である.

論文 [HEIDEGGER AVEC LACAN](#) を東京ラカン塾の site に公表しました. この論文は, 精神分析の基礎に関する問題を論じています. 全く専門的な話を細々としていますから, かなり読みにくいかもしれません. しかし, 何事に関しても基礎的な議論はそのようなものです.

ラカンを理解することも, ハイデガーを理解することも, 難しいことではありません. 存在のトポロジーを忘れなければ: $\frac{a}{\Phi}$. それは, 精神分析において最も基本的な学素です.

13 June 2014 : Heidegger も Lacan も神に関して問うている。

わたしが『存在と時間』を初めて手にしたのは、大学入学時、精神科医をしている叔父が入学祝いに松尾啓吉訳本をくれたときでした。当時はまだ、精神病理学や精神療法を志す精神科医は Heidegger を読まなくてはならないという古き良き伝統が残っていました。勿論、哲学の素養の無いわたしには、何も理解できませんでした。その後まもなく Lacan に出会い、構造主義の流行もあって、実存主義や現存在分析はもう乗り越えられたというような臆見に、わたしは陥っていました。

Heidegger との第二の出会いは、彼の生誕 100 年を記念して出版された『哲学への寄与(自由によって)』が Heidegger の第二の主著である、という Hermann のキャッチフレーズを目にしたときでした。全く興味本位でそれを買ってみました。当時は既に Lacan のテキストにある程度鍛えられていたのですが、Heidegger の文章には改めて驚愕を覚えました。これは真剣に読まねばならない著作だ、と直観しました。そして、原書と邦訳を並べて見比べながら読み進めていきました。

学生時代との大きな違いは、わたしは当時既にカトリックとなっており、神学にも興味を持って、聖書だけでなく、ある程度は神学の諸著作も既に読

んでいた, という点です.

Heidegger にせよ Lacan にせよ, 一般に難解だと言われるのは, 彼らが何を問題にしているのかが, そもそもわからないからです. ただ単に, 彼らは哲学やら精神分析やらを問題にしているのだという理解では, 的外れです. 彼らは何を問題にしているのか?

それは, 神です. 多分, 神学を学んだ人には, それは始めから明白だったでしょう. 周知のように, Heidegger の出発点は神学でした. Heidegger も Lacan も, カトリックの家庭で育ちました. Lacan の弟は, ドメニコ会の神父になり, 聖書の仏訳にもたずさわりました.

Lacan は無神論者としてふるまっていたましたが, 彼は神を無視していたわけではありません. まさに「父の名」の用語が, 彼の神への関心を物語っています. 無神論者を自認していた Freud も, 晩年, モーゼと一神教についての論考を残しました.

Heidegger が「抹消された存在」 das **Sein** によって考えているのは, 神です. それは, 哲学者たちの神ではありません. Heidegger は哲学者であると一般には見なされていますが, むしろ彼は, 哲学を再び神学の道具に引

き戻したのです。

Heidegger が『哲学の寄与』において「最後の神」について語る時、それは、キリスト者とその再来を待ち望む神です。

神は **alpha** であり **omega** であると黙示録には言われていますが、「最初の神」は、もう既に、抹消された存在としての神ではありませんでした。Heidegger は「最初の源初」**der erste Anfang** という表現を用いていますが、それが「最初の神」です。それは、前ソクラテス期のギリシャの哲学者たちにおいても、存在は既に **physis** として立ち現れていたことに相当します。

最後の神、終末論的の神、その再臨が待ち望まれている神こそ、存在 **Sein** そのものです。そして、それが、Heidegger にとっても、Lacan にとっても、本当に思考すべきものなのです。

14 June 2014 : 神の存在は, あなた自身の存在である.

Lacan は神など問題にしていなと思う人は, この事実を思い出してください:即ち, 彼が「父の名」の用語を最初に用いたのは 1953 年のローマ講演においてであり, そして, 1975-76 年の Joyce についての Séminaire においても, 彼が問題にしているのは「父の名」です. Lacan は, *Écrits* に収録されている書のなかで父の問題を「予備的問い」と呼んでいます, それは彼にとって, 予備的であるばかりでなく, 最終的, 究極的な問いでもあったのです. まさに alpha にして omega です.

神のことは自分には関係無いと思いますか? 確かに, Jacques Prévert は, 主の祈りをもじって, 「天にまします我れらの父よ, そこにとどまりたまえ. 我れらは地上にとどまります. ここはときとしてとてもすてきなところですから...」と言いました.

しかし, ここで問題にしたいのは, ミケランジェロがシスティナ礼拝堂の天井に描いたような, 長いヒゲをはやした長老のような神のことではありません. 問われるべき神は, ひとつの存在事象ではありません. 存在事象ではなく, 抹消されてしか書かれ得ないものとしての存在 **das Sein** です.

神について考えるとき, Heidegger の簡潔な表現を手掛かりにしましょう.

即ち, Es gibt Sein. 何かが存在を与える.

ドイツ語の es gibt という言い回しは, フランス語の il y a, 英語の there is... と同義で, 「... がある」です. しかし, Heidegger はこの極めて日常的な表現のなかに, 究極的な存在論的真理を読み取りました.

大文字で書かれた Es は, 存在をさします. つまり, 神です. 神が存在を賜るのです. これが, 「天地の創造主」「万物の創造主」である神の本質である. そう Heidegger は公式化しました.

「天地の創造主」とか「万物の創造主」と言うと, また我々自身から遠くなってしまいそうですが, あなた自身の存在をあなたに与えてくれているのも, Es : 存在としての神なのです. あなたの存在の真理は, 神そのものなのです.

神を問うことと, 自分自身の存在に関して問うこととは, 同じひとつのことなのです. そのことをふまえれば, Heidegger を読むときにも神学を学ぶときにも, 視界が開けます.

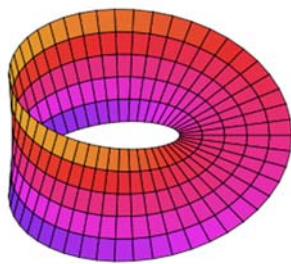
Lacan は *de Alio in oratione tua res agitur* [他 A の言説において, 汝が
ことがかかわっている]というラテン語の句を「主体のくつがえし」の書のな
かで引用していますが, まさに, 神についての話のなかで, あなた自身の
存在が問われているのです.

15 June 2014 : 存在論的穴と解脱実存

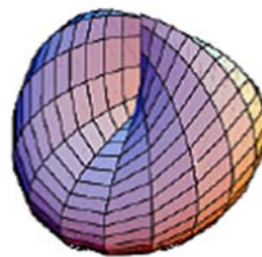
存在のトポロジー $\frac{a}{\phi}$ は極めて単純です. Heidegger が einzig, einfach, einfaltig という語をしばしば用いているように.

この ein は一神教 monothéisme の一にも重なり合います. つまり, 存在のトポロジーにおいてかかわっているのは, ひとつの穴, 唯一の穴です

Lacan はその穴をメビウスの帯を以て説明しました. 彼がそうしたのは, 必ずしも哲学や神学の素養を有していない精神分析家たちのためです. 彼らの大部分は, 精神医学や心理学の出身でしたから, 抽象的な話ではなく, 具体的なものを持ち出して示さなくては理解できないだろうと Lacan は配慮したのでしょう.



Möbius の帯



cross-cap

メビウスの帯のエッジ(縁, ふち, へり)は, 御存じのように, ひとつです. ですから, それはひとつの穴のエッジをなしていると思なされます.

投射平面という閉曲面 [closed surface] に基づいて事態を見てみると, 投射平面はひとつの円板とひとつのメビウスの帯のそれぞれのエッジを同一化して作られます. その三次元空間内のひとつの immersion である cross-cap は, 鉗子で押しつぶされてきたように見える線上の諸点を除けば円板に還元されます. つまり, cross-cap においてはメビウスの帯は三次元空間に対して解脱的に実存しており, 言い換えると, 解脱実存 ex-sistence を成します

より正確に言えば, 存在のトポロジーは, ひとつの穴と, それに対するひとつの ex-sistence 解脱の実存とから成ります. Lacan はこの Heidegger の用語 ex-sistence を以て「実在」le réel を定義します.

Ex-sistence という用語は, Lacan の *Écrits* の最初の書:『盗まれた書簡についてのセミナー』の最初の数行のなかに既に用いられています. この ex-sistenceこそ Heidegger が *das Sein*, 存在と書いたものに相当します. それが本事です.

16 June 2014 : 存在の真理の現象学的構造

Ex-sistence としての存在, 自己秘匿における存在の真理を, 仮象 [semblant] としての存在, 非秘匿性 [ἀλήθεια] としての存在が代表する : $\frac{\text{Sein}}{\text{Sein}}$. これが, 存在の真理の現象学的構造です.

Heidegger はときとして自己秘匿における存在 ~~Sein~~ を Seyn と書きますが, 一貫してはいません.

Heidegger が「存在」と言うとき, それが自己秘匿における存在を指しているのか, あるいは, 非秘匿性ないし朗場 *Lichtung* としての存在を指しているのか, 常に注意深く識別する必要があります.

昨日の日曜日は, カトリックでは三位一体の主日でした. いったいそんなものが我々に何の関係があるのか? ところが Lacan は *Écrits* の最後の書:『科学と真理』において三位一体と *Filioque* というまさに神学的な問題を取り上げています. 明日以降, それを見て行きましょう.

17 June 2014 : 三位一体について; 聖なる靈気について.

Twitter というメディアの性質上, ここでは思いつくままのことを書いています. ですから, 議論の展開はあらかじめ良く組み立てられたものではありません. そのときどきに頭に浮かんだことを書いています.

昨日は, Lacan の或るテキストのコメントをしてみようと思いつきました.

神学的な問題に関心を持つことと, 宗教的信仰を持つこととは, 別です. 神学的問題を論じたからといって, その問題がかかわる宗教の教会に服従する必要はありません. また, わたしがカトリック教会の信徒であるとしても, Vatican に対して批判的な意見を全く持てないわけではありません. むしろ, 人間として最も本自的に生きるとは如何なることか, もしそれがキリスト者として生きることであるとすれば, そのような実存は如何なるものであるか, と問うことは, 教会の教義から距離を取らねば可能ではないでしょう.

Heidegger も Lacan もそのようにしていました.

三位一体は, キリスト教の概念のなかでも最も難解です. 『科学と真理』において Lacan は聖アウグスティヌス Augustinus の著作『三位一体について』に言及し, まずそれを読めと我々に勧めています, Augustinus が

15年以上の年月をかけた著作はそう簡単に読めません。

『科学と真理』において Lacan は、三位一体に関連して、Filioque の問題に言及しています。Filioque はラテン語で「および子から」です。それは、ニケアコンスタンチノーブル信条と呼ばれる信仰箇条 credo のなかの文言に関する対立をきっかけにするローマ・カトリックとギリシャ正教の分裂の問題です。

通常「聖霊」と訳されている Sanctus Spiritus は、父なる神のみから発するのか、あるいは、父からと同様に子なる神イエスからも発するのか？

いったいそんなことにどんな重要性があるのかと思われるようなことで、歴史的な教会の分裂は始まったのです。

そこに立ち入る前に、「聖霊」とは何かについてまず考えてみましょう。ギリシャ語では τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον。

「霊」というと、幽霊とか霊園とか、死者の霊のことがまっさきに思い浮かびます。ところが、πνεῦμα とは、本来、大気、風、息、息吹を意味します。ひとことで言えば「気」です。この聖なる霊気は、天の神から地上の人間へ送ら

れてきます。風として、あるいは熱い気、つまり火ないし炎として下ってきます。神の靈氣を受けることができれば、*inspiration* を得ることができるだけでなく、永遠の命を授かります。聖靈、聖なる靈氣は、神と人間とをつなぐものです。

三位一体の子の位階であるイエスは、全的に神であり、かつ、全的に人間である、とされています。聖なる気、聖なる精気は、イエスにおける神性と人間性との一致を実現しているものです。

19 June 2014 : 三位一体と Filioque について.

「ラカンの『科学と真理』における三位一体と Filioque について」と題した

短い論文を東京ラカン塾の site に発表しました.



『科学と真理』においてラカンは、三位一体の絵柄のゴブラン織りタピストリーに言及しています。父と子と聖なる靈気とが、全く同じ形姿で描かれています。

まったく同一の人物が複数いると、無気味です。ラカンはそう指摘しています。

それらまったく同一の三人は、三位一体として、一を表しています。その一は、神の存在、抹消されてしか書かれ得ない存在です。

「ラカンの『科学と真理』における三位一体と Filioque について」においては、学素を用いて説明を行いました。その方がわかりやすく説明できます。すべては、「存在の真理の現象学的構造」と名づけた学素 $\frac{a}{\Phi}$ に表されている存在のトポロジーに集約されます。

「ラカンの『科学と真理』における三位一体と Filioque について」においてははっきり書かないままになっていて、今急に頭に浮かんできたことを付け加えると、三位一体はキリスト教だけの特殊事情ではありません。神の現象学を内包するあらゆる宗教、つまり、人間にとって神と認識し得る神がかかわる宗教すべてにおいて、三位一体は明示的ないし暗示的に作用しています。

たとえばイスラム教においては、それ自体としては隠れている神 Φ が、預言者マホメットに語りかけ、その言葉がコラーン a として書きとめられました。隠れている神は、キリスト教の父なる神 Φ であり、コラーンは受肉した御言葉イエス a に相当します。聖なる霊気(聖霊)は、コラーンが神の御

言葉であることの保証とは言わずとも、その可能性の条件です。ほかのあらゆる宗教において、同様のことが当てはまります。

20 June 2014 : 自有としての解脱と救済

救済とか解脱という言葉聞けば、今の社会において常識ないし良識を持っていると自認しているひとは、まず眉をひそめるでしょう。かつてオウム真理教も解脱という言葉売りものにしていたと思います。

しかし、究極的に人間が求めているものは何でしょうか？ひとことで言えば、満足でしょう。しかし、いったい人間にとって、満足とは何でしょうか？満足を得ることは可能なのか？可能であるとすれば、如何なる満足か？どうすれば満足を得られるのか？あるいは、そもそも満足を得ようとするのは、見当違いではないのか？

伝統的には、アブラハムを信仰上の祖とする宗教、すなわち、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教では、人間にとって最も望ましいことは、神による救済です。救われることです。

仏教においてはいろいろな表現が用いられますが、ひとことで言えば、ブッダと同じに成る事です。ブッダと同じ実存構造において実存することです。

同様に、キリスト教では、最終的に目指すべきことは、イエス・キリストと同じ
実存構造において実存することです。実際、*Imitatio Christi* キリストをまね
ること、という15世紀に書かれた有名な書があります。

ブッダと同じように、キリストと同じように、実存を生きること、それが目指され
るべき解脱であり、救済である、と言っても良いでしょう。キリスト教と仏教で
目指されていることは、実は同じことです。それは、Heidegger の用語で言
えば、*Ereignis*, 自有です。

21 June 2014 : 悦と満足 ; 死の本能と解脱・復活.

質問: 満足と *jouissance* とは概念的にどう区別されるのか?

Freud は « *eine Triebbefriedigung ist immer lustvoll* » と言っています.

「本能の満足は, 常に *Lust* に満ちている」.

Freud は, 快原則の彼方を予感しましたが, それを完全には捉えきれませんでした.

Lust というドイツ語は, 快と悦と両方の意味に訳せます. *Lust* を用いているかぎり, *Lust* の彼方も *Lust* だとしか言いようがありません. そこで Lacan は, 快 *plaisir* の彼方として *jouissance* という語を用いました. フランス語ではこの語は十分に性的なニュアンスを持っています.

精神分析においてかかわる本能は, 死の本能 *Todestrieb* です. 性本能 *Sexualtrieb* の正体は, 死の本能です. ですから, 性本能の満足は一見, 快をもたらすかのようなようですが, それにはとどまりません. それは明々白々な事実です. ですから, 「快」ではない語が必要になってきます.

ちょうど死の本能を話題にしたので、救済ないし解脱を死の本能との関係において考えてみましょう。

解脱が死と本質的な関係にあることは明白です。涅槃という語がそれを示しています。しかし、我々は生物学的に死ななければ解脱できないのか？ 禅ではそうは考えていません。

ブッダという名称の本来の意味は、目覚めた者、覚者です。その含意は、我々は日常生活において目を開いたまま眠っている、夢をみている。そのような惰眠から目を覚ませ、実在を見究めよ、ということです。

存在事象の世界は仮象の世界です。それが真理と実在を覆い隠しています。

しかし、存在事象を捨て去ると、どうなるか？ 我々はもうこの世のものではなくなります。つまり、死を引き受けることとなります。死を覚悟することと、生物学的に死ぬということは、異なります。生物学的に死んでしまえば、もはや覚悟することもできません。そのためには、耐えること、辛抱することが必要です。

三島由紀夫のことを、わたしは殉教者として評価していますが、残念ながら、彼には「待ち望む」という態度が不可能でした。その点において、わたしは彼においては「父の名の閉出」があったのではないかと疑っています。三島は読むに値する作家です。今でも、あるいは、ニヒリズムの蔓延している今だからこそ。

キリスト教における救済は、復活です。キリストは死者のうちから復活しました。それは「よみがえり」ではありません。永遠の命、神の命へと復活したのです。

言うまでもなく、復活するためには、まず死ななくてはなりません。死を引き受けなければ、復活はありえません。

キリスト教における洗礼は、実は、死の儀式です。古代キリスト教においては、洗礼は全身を水に浸けて行われました。洗礼者ヨハネによるイエスの洗礼の画は幾つもありますが、イエスは半裸で水のなかに立っています。全身を水につけるからです。それは死を儀式的に象徴します。

出エジプトにおいてイスラエルの民が紅海を渡ることも、洗礼と同じ意義を有していると解釈されます。彼らは死を通り抜けることによって、約束の地、

エルサレムへ入ることができるのです。

ともあれ、死を引き受けること、死を覚悟することが、救済と解脱のための必要条件です。

言いかえると、救済ないし解脱は、死の本能を積極的に利用することによって可能になるのです。死の本能によって日常的な世人、Heidegger の言う *das Man* の状態を打ち破ってこそ、救済ないし解脱は達成されます。

22 June 2014 : ニヒリズムについて.

ニヒリズム nihilisme を話題にしてみましよう. Nihil はラテン語で「無」のことです. 虚無主義と訳されますが, 「主義」という表現は nihilisme を理解することの妨げになります.

昔, 多分敗戦後から 1970 年代ころまでは, ニヒリズムはよく話題になっていたと思います. ところが, 今はどうでしょう? 今まさにニヒリズムが頂点へさしかかっているときに, ニヒリズムを問題にしている人がどれほどいるのでしょうか? わたしは論壇や日本の哲学界の動向に全くうといので, 確かなことは言えませんが, 今, この語を見かけることはほとんどありません.

ニヒリズムをもっともよく論じたのは Nietzsche (1844-1900) でした. つまり, 19 世紀にはニヒリズムは既に深刻な問題と受けとめられていたわけです. 資本主義と市場経済が発展するにつれて, 伝統的な価値観が無効になっていった時代でした.

今, ニヒリズムがほとんど話題にならないからといって, ニヒリズムが克服されたわけではありません. むしろ全く逆です. ニヒリズムは頂点にさしかかりつつあります. それは, 仮象の蔓延に示されています. いわゆる virtual な

ものの氾濫、架空、仮想の次元のものの際限のない増殖。それらはまたたくまに消費され、また別のあらたな仮象にとってかわられて行きます。誰もそのようなもので本当の満足は得られないからです。ところが、仮象、架空、仮想のものに見いだされる価値以上のものはどこにも見つけられない。無価値なもの以外に価値あるものは見いだせない。

今、誰もがそれに少なくとも薄々は気がついています。そのようなニヒリズムに対する反動として、いわゆるナショナリズムの高揚があります。今の総理大臣、安倍晋三氏が良い例です。隣国を批判し、自国の価値を高めようとする。どこにも価値を見いだせないことに対する埋め合わせです。

Nietzsche は、伝統的な価値が無価値になってしまったなら、みづから価値を措定すればよい、と考えました。プラトンの二元論をくつがえし、天上的・イデア的なものではなく、地上的なものを価値のスケールの上位に置く。みづから価値を措定する意志を、彼は「力への意志」と呼びました。Wille zur Macht. 「権力への意志」とも訳されます。そして、この力への意志を体現する新たな人間を、彼は「超人」Übermensch と名づけました。それは Nietzsche などのニヒリズム超克の試みでした。しかし、それでは解決になりませんでした。

ニヒリズムは現在に至るまで、深刻化の一途をたどっています。それは、ニヒリズムの本当の理由を誰も理解していないからです。少なくとも Heidegger がそれと指摘するまでは、ニヒリズムの本当の原因は、存在そのものにあります。つまり、存在の真理は存在だということです。

存在の真理を、存在事象という仮象が覆い隠しています。この存在の真理の構造を理解せずに、価値あるものは存在事象の次元に見出されるはずだと思い込んで右往左往している。それがニヒリズムが頂点に至ろうとしている今の状態です。では、ニヒリズムを超克するにはどうすればよいか？

23 June 2014 : ニヒリズムと三島由紀夫.

三島由紀夫は、ニヒリズムを克服しようとしていました。彼は、三つの手段でそれを実行しようとしていました。ひとつは、文学によって。つまり、作家として文学作品を書くことによって。これは、言葉の次元にかかわります。第二に、彼自身の肉体を鍛えることによって。これは影像の次元にかかわります。第三に、彼は社会的、政治的な次元において、天皇制の真の復活を欲しました。象徴天皇制ではなく、古代においてそうであったように、実際に天皇が支配し、まつりごとをおこなうよう、日本の社会を変えようと彼は欲しました。

一見、それら三つのことは相互に関係がないように見えますが、実は、三島由紀夫にとっては、それらは三つとも「美」において統一されていました。言葉の美、肉体の鏡像的な美、そして、古代の朝廷で実現されていたろうと少なくとも彼が想像する天皇制の美です。

天皇は美しいか？少なくとも彼はそう思い描いていました。例えば、「憂国」において、彼は昭和天皇が白馬にまたがって、みづから最前線におどりでて、反乱将校たちに凜々しく切腹を命ずる、というような場面を描いていたと思います。

三島は、ニヒリズムは美によって克服されると考え、その考えに従って実際
に行動しました。

美は、確かに、ニヒリズムの世にあつて、価値あるものとして最後に残るもの
かもしれません。しかし、美は本当にニヒリズムを克服し得るか？

三島の書く作品は、最初のうち、すべてがベストセラーになりました。彼が
大して本気を出さずに書いたものまで。しかし、彼が本気で書いた「鏡子の
家」という作品は、文壇から評価されませんでした。今読むとなかなかおも
しろい作品ですが、何故か当時は無視されてしまいました。

「鏡子の家」の文壇における不評は、三島のその後の生き方にとって非常
に重大な意義を持っていただろうと思います。つまり、言葉の美から肉体の
美への重点の移動です。そのことは、彼の「太陽と鉄」というエッセーに書
かれています。

一時期わたしは三島について評論のようなものを書いてみようと思ってい
ました。そのときの構想では、「仮面の告白」と「太陽と鉄」とをふたつの焦
点にしようと思っていました。どちらも自伝的な作品です。

「仮面の告白」を三島は、精神分析を受けるのと同じ気持ちで書き、作品を或る精神科医に読んでもらうために送りました。残念ながら精神分析家ではありません。その精神科医が三島にどう答えたのか、答えなかったのか、三島はそのことについて何も証言を残していません。

いずれにせよ、その後、三島は精神分析に対して非常に批判的になりました。「音楽」という小説に精神分析家のような人物を登場させてはいますが、その作品は三島が本気で書いたもののひとつではありません。

「太陽と鉄」では、彼は、自分は今もう言葉を信じてはいない、肉体を信じている、というようなことを言っています。しかし、当然ながら、年齢とともに肉体は衰えてゆきます。三島が死んだのは45歳のときでした。彼は、肉体の美が永続的でないことを実感していたでしょう。肉体美を写真として残そうとしたとはいえ。

そして、天皇制の美は、もうとうに無くなっていました。

三島と昭和天皇との関係を考えるとき、三島が学習院を首席で卒業するとき、昭和天皇から褒美として銀時計を賜ったという事実は、それなりの意義を持っていると思います。三島はその銀時計をその後どうしたか、証言を何

も残していませんが. ともあれ, それは, 三島にとって, 昭和天皇に対する負債としての意義を持ち続けたでしょう.

話がかなり三島の方へずれこんでしまいましたが, ともあれ, たとえ美であれ, 存在事象のなかにはニヒリズムを克服する方途を見出すことはできません.

存在事象ではなく, 存在そのものに, 存在の真理そのものに目をむけることなくしてニヒリズムを克服することはできません.

24 June 2014 : 三島由紀夫とニヒリズムの超克.

もう少し三島由紀夫について続けましょう.

美を以てはニヒリズムは超克できないと言いましたが、三島は、彼の最後の長編小説『豊饒の海』の第四部『天人五衰』においては美を超えました。そのとき彼はもう死を覚悟していたのですから、或る意味、当然ですが、ともあれ、美を超えたという点において、『豊饒の海』は彼の最高の作品だと言うことができるでしょう。

ある評論家が『豊饒の海』は失敗作であり、『天人五衰』の結末は幻滅以外の何ものでもない、というようなことを言っていましたが、その評論家は何もわかっていません。『天人五衰』の結末ほど感動的なものは、そうざらにありません。死を覚悟した者だけが書けるものかもしれません。

問題は、三島は「死を覚悟する」の次元にとどまらなかったということです。彼には、そこで辛抱して欲しかったと思います。小説を書き続けて欲しかったと思います。

『天人五衰』は如何に感動的か？そこでは、まさに美が仮象であることが暴

かれます。それまで輪廻転生において美を体現してきた三人の主人公の後継であるはずの透は、清顕の生まれ代わりではないことが啓かされます。

他方、本多の体は腓癌におかされています。嚢胞性腫瘍であると書かれています。嚢胞とは、つまり風船のように、中に空(くう)を含んだ病変です。本多は今や文字どおりに己れの内に空を有し、死を抱えています。そして彼は必死の思いで、清顕の恋人であった聡子を訪ねます。

しかし 80 歳をすぎた尼僧、聡子は何と答えるか？清顕という人は知らない、と彼女は答えるのです。アルツハイマーではありません。嘘をついているのでもありません。彼女のこころのなかからは、清顕という *signifiant* は消え去ってしまっていたのです。つまり、彼女のこころのなかで、清顕は真に涅槃 \emptyset に至っていたのです。

聡子は、まさに存在を己れのうちに懐胎しつつ、この世において成仏しているのです。聡子のこの実存は大変感動的です。そして今や、美の正反対、老醜以外の何ものでもない本多も、己れのうちに空、抹消された存在をかかえこんで、聡子と会います。空と空との出会い。

『天人五衰』の結末ほど感動的な小説は希でしょう。そして、最後に聡子が

本多に見せる寺の中庭は, Heidegger が *Lichtung* と呼んだもの, 朗場, 明るい空き地を象徴しています. そこには神秘的な救済の喜びが満ちています.

25 June 2014 : 男女の性別の構造論的基礎について.

今月 18 日に起きた都議会の性差別発言事件を機に、『[男女の性別の構造論的基礎について](#)』と題した小論を書きました.

今日はニヒリズムの問題から一時的に離れて、『[男女の性別の構造論的基礎について](#)』で述べたことに若干の補足をします. 三島由紀夫のことを話題にしてきたのですから, 同性愛と異性愛について考えてみましょう.

男が女を性的欲望の客体にするということは, どのような構造の事態でしょうか?

Lacan が精神分析家の言説と呼ぶ構造に準拠して考えましょう. それは, 排斥 [Verdrängung : 抑圧] されたものの回帰としての症状の言説の構造でもあります. 次の図は, Lacan にもとづいてわたしが形式化し直した症状の言説としての分析家の言説の構造を表しています:

$$\frac{a}{\emptyset} \rightarrow \$$$

症状の徴示素 (signifiant) a が左上の能動者の座にあり, それは, 左下の

座に位置する主体の存在の真理を代表ないし代理します。何に対して代表するかというと、右上の座に位置する $\$$ に対して代表します。

男が女を欲望の客体にするという事態は、こう考えられます:分析家の言説、症状の言説の構造において、男は右上の座の $\$$ 、女は左上の座の客体 a です。客体 a は、主体の存在の真理を代表する限りにおいて、 $\$$ にとって欲望の客体となります。

そして、 a はできるだけ存在の真理をそのままに代表するのが良いのです。究極的には、 a は穴そのもの、切れめ、裂けめそのものであれば、最も忠実に、抹消された存在の深淵を表し得ます。

異性愛の男にとって性的欲望の対象になりにくいのは、男です。なぜかと言うと、男の存在構造においては、 a は一番厄介な *signifiant phallique* Φ であるからです。このハリボテは、存在の深淵をすっかり覆い隠して、そのような穴は全く無かったかのごとこにしてしまいます。

それに対して女は、そのような *phallus* Φ を欠いているがゆえに、欲望の客体となりやすいのです。

逆に言うと、みづから phallus を有している(解剖学的にではなく、徴象的に)ような女性は、男と同様に、異性愛の男にとっては性的な客体とはなりにくくなります。

三島由紀夫のような同性愛の男にとってはどうであるか？彼の伝記的事実として知られているように、彼の幼年期、彼の家族における支配者は彼の祖母でした。彼の父親の母親です。三島の父親は、自分の母親に対しては、いわば去勢された者でしかありませんでした。ですから、三島にとっては phallus を体現しているのは女性なのです。たいていの場合、同性愛の男性自身の母親が phallique なのですが、三島の場合はたまたまそれは祖母だったのです。

存在の真理を覆い隠してしまう phallus を持っている女性は、三島にとって欲望の客体にはなりません。彼にとっては欲望の客体は、彼の父親のように去勢された男なのです。三島にとっては、男は phallus を欠いており、それがゆえに、存在の真理を覆い隠さずに、より良く代表し得るものなのです。その限りで、彼にとっては男が性的欲望の客体なのです。

ところで、このことは、女が男を愛するときにも当てはまります。社会に流通しているイメージとして完璧な男、精神的にも身体的にも力強く、たくましく、

それこそ勃起した **phallus** そのものであるような男を、女は愛するでしょうか？もしあなたがそう思っているなら、それは完全な思い違いです。もし仮にそのような男が女の目を引くとしても、女が愛するのは、そのような外見のなかに欠如や欠点や欠陥を感じさせる男なのです。あるいは、見るからに完璧なダメ男です。

同性愛の男が愛する男と、女が愛する男は、ですから、共通性があります。いかにもたくましい勃起した **phallus** は、存在の真理の深淵を覆い隠して、欲望に蓋をしてしまいます。そうではなく、できるだけ無に近いもの、あるいは、裂けめ、切れめをそのものとして暗示するような客体 — むしろそのようなものが、男にとっても女にとっても欲望の客体となります。

美は、はかなさにおいて欲望の客体になります。三島の作品にはそのことが常に描かれています。

26 June 2014 : 三島由紀夫と性別.

三島由紀夫は、解剖学的には勿論、男でした。しかし、はたして存在論的には、つまり、実存構造の観点からは、男だったでしょうか、女だったでしょうか？

問いは存在論的に措定しましょう、心的とか心理学的とか精神的とかではなく。

彼の存在論的構造は、男のそれではなく、女のそれであった、とわたしは考えます。

昨日も指摘したように、彼が育った家族構造において、 Φ と表記される徴示素ファロス *signifiant phallique* を体現しているのは、彼の祖母でした。それに対して彼の父は去勢されていました。そのような家族のなかで、三島自身は、ファロスの祖母の欲望の客体でした。三島は子供時代、病気がちで、体格も弱々しく、ファロスの祖母の欲望の客体となるのにまさにうってつけでした。そして、この存在構造は、三島の生涯を通じて変わりませんでした。

通常、異性愛の男は、signifiant Φ との同一化において男として存在します。性別に関しては、それで十分です。Ex-sistence の深淵の穴を塞ぐのに、ほかの徴示素は基本的には必要ありません。

それに対して、女の存在構造においては、ex-sistence を代理するのは、それ自体切れめであり、穴である徴示素 a です。そして、そのままでは穴は言うなればむきだしですから、さまざまな仮象が動員されて、その穴を埋めようとします。具体的には、様々な衣装、化粧、装身具、等々です。

Lacan は、或る英国の女性精神分析家が使った表現を引用して「仮面舞踏会」とどこかで言っています。Melanie Klein ではなく、Joan Rivière という名の分析家です。

女性とそのような仮象の多様性ととの親和性は、女性の存在論的構造の特徴に由来しているわけです。そのままでは不安を惹起する ex-sistence の深淵の穴を塞ぎ、美化し、できるだけ社会に受容されるものにする。

或る意味では、女が美しいとすれば、それは、仮象の下に不安惹起の穴を秘めているからです。欲望の客体であるためには、過度に穴を覆い隠してはならず、穴の暗示が十分に可能でなければなりません。

三島においては、まさにこの仮象の多様性、仮象の増殖が見て取れます。彼の文体の美は、評論家の評価の的でした。そして、彼の衣装に対する関心も、女性なみでした。「沈める滝」という小説において、女性が和装の際に用いる細々した小道具の名が列挙される一節があるのですが、よくそんなに知っているものだと全く感心してしまいました。それから、戯曲「サド公爵夫人」においては、彼は、女優たちに「ロココ風」の衣装を着せることにこだわりました。そして、盾の会の制服。彼自身の肉体の美、等々。

男が自分の身を飾るための仮象に凝りすぎると、「めめしく」なります。宝塚のようになってしまいます。盾の会の制服は、今なら「コスプレ」と揶揄されたでしょう。昔の王侯貴族は自分たちの権力の象徴として身を飾り立てましたが、今ではどの国の王室でも日本の皇室でも、男性の服装はさっぱりしたものです。昔のスタイルを装ったら滑稽です。

しかし、三島自身と仮象の増殖との親和性に注目するなら、三島自身の存在構造は女性のそれであったと推論されます。そして、徴示素 Φ との同一化が成立しなかったことと、彼が死の覚悟を生き続けることができなかったこととに、関連があるのではないかと推測されます。

28 June 2014 : 性別の公式; 祈りと声.

『ラカンの性別の公式についての若干の考察』を公開しました. Lacan が *L'étourdit* と *Encore* において提示した性別の論理式について読解を試みました.

Twitter にはそのときどきの思いつきを書いています. こうして比較的短時間, 思考に集中するのは良いことです. 祈りに集中するときに若干似ています.

皆さんは祈りますか? 祈るとは, 単に神に単に願い事をするだけのことではありません. 祈りは, 神とのつながりを持つことです. 神の言葉を聴き, 神と対話することです. 勿論, 無言であってもよいのです.

先日 Paris に滞在したとき, たまたま四旬節の時期でした. 四旬節とは, カーニバルの終わりから復活祭までの 40 日間です. キリストの受難に思いをはせる期間ですから, 禁欲生活を送ることが求められます. 勿論, 今のカトリックではそう厳しいことは求められませんが. ともあれ, 禁欲のことが或る御ミサの説教のなかで話題になりました.

ミサの説教なんて退屈な話だろうと思わないでください。退屈な説教もありますが、神父様によっては非常におもしろい、あるいは神学的に得るところの多い説教をすることもあります。今回 Paris 滞在中におもしろい説教に幾度か出会いました。第一のお勧めは、Paris 大司教 André Vingt-trois 枢機卿です。

今から紹介する話をしたのは、聖フランシスコ・ザビエル教会の Patrick Chauvet 神父様です。彼も、Académie française のメンバーだった Ambroise-Marie Carré 神父様の話を紹介しただけなのですが。

或る婦人が、四旬節を迎えて、大いに禁欲しようと思い、神父様に相談しました。四旬節ですからものすごく禁欲しようと思いますが、どうすれば良いですか？神父様は答えました。一日に 15 分間だけ絶対の沈黙と静寂を守って、聖霊の声を聴きなさい。15分間だけでいいんです、と。婦人はたったそれだけと不満でしたが、アドバイスに従いました。数ヶ月後、神父がその婦人に再会したとき、彼女は大変怒っていました。神父様、聖霊の声が四六時中、たくさん聞こえるようになってしまって、どの声を聴いたらよいのかわかりません！

この話は、精神病の人をからかうためのものでは勿論ありません。フランス

語の言い回しで「どの聖人にすぎたらよいかわからない」というのがあり、そのもじりです。

しかし、ともあれ、一日に10分でも15分でも、絶対の沈黙と静寂を守って、気持ちを神へ向けるのは無駄なことではありません。祈りとはそういうものであって、願い事をしたり、決まり切った文句を唱えることが祈りのすべてではありません。一日に短時間でも精神を集中させるのは思いがけない効果をもたらすこともあります。

性別に関する小論文を書いたところなので、性欲について少し考えてみましょう。Freud は Sexualtrieb 「性本能」という表現を使いました。Sexualtrieb は衝動的なものではありません。むしろ「一定の力」とであるとFreud は言っています。そして、Triebこそ、人間の本有を成すものです。勿論、生物学的な意味ではありません。そこでわたしは、古い「本能」という訳語に戻りました。

29 June 2014 : 本能について; 存在の真理の現象学的構造; 人間はその本有において言語存在である.

Freud は Triebregung という表現も用います. Regung という語で Freud は dynamisch な何か, 生命の躍動のようなものをイメージしていたかもしれませんが, わたしはむしろ暗がりでごめく無気味なものをイメージしてしまいます. 「本能蠢動」と訳してみました.

「本能」は Trieb ではなく Instinkt ではないかという御意見に対しては, Hegel が「精神現象学」のなかで Instinkt を全く非生物学的な意味で使っている例を引き合いに出すことができます.

本能寺の名の「本能」が仏教で如何なる意味で使われているのか「日本国語大辞典」を見ても説明が見当たりませんでした. いずれにせよ, 生物学的な意味で使われていたはずはありません.

我々にとって重要なのは, いずれにせよ, Freud の Trieb を Lacan は désir 「欲望」という用語のもとに捉え直した, ということです.

質問やメッセージをくださった方々に感謝します. Twitter という媒体が対

話にどの程度適しているのかわかりませんが、ひとりごとより対話の方がはるかに生産的です。ですから、Socrates は対話を好みました。対話は思考を活性化します。思いがけない着想を生んでくれます。ですから、遠慮無く質問、御意見をください。

Trieb に限らず、Freud をどう翻訳するかについてはフランスでも多くの議論が交わされました。しかし Lacan 自身は翻訳のための翻訳にはみづからかかわろうとはしませんでした。重要なのは、概念把握であり、さらには形式化です。

始めに、存在のトポロジーを忘れなければ Heidegger も Lacan も難しくはない、と言いました。Twitter や blog の欠点は、Lacan の mathèmes を表記できないことです。これについては、東京ラカン塾の site からファイルを download して参照していただくしかありません。

存在のトポロジーとは、 $\frac{a}{\varphi}$ という学素で表される構造です。この分数のようなしろものは、分数ではなく、下の座は真理の座、上の座は能動者 agent の座で、能動者が真理を代表・代理するという構造を表しています。

φ は、Heidegger の言う das Sein 「存在」を表します。Heidegger は、

Sein 「存在」という語をバツじるして抹消しています。なぜ存在を抹消するかというと、それは隠れており、そのものとしては目に触れないからです。存在事象の側から見れば、存在は無です。

a は、個々の「存在事象」(通常「存在者」と訳される Seiendes を「存在事象」と訳します)、ないし、「存在事象そのもの全体」としての「存在」を表します。

したがって、 $\frac{a}{\emptyset}$ は、Heidegger の用語においては、 $\frac{\text{Sein}}{\text{Sein}}$ と表記されます。

Lacan においては、 a は signifiant 徴示素と image 影像に該当します。

a の影に存在の真理は隠れており、 a により代表ないし代理されている：これが存在のトポロジーであり、存在の真理の現象学的構造です。

「存在の真理の現象学的の構造」の概念は非常に powerful です。

Heidegger も Lacan も神学も、これを手掛かりにすれば恐れることはありません。勿論、それなりに苦労は必要ですが。

さて、Trieb に関連して、この用語をどう翻訳するか、それが「本能」である

なら, Freud の言う Trieb と動物の本能は同じか違うのか?等の御質問,
御意見をいただきました. ありがとうございます.

基本的に言って, 精神分析においてかかわるのは, 言語に住まう存在とし
ての人間です. Lacan は parlêtre という新造語を使いました. 「言語存在」
と訳しましょう.

「言語は存在の住まいである」は Heidegger の命題です.

我々にとっては, 言語存在としての人間だけが問題です. というより, 人間
の本質は言語存在です. 言語に住んでいない動物は, 問題外です.

無や欠如という用語は, 取扱注意です. 存在の真理の現象学的構造, 存
在のトポロジーの学素に常に準拠して考える必要があります.

Lacan の存在欠如 manque à être は, ~~存在~~の Lacan 的な呼び名です.

無は, あくまで, ~~存在~~を存在事象の側から見たときに, 存在事象ではないも
のを無と呼ぶしかないので, 無と呼んでいるだけです.

存在は、単なる虚無的な無ではありません。存在は、別の呼び名では *existence*, *Ek-sistenz* です。「解脱実存」と訳しています。それが、存在のトポロジーにおいて真理の座に位置する存在です。

哲学と神学において、さまざまな人がさまざまな表現で存在と神について思考してきました。ですから、用語や概念の字面だけを見ては道に迷うこと必至です。だからこそ形式化、構造化が必要不可欠になってきます。Lacan が学素を作り出したのは奇をてらったものではありません。

Trieb に話を戻すと、Lacan も当初は *instinct* というフランスで従来用いられてきた訳語を使っていました。しかし、やはり生物学的な臭いが残っているので、Lacan は *désir* という語の方を好みました。

Trieb も *désir* も、存在論的には存在として把握されます。学素では ϕ です。それは抹消され、隠れてはいますが、しかし、*a* に代表されることによって現れ出てきます。

Hegel が「精神の現象学」と言うとき、それは、存在が如何に現象してくるか、ということの議論です。

存在は、徴示素 a に代表されることによって、我々に請求をつきつけてきます。Freud は Triebanspruch と言ひ、Heidegger は Anspruch des Seins と言いました。

その請求に如何に答えるかが人間に課された課題です。

性本能、性欲の問題は、そのような構造において把握されます。

30 June 2014 : サロメとマグダラのマリア.



L'Apparition :

Salomé et la tête de Jean-Baptiste

Gustave Moreau (1826-1898)



Sainte Marie-Madeleine

et le Christ en croix

Claude François,

dit « Frère Luc » (1614-1685)

精神分析において陥ってはならない誤りは、心理学的にものごとを考えて
しまうという誤謬です。

例えば、心理学的に考えては、なぜサロメが洗礼者ヨハネを、なぜマグダラのマリアはイエスを欲望したのか了解はできないでしょう。

女性の欲望、性欲については、女性自身はなかなかみづから証言してくれませんから、芸術作品に準拠することになります。

福音書を文学作品と言うのは語弊がありますが、サロメとマグダラのマリアは、女性の性欲の例として注目されます。彼女たちはいずれも、生き生きとしたたくましい男性を欲望の対象としたのではなく、捕囚され、処刑される男を欲望しました。

小説家としては、Marguerite Duras と Elfriede Jelinek の名を挙げたいと思います。しかし、Duras の代表作「Lol V Stein の恍惚」の邦訳が中古本で数千円の値がついているのには驚きました。「愛人」と「北の愛人」は文庫本で手に入りますから、それらを読むのが良いと思います。Jelinek は「ピアニスト」しか読んだことはありませんが、邦訳は古本で安く手に入りますし、映画化されたものはレンタルで見ることができます。あのクライマックスがどう映像化されているのか知りませんが。

いずれにせよ、男でも女でも、性欲に関しては倒錯的であることに変わりあ

りません。なぜなら、性関係は無いからです。

「性関係は無い」と「女は現存しない」は、多分、Lacan の命題のなかでも最も良く知られたものでしょうか？日本でも？

「性関係は無い」はずいぶんびっくりさせる命題かもしれませんが、さほど突飛なものではありません。Freud のリビード発達論の文脈で考えれば、つまり、Freud が想定したような性的成熟としての性器段階は無い、とLacan は言っているのです。Primat des Phallus 「ファロスの優位」と Freud が呼んだ「正常」な成人の性の発達段階はただの社会規範からの要請、想定にすぎません。

存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ において真理の座に置かれた ϕ は、直接的にはこの「性関係は無い」に由来します。

性関係は無いのですが、性的と呼べるような満足が無いわけではない。それをLacan は「剰余悦」le plus de jouir と呼んでいます。それをただ単に「悦」jouissance と呼ぶこともあります。用語や表現の厳密さから言えば、もうちょっと気をつけて言ってほしいと頼みたくなりますが、この明治生まれのじいさんはお構いなしでした。

ここでも、用語に捕らわれるよりは、形式化された記号、学素 a を以て考
える方が迷うことはありません。

ともあれ、性関係は無い、その無い性関係の代理物、代理品（それらの表
現には、「まがいもの」というニュアンスがこめられています）として、剰余悦
 a が、欲望の客体、欲望の原因客体として現れてきます。この原因という表
現もかなりの注釈が必要ですが、別の機会に説明します。

Jouissance の概念について御質問をいただきました。ありがとうございます。

Lacan のテキストのなかには幾つかの種類の *jouissance* が見出されます。
まず *jouissance phallique* は、*signifiant* に媒介された悦です。*Jouissance
de l'Autre* の用語を Lacan は一義的に用いてはいませんが、1947-75 年
の *Séminaire RSI* の図において *jouissance phallique* とは区別されて、*le
symbolique* の位の外に位置づけられている限りで、それは *signifiant* に
よって媒介されていないものと見なされます。しかし、*le réel* と *l'imaginaire*
との交わりである *jouissance* とは、いったい如何なるものでしょうか？もしか
したらそれは *jouissance mystique* と呼べるものかもしれません。

01 July 2014 : ファロスについて; *aliénation* について.

Jouissance phallique と *plus-de-jouir* との関係についての考察を送ってくださった方に感謝します.

Lacan の *phallus* の概念は複雑です. 実在 *le réel*, 影象 *l'imaginaire*, 徴象 *le symbolique* の三つの位に沿って整理するなら, わたしが ϕ の学素を以て形式化するものは, 実在的ファロスです. 学素 $(-\phi)$ は影象的ファロス, 学素 Φ は徴象的ファロス, と識別することができます.

Jouissance phallique においてかかわるファロスは徴象的ファロス Φ です. そして徴象的ファロスは, 男女の性別の問題にかかわってきます. それに関しては, 先日二つの短い日本語論文を公表しましたので, 御参照ください.

Jouissance phallique は, 男性的悦として, 精神分析治療に対して抵抗を成します. Freud が Adler を引用して「男性的抗議」と呼んだものです. その本質は去勢不安です.

Jouissance phallique を取り上げる前に, 剰余悦 *plus-de-jouir* についてよ

り詳しく見て行きましょう。

質問者の方がおっしゃるように, Lacan が α と呼んだものの構造は, 剰余悦の構造に他なりません. ここで剰余悦の構造と呼んだものは, 存在の真理の現象学的構造, つまり, $\frac{a}{\phi}$ の構造です. この構造は, 性関係が無いことによる源初的な十全たる悦の不可能, 不可能な悦 — それは, 存在と等価なわけですが —, それを, 症状の徴示素である a が代理をするということにおいて, 代理満足としての症状の構造であり, また, 徴示素 a が客体 a とも呼ばれるように, 欲望の客体, ないし, 欲望の原因客体の構造でもあります.

同じひとつの構造が主体の構造であり, かつ, 客体の構造でもある, という事態を, Lacan は *aliénation* 「他化, 異化」と呼んでいます. その語には, 狂気, 精神疾患という意味もあります. つまり, 主体自身の本源的な構造であるものが客体として現れてくるということが, *aliénation*, 狂気 — つまり, 神経症, 性倒錯, 精神病 — の本質です.

精神分析は, この *aliénation* を解消しなければなりません. 狂気から人間を救わねばなりません. そして, 人間が本源的なしかたで, 本自的なしかたで, 要するに, 本来の自己にかなったしかたで実存するようにしなければ

なりません。Aliénation の状態から自己本来の状態へ生まれかわること、それが精神分析における救済です。

女の存在構造は、その救済により近いところにあります。男の場合は、まず jouissance phallique を forclore することから始めないとなりません。

Kierkegaard と去勢について非常に興味深い考えを紹介していただきました。ありがとうございます。彼の「不安の概念」は Lacan のお勧めの本のひとつですが、わたしは残念ながらまだ読んでいません。

不安に関しては、「存在と時間」の不安論も是非参照してください。

02 July 2014 : 学素 ϕ ; ハイデガーと存在の歴史 ; 心理, 意識, gender 等の概念は形而上学的誤謬である.

ϕ を $\$$ や A のように抹消するのは, わたし独自の工夫です. Heidegger が Sein をバツ印で抹消しているのに倣いました. 確かに, Lacan のテキストのなかに $(-\phi)$ が imaginaire なものとしてではなく réel なものとして用いられていると解釈することができる下りがあります. しかし, $(-\phi)$ は「去勢の影象的な関数」であると Lacan は 1960 年のテキストで明確に定義していますから, 混乱を避けるために, $(-\phi)$ とは異なる学素 ϕ を用いたいと思います.

Heidegger に Nazi やユダヤ嫌いのレッテルをはって批判したつもりになっている人々がありますが, Proust が既に文学批評について「作家と作品は別次元のものであって, 作家の人格や伝記に基づいて作品を評するのは見当違いだ」と言っていたように, Heidegger の Denkwerke — 思考の作品と言ってはちよつとしっくりしませんが — 思考の業(わざ), 思考の所業は, 彼の政治的思念とは切り離して評価されるべきです.

こんなことを言うのも, Heidegger avec Lacan に対して, Heidegger は Nazi だと批判されたりしないか, とコメントをもらったからですが.

Heidegger は非常に広い視野で考えました. いわゆる思想史を「存在の歴史」と捉え, 彼が第一の源初と呼ぶ前ソクラテス期から始めて, プラトンに始まる形而上学, ニーチェにおけるその満了, 形而上学に必然的に伴うニヒリズム, そして, 今もなお, 我々はニヒリズムのまっただなかにいること, しかし, 科学技術の本質を為す Gestell 「総召集体制」は, 新たな源初, 第二の源初の前ぶれとなるだろうという預言に至るまで, Heidegger は見通しました.

今や, 資本主義の本質である資本の言説の限界は明らかです. 全体的に見れば, 経済成長の可能性はもう残されていません. そして, Fukushima は, 科学の言説のほころびを今や明らかにしました. 資本の言説と科学の言説は, 総召集体制の二本の柱です. それらが破綻しつつあることが今や明白になってきました.

総召集体制体制の崩壊と, それに続くかもしれない何らかの再生と. それは, 精神分析の主体の死と復活による救済と, 構造論的には等価です.

精神分析などにかまけていて, つまり, 自分のことにだけ気をとられていて, 社会の現実を見ないでどうする? これは, Lacan の時代から精神分析に

向けられていた批判でした。sex のことばかり考えていてどうする？無駄口をきいていないで、街頭に出て行動せよ！1968年ころは、そんな雰囲気でした。

ある意味で、三島由紀夫もそんな雰囲気に巻き込まれてしまったのかもしれませんが。自分の殉教によってニヒリズムの超克のきっかけを与えることができるかもしれないと彼は思ったかもしれません。

しかし、社会の構造と、主体の構造は、おなじ学素で形式化して捉えることができます。それが Lacan の学素の強みです。そして、Lacan の学素にそのような可能性を読み取るためには、Heidegger の広い視野が必要です。

心、心理、意識、等の概念はすべて、形而上学的誤謬です。

性の問題をいわゆる gender という社会学的概念に還元して、社会的役割といった視点から考えるのも、社会学的誤謬、ひとつの形而上学的誤謬です。

男女の平等をめざすとすれば、それは、女性がファロスを得ることによって

ではありません。むしろ逆に、男がファロスを捨てることができなければ男女の平等は達成されません。

そう断言し得るのは、Lacan に準拠してです。

性の問題、性欲、性本能の問題の出発点は、Freud が気がついたひとつの根本的な不可能です。絶対的に除去し得ない、制止できない、満足させることのできない何か人間の本有の核にある。この洞察が、精神分析の主体の構造論の出発点を成します。その不可能性を、本能、欲動、欲望、その他、いかなる用語で考えようとするかは、どうでも良いことです。重要なのは、その不可能という實在 *le réel* を、構造論的な穴として見定めることです。言うなれば、それが *alpha* であり *omega* です。

03 July 2014 : 資本の言説と科学の言説；存在論的な穴；ハイデガー・ラカン定理.

「資本の言説」[le discours du capital] と「科学の言説」[le discours de la science] について御質問をいただきました. ありがとうございます. 両用語は Lacan のテキストに見出される表現ですが, Lacan 自身はそれらについて詳しく説明しておらず, それらの用語をどう解釈すべきか見解が分かれています. 特に, 科学の言説は多分, Lacan 自身が一義的には用いていないようです.

$$\frac{S_1}{\$} \rightarrow \frac{S_2}{a}$$

支配者の言説

$$\frac{a}{S_2} \rightarrow \frac{\$}{S_1}$$

分析家の言説

ともあれ, 「資本の言説」は「資本家の言説」 le discours du capitaliste に対する症状として捉えられます. 資本家の言説はひとつの支配者の言説であり, 支配者 S_1 を資本家, S_2 を労働者, $\$$ を断念された欲望 [versagter Wunsch], a を剰余価値と解釈します. それに対して, 蓄積された剰余価値が症状として agent の座へ出現してくると, 資本の言説が成立します. その場合, a は, ひたすら自己増殖を命ずる症状・超自我としての資本です. 資本の自己増殖という超自我命令が資本主義という狂気の本質です.

そして、その狂気は今やもう成り立たなくなってきました。

科学の言説においては、分析家の言説の能動者の座に位置する a は、科学の客体、つまり自然科学であれば、しかじかの研究の対象となる自然現象を表します。少なくとも Lacan の「科学と真理」という書においてはそう解釈されます。別の箇所では、科学の言説と *hysterica* の言説は同じだと Lacan は言っていたと思いますが、それをどう理解すべきか、まだ十分に考えていません。

$$\frac{a}{S_2} \rightarrow \S$$

この図は「分析家の言説」を若干簡略化したものです。Galileo は「自然は、数学の言語で書かれた書物だ」と言いました。この命題は、近代に始まる科学の最も基本的な前提的仮定を公式化しています。すなわち、科学の言説においては、存在の真理の座に、数学の言語で書かれた — すなわち、形式言語において形式化された — 知 S_2 が仮定されているのです。そして、科学の対象である諸現象 a は、仮定された知 S_2 を代理的に表しています。科学の営みは、現象 a を解釈して、存在の真理の座に仮定された知 S_2 そのものを数式の形 — ないし、それに準ずる形式化された形 — において読み取ろうとすることに存します。

質問：「存在論的な穴」と呼ばれているものは、「わたしたちの生にはどこからうまく行かないところがある、そのうまく行かなさを巡り sexuality が営まれる」という事態を生ぜしめるものだ、と言って良いだろうか？

そのとおりです。Freud が *das Unbehagen in der Kultur* と呼んだもの、また、我々個人個人が折々に経験する不安、不快、症状等々は、すべてこの存在論的穴にかかわっています。

そして、あらゆることをこの存在論的穴との関係において思考する必要があります。なぜなら、その穴こそ、*Es gibt Sein* と Heidegger が言うときの *Es* の場処、*Sein* の場処、*Sein* の場処だからです。

« *Es gibt Sein* » は、存在の真理の現象学的構造を言い表す公式です。*Es* がすべての中心です。

Sexualité に関しては、Lacan が *Séminaire XI* において示しているように、それをひとつの実体として捉えるのではなく、むしろ分解する必要があります。ひとつは客体 *a* であり、もうひとつは源、つまり、存在、*Es* です。それから、*sexualité* には性別 *sexuation* の問題が含まれますが、御存じのよう

に, *sexuation* を Lacan はまた別個に論じています.

『ハイデガーとラカン』の第一章では, 「ハイデガー・ラカン定理」とでも呼べる最も根本的な命題を証明してあります. 略して H-L 定理です. つまり, ハイデガーの存在とラカンの「性関係は無い」: \emptyset は等価であるということ:

$$\text{Sein} \equiv \emptyset$$

の証明です. 厳密に論証しようとする, 結構面倒です. ともあれ, それによって, 性関係の不可能を存在論的穴と捉えることができます.

H-L 定理は, ハイデガーとラカンを統一的に思考しようとするとき, その足がかりとなる基本中の基本の定理です.

Heidegger の Sein と Lacan の言う *jouissance* は同じものだという直観はずいぶん前から持っていたのですが, 厳密な証明を展開することができたのは Heidegger avec Lacan において初めてでした.

H-L 定理に準拠することによって, わたしたちは, 存在論的穴を見失わずにすむはずで, それがかとにかく一番大事なことです.

今日, Facebook での対話のなかで, 女にとっての欲望の客体に関して, Abélard と Héloïse のことが話題になって, びっくりしました. 御存じですか? Abélard (1079-1142) と Héloïse (1094-1164) は, いうなれば道ならぬ恋に陥り, それに怒った彼女の叔父ないし伯父によって, Abélard は去勢されてしまいます. そして, 二人とも別々の修道院に入ります. しかし, 二人の愛は持続し, 愛の手紙のやりとりが続きます. その書簡集は出版され, 邦訳は今でも岩波文庫で出ているそうです.

これは, 女がまさに去勢された男を欲望の客体にした典型例です. しかも, その書簡集が女性の間で今も愛読されている! 男は研究者でもなければ見向きもしないでしょう. 女が男において欲望の客体とするのは *phallus* Φ では決してないということを最も見事に例証するもののひとつでしょう.

このような歴史的証言のうちにも, 精神分析の終わりにおいて欲望は如何に生きられるか? という Lacan が *Séminaire XI* の最終部分で措定している問いに対する答えのヒントがあります.

通常の意味では決して成就され得ない愛を辛抱において生きること, それは「宮廷愛」 *amour courtois* と呼ばれているものも同じです.

そこにおいては何がかかわっているのか？存在論的穴をそのものとして支える、ということです。穴を塞いでしまうのではなく、穴を穴として在るがままに支える。それが、分析家の欲望と Lacan が呼ぶ欲望の生き方です。

それは、我々神経症者にとっては、分析を通じてようやく達成し得る状態ですが、特別な人々にとっては、分析経験の外においても達成されます。しかし、ひとりで、みづからの意志のみによって達成されるわけではありません。そこには必ず他 *Autre* と他 *Autre* の欲望が関与してきます。

Lacan は「精神分析の終わりに主体は聖人になる」という意味のことを言っています。カトリックでない人々にとって聖人という言葉はぴんどこないかもしれせん。日本語で聖人君子と言うのとは違います。聖人は、新約聖書において聖パウロにより定義されています。明日は聖人についてお話ししましょう。今日はこのへんで。

御質問、御意見、メッセージ等を御遠慮なくお送りください。対話は思考を活性化します。だからこそソクラテスは常に対話を好んだのです。

04 July 2014 : フロイトの自我の概念について; narcissisme について;
stalker と宮廷愛; 聖人について.

中井久夫先生の或る文章に関連して御質問をいただきましたが, あの手
の心理学的言説に捕らわれないようにしましょう. そこにおいては適切に問
いを立てることができませんから, 答えも見つかりません.

Narcissisme を論ずる前に, Freud が自我 *das Ich* と呼んだものについて
注意を促します. というのも, それは一義的ではないからです. 一方に『ナ
ルチスムスを導入するために』における自我があり, 他方に第二トピックに
おける自我があります.

分析家の言説の構造に準拠するなら, narcissisme との関連において論ぜ
られる自我は, 能動者の座に位置する a により形式化されます. 他方, 第
二トピックにおける自我は, 他者の座の $\$$ です. 第二トピックの理論では,
超自我と呼ばれるものが能動者の座の a に対応します.

Narcissisme との関連で覚えておきたい Freud の命題があります: 「彼ら
(精神病者)は自分の妄想を自分自身のように愛している」.

これは、「人間は自分の症状を自分自身のように愛している」と一般化され得ます。

Narcissique な自我も症状のひとつです。それらは皆、わたしが「症状の構造」と定義した学素： $\frac{a}{\Phi}$ により形式化されます。

自我という症状においては、 a は, symbolique なものとして捉えられたときには Ichideal 「自我理想」とよばれ, imaginaire な側面において捉えられたときには das ideale Ich 「理想自我」と呼ばれます。

ともあれ、「傷ついたナルシシズム」と中井久夫先生が呼ぶものは、この自我の構造が多かれ少なかれ破綻した状態、 a が Φ を十分に代表し得なくなった状態として理解されます。そのとき、確かに、存在論的穴が多かれ少なかれ口を開けることとなります。

Stalker への言及は、興味深い論点です。Stalker は自分の欲望の客体 a につきまといまふ。そこにおいては死の本能が野蛮なしかたであらわになります。Stalker は宮廷愛の対極です。宮廷愛においては、死の本能という存在論的穴をそのものとして辛抱することがかかります。Stalker はその穴に客体 a をまさに飲み込んで破壊しようとします。

Stalker とは、欲望の客体に拒絶されながらもつきまとう者のことです。宮廷愛 amour courtois の正反対です。

宮廷愛においては、不可能を不可能として、そのままに保つことが関わっています。言い換えると、存在論的穴を穴として守るのです。それは苦痛なことです。Heidegger も Schmerz, 疼痛, 苦痛という表現を使っています。しかし、その苦痛を通して、真の communion 「他 A との交わり」の悦へ至ります。喪失の穴を何かで塞がずに、純粹に穴として保つこと、それが宮廷愛の本質です。

それに対して stalker は、存在論的穴へ客体を言うなれば呑み込んでしまおうとします。死の本能(欲動)が野蛮なしかたで、攻撃と破壊の本能(欲動)として、歯止め無く活動します、Freud の言う unhemmbar そのものです。

Heidegger avec Lacan のなかで、存在論的穴のまわりをぐるぐると堂々めぐりする、という比喻を出しました。精神分析においても、宮廷愛においても、穴の周りをぐるぐると周り、その中心へまなざしを向け、それを穴と認め、改めて何か存在事象でその穴を塞ぐことなく、穴を穴として保持するということ

がかかわってきます。

聖人においても、同じことです。Lacan は、精神分析家と聖人は同じ者だと *Télévision* のなかで言っています。Lacan は無神論者だからそんなばかげたことを言うはずがないと疑う方は、*Autres écrits*, pp.519-520 を読んでください。Lacan はそこにおいて、新たに聖人が誕生するようにと懸命に考えている、と言っています。

では、聖人とは何か？日本でどの程度報道されたか知りませんが、今年 4 月 27 日、復活の主日の次の日曜日、二代前の教皇ヨハネパウロ二世と、1958-63 年に教皇だったヨハネ 23 世が列聖されました。ヨハネパウロ二世は生前から聖人のほまれが高く、ヨハネ 23 世は第二 Vatican 公会議を開いて、カトリックの刷新を図った革命的な人でした。この二人は最も新しく列聖された聖人です。

他に、皆さんが知っているとすれば、Lacan の *Séminaire XX* の表紙を飾っている *sainte Thérèse d'Avila* でしょうか？天使に槍で刺されて恍惚としています。最も有名な *mystique* のひとりです。

神秘主義という訳語はどうもいただけません。マルクス主義のような主義で

はありませんから。

以上のようなすごい聖人もいますが、しかし、新約聖書のパウロ書簡のなかで聖パウロが *saints* (複数形)と呼んでいる人々は、そのような意味での聖人ではありません。そもそも、列聖するという手続きができる前の聖人たちですから。

ああ、その前に、殉教者に触れましょう。日本にも聖人がいます。16世紀末から17世紀始めにかけてキリシタン弾圧のなかで処刑されたキリスト教徒たちです。古代ローマでも、キリスト教が公認される前は、多くのキリスト教徒が迫害され、処刑されました。それら殉教者たちの多くが聖人として崇められています。なかにはほとんど伝説上の人物としか思えない人もいますが。

殉教者という語については、Lacan が *Séminaire III* で言ったこの命題が有名です：精神病者は無意識の殉教者である。殉教者 *martyr* という語の語源であるギリシャ語は、証人という意味です。精神病者は無意識を証言する者たちである。どのように？彼らの症状を以て。

そして、キリスト教の殉教者たちは、身を以て神について証言した者たちで

す。身を以てというよりも、身を捨ててと言うべきかもしれません。ゴミのように、クズのように身を捨てて。（ゴミ、クズという単語も、Lacan は精神分析家に関して用いています。）

聖人は存在の証人です。

05 July 2014 : キリスト者の実存について.

聖パウロが彼の書簡のなかで *saints* 「聖なる者たち」, 「聖徒たち」と呼んでいるのは, 要するに, キリスト教信徒たちです.

聖書を読んだことのない人々のために解説しておく, 新約聖書は福音書だけではなく. 使徒パウロがそのときどきの宣教の必要に応じて一般信徒たちに書き送った書簡が非常に重要です. なぜなら, それらは西暦 50 年代に書かれた — つまりイエスの処刑から 20 数年後に書かれた — キリスト教文書のうちで最も古いものだからです. 福音書が書かれたのはそれより後です. 特に重要視されているのは, パウロがローマに暮らす信徒たち宛てに書いた「ローマ書簡」ですが, そのほかのものも劣らず重要です. Heidegger は, 1920-21 年の講義において, パウロの「第一テサロニケ書簡」の解釈を行っています. この書簡は, パウロ書簡の最初のもの, つまり最古のキリスト教文書です.

では, キリスト教信徒であるとは如何なることか? 定義のしかたはいろいろあるでしょうが, 最も簡潔な定義のひとつだろうと思われるものは, 御ミサのなかで *transsubstantiation* の神秘が祝われた後, 信徒たちが唱えるこの言葉です: *Mortem tuam annuntiamus, Domine, et tuam resurrectionem*

confitemur, donec venias.

日本では「主の死を思い、復活を讃えよう、主が来られるまで」という文言になっています。

フランスでは *Nous proclamons ta mort, Seigneur Jésus, nous célébrons ta résurrection, nous attendons ta venue dans la gloire.*

ラテン語を文字どおりに訳すと:「主よ、わたしたちは、あなたの死を告げ知らせます、あなたの復活を公言します、あなたが来るときまで」。

重要な言葉は、死、復活、「来る」です。

主イエス・キリストがこの世に再び来ることを、ギリシャ語では *παρουσία* と言います。この語はそのまま *parousie* と書かれて神学のテキストなどで用いられています。

「来る」は、「あなたが来るときまで」、つまり、主の来臨を「待つ」ということを含意しています。フランス語では明確に *attendre* 「待つ」という語を補っています。

神の死の喪の悲しみに耐えると同時に、イエスは永遠の命へと復活したことを喜び、そして、主が来ることを待ち望む。これがキリスト教徒の定義であり、聖人の定義です。

このキリスト教徒の存在論的構造こそ、Heidegger が本自的な実存と呼んだものです。

主が来るのを待つということが本質的ですから、『存在と時間』においては「存在の意味は時間だ」と Heidegger は言ったのです。

そして、待つことは、神の死の悲しみと苦痛に耐えることを含意します。辛抱という日本語はこの文脈において非常に雄弁です。辛さ、悲しみ、痛みを抱えつつ、それに耐えながら生きるということ。そのように生きているもの、そのように実存している者が聖人です。

そして、そのように生きることにおいて聖人は *παρουσία* の *ex-sistence* を証言しているのです。言い換えると、聖人は、その存在構造において、*παρουσία* を *ex-sister* させているのです。それが、Heidegger が *Ereignis* と呼ぶところのものです。

06 July 2014 : 読解不可能なことを思考し続ける; 精神疾患と精神分析;
父の名の閉出; folie, aliénation, forclusion.

幾つか御質問をいただきました. ありがとうございます.

まず『存在と時間』の邦訳についてですが, わたしが昔読んだものは絶版
のようです. 昨年新しい翻訳が出ているようですが, わたしはそれを見たこ
とはありません.

基本的に言って, Heidegger を読むためにはドイツ語を知る必要がありま
す. Heidegger のみを読むためにドイツ語を習得し, Lacan を読むためだ
けにフランス語を習得することは, する価値のあることです.

わたしが目にしたことのある邦訳は, Heidegger も Lacan も, それだけで
は何も理解できません. 原文を隣に並べて並行して読まなければ, 何も理
解できません.

そして, そのように並べて読むと, それらの邦訳が如何に誤訳に満ちてい
るかを発見するでしょう. ハイデガー全集の邦訳もその誤訳の多さは『エク
リ』に負けていません. ドイツ哲学や神学を専門的にやっている人々の手

によっても、Heidegger の邦訳はその程度の水準にしかかなり得ないのです。

はっきり言って、翻訳に時間をかける前に、原文をじっくり読み込むべきです。まず勉強会をやって翻訳してみようという姿勢は、日本のアカデミズムの悪しき伝統です。時間と労力の無駄です。翻訳しようとせずに、まず原文のレベルで読み取れることは何か、読解不可能なことは何かを把握すべきです。

鬱病に関する御質問をいただきました。精神医学領域の疾患としての Schizophrenie と躁鬱病は、常染色体優性遺伝の疾患です。それは臨床的事実です。それらの疾患の病因が心理学的レベルにあると考えることは nonsense です。

精神分析にとって有意義であるのは、精神分析はそれらの疾患から何を学び得るかと問うことです。

Lacan が「精神病」 psychoses と言うとき、彼の念頭にあるのは Paranoia と Schizophrenie です。そして、Lacan の精神病論と言えば「父の名の閉出」とくるのが tarte à la crème ですが、70年代の Lacan では話はそうは行きません。そのことには、性別に関して先日書いた小論のなかで若干触

れてあります.

結局のところ, 分析家の言説は, 支配者の言説における *signifiant maître* S_1 の生産の座への閉出により成立し, そしてその閉出は, 『精神病のあらゆる治療に対する予備的問い』における「父の名の閉出」の概念の一種の一般化です. 父の名 S_1 の閉出により, 分析家の言説における症状の成立が可能になる, と言えます.

閉出されたものは実在へ回帰する, と Lacan は言いました. では, 閉出された父の名は?

閉出された父の名は, ひとつには, 分析家の言説における真理の座へ存在として回帰します. もうひとつには, 閉出された父の名は, 症状の実在として, 能動者の座へ a として回帰します. この意味での父の名の閉出は精神病に限ったことではありません. 一種の一般化を見ることができると思います.

鬱病については, 日を改めて論じましょう.

昨日言ったことに若干付加するなら, *mortem tuam annuntiamus, Domine, et*

tuam resurrectionem confitemur, donec venias の confiteor は、「告白する」です。

主の復活は現に起きました。我々はそのことを証言します。

confiteor は、あることを認めて、それを言表するということですから、「証言する」です。annuntio 「告げ知らせる」も「証言する」です。

神の死と復活を証言する者として生きること、それがキリスト教徒的実存であり、聖人的実存です。

殉教者の原義が証人であることは前に触れました。殉教者は文字通りに身を捨てて証言しました。Lacan は、精神分析においても同じことを要請しているのです。

forclusion と aliénation との関連について御質問いただきました。一般化された forclusion は aliénation(狂気)の可能性の条件である、ということだと思います。つまり、 S_1 が支配者(能動者)の座に居座っている限りは、 a が症状の剰余悦として能動者の座に出現することはできない、という意味で。

Lacan が 1946 年に folie と呼んだものと, 1964 年に aliénation と呼んだものは共に, 症状の構造の学素 $\frac{a}{\phi}$ により形式化されます. Lacan が folie という表現によって思考していたものは, 要するに精神分析における症状です. S_1 の forclusion は分析家の言説, つまり症状の言説において成起することです. そして, 症状の言説は folie の構造です. S_1 の forclusion 無しには症状の成起は可能ではありません.

07 July 2014 : 鬱と躁, 死と復活; 死の覚悟; 聖なる靈氣.

翻訳についてさんざん悪口を言いましたが、「翻訳する」という作業について言うと、その最大の過ちは、理解不可能なことを理解不可能なままに保つことが許されない、ということです。

Heidegger や Lacan に限らず、偉大な哲人の著書には必ず我々にとって理解不可能なことが含まれています。だからこそ、彼らは偉大な哲人なのです。

Heidegger は、偉大な哲人自身にとって思考不可能であったことこそ最も重要なことである、と言っていますが、我々にとっては、そのレベルに至る前に、或るテキストにおいて読解不可能であるところに非常に重要な、肝腎なことがひそんでいます。ですから、或る時点で理解不可能なこと、読解不可能なことは、そのようなものとして頭のなかに保存し、おりにふれてそのことに関して思考し続ける、というようにするのが望ましいことです。

ところが、翻訳するとなると、しかも、それを出版するとなると、編集者はそんな悠長なことは許してくれません。ここは翻訳不可能です、と言いわけることは許されません。理解できないままにわけのわからない訳文にしてお

くことも許してくれません。

一番いけないのは、訳者または編集者が、適当に意味の通ずる訳文をでっちあげてしまうことです。それでは、訳文を読む者に、ここでは理解不可能なこと、理解困難なことが語られているのだ、ということ伝えることすらできなくなってしまいます。

重要なのは、或る時点で読解不可能なことは、読解不可能なこととして記憶のなかに保存し、そのことについて繰り返し問い、思考し続ける、という態度です。それによってあるとき突然、ああ、あれはこういうことだったのだ、とひらめく瞬間が訪れます。無理やり翻訳してしまったのでは、その恵みは永久に断たれたままです。

精神医学に詳しくないかもしれない人々のために躁鬱病について若干捕捉しておきます。今は, bipolar mood disorder 「双極性気分障害」と呼ばれていると思います。わたしは数年間にわたって、躁鬱病の人々と日常的に接する機会に「恵まれ」ました。患者ではなく、職場の上司です。その人の父親も躁鬱病でしたし、その人の弟もそうでした。彼が躁状態のときには周りにはふりまわされます。鬱状態のときには静で、わたしのような下っ端の医者にとっては平和でした。躁鬱病の症例として日本で最も有名なのは作家

の北杜夫氏でしょう。彼が躁状態のときは、株投資に手を出そうとするのを
食い止めるために奥さんは大変苦労したそうです。そのような躁鬱病は、
遺伝性の疾患です。わたしの上司だった人についてだけでなく、わたしが
治療を直接担当した複数の患者さんにおいても、それは臨床的事実として
確認されています。

問題は、非専門家たちが或る人について彼ないし彼女は躁鬱病だ、とか
鬱病だと言うとき、それが本当に精神病理学的に真なる命題であるかは、
えてして不明だ、ということです。

また、過労などにとまなう鬱状態は、わたしが先ほど言った躁鬱病と同じ疾
患ではありません。

以上のような留保をつけた上で、鬱状態と躁状態を存在論的構造の観点
からどのように規定し得るか、と問うならば、精神病症状においては症状の
構造の解体が徴示素 a の増殖によって代補されるのに対して、鬱病では、
症状の構造の解体がそのものとして起こります。つまり、症状の徴示素 a
の脱落が起こり、存在 ϕ がそのものとしてあらわになります。鬱病におい
て自殺の危険性が高いのは、そのせいです。鬱は、単なる気分の落ち込
みではありません。言うなれば、鬱の患者は死神に取り憑かれてしまうので

す。なぜなら、存在の別名ですから。

自殺してしまう患者さんは、死の深淵の開いた口に呑み込まれたままとなってしまう人です。そこまで行かなくても、鬱状態の人は、何もできなくなり寝たきりになってしまうこともあります。それはまさに死者となってしまうようなものです。死者ですから、食事もとりませんし、眠りもしません。そのまま放置されれば、生理学的に文字どおり死んでしまいます。

それに対して、躁状態とは、そのような死からの復活の歓喜の表現です。病的な場合には、歓喜を通り越して、精神運動性興奮の状態へまで行ってしまいます。

鬱は喪の悲しみであり、躁は復活の喜びです。Lacan が「精神分析の終わりは躁鬱病への準拠において考えられる」という意味のことを言うとき、そのように理解された躁と鬱のことを Lacan は考えていたはずです。

死すべき存在は死と如何なる関繋を持ち得るのかについて御質問がありました。死との遭遇には、望ましいしかたと望ましくないしかたがあります。望ましいしかたは、死を覚悟することです。望ましくないしかたは、死に不意打ちされて、死に呑み込まれてしまうことです。

「死を覚悟する」とは、「死を予覚 *entwerfen, anticiper* する」ことです。

精神分析においては時間をかけて徐々にそのような覚悟の用意をしてゆきます。

Heidegger のような天才的な哲人は、精神分析ではなく、先哲との対話を通して同じような覚悟に至れるのでしょう。**Heidegger** は、自分の信仰、神との関係、そして、先哲を死の覚悟の手本として読み解くことを通じて、みづから死の覚悟に至ることができたのだと思います。そのようなことが可能なのは、みづから深い思考をすることのできる限られた人々だけだろうと思います。

三島由紀夫は、死を覚悟しながらも、覚悟、予覚の構造に存有し続けることができませんでした。このことは、三島における「父の名の閉出」を示唆しています。

死の覚悟において存有するためには、父の名ないし聖なる靈気の作用が必要です。

精神分析は死の覚悟を可能にするひとつの方途です。そして、死の覚悟にもとづいて、復活ないし解脱に至ることができます。

「聖なる靈氣」は、通常「聖霊」と訳されている *Sanctus Spiritus* のわたしなりの翻訳です。 *Spiritus, esprit, Geist* は「霊」ではなく「気」「精気」です。「精気」という語は若干使いづらいので「靈氣」としました。

「覚悟」は Heidegger の *Verstehen* 「了解する」のわたしなりの翻訳です。 *den Sinn des Seins verstehen* は、単に「理解する」「了解する」ことではなく、「本自的に実存する」ことです。それは、死の覚悟を要請します。

世人 [*das Man*] の *aliénation* から脱するためには、死の覚悟が必要です。世人という疎外ないし狂気から脱するためには、「世に対して死ぬ」ことが必要です。世人の存在様態から脱しなければ、死の覚悟が無ければ、本自的に生きることはできません。

08 July 2014 : 鏡の段階は特殊他化理論である；症状の解消と死・復活。

鏡の段階と *aliénation* との関連について御質問をいただきました。ありがとうございます。良い質問です。つまり、答えがいのある質問です。

Einstein の特殊相対性理論と一般相対性理論との関連に依託して言うなら、鏡の段階の理論は、特殊 *aliénation* 理論です。

鏡の段階と自我の成形に関して Lacan が主題的に論ずるのは 1960 年までです。彼が 1953 年に *signifiant* と *symbolique* の概念を彼の教えに導入した後は、鏡の段階の理論は、より一般的な *aliénation* の理論に包摂されることとなります。

日本における第一世代 *lacaniens*、その中には Lacan に関することについてわたしの師であった故三好暁光先生も含まれますが、彼らが Lacan について日本に紹介できたのは、鏡の段階の理論まででした。それもいたしかたありません。彼らは Jacques-Alain Miller による Lacan 読解に触れる機会がありませんでしたから。

すべての *lacaniens* にとって、Lacan の教えの全貌が何とか把握可能に

なったのは, Jacques-Alain Miller の努力のおかげです.

わたしは, Jacques-Alain Miller が大変充実した講義と séminaire を毎週欠かさず続けていた時期に Paris VIII に留学することができて, 大変幸運でした.

わたしが今していることは, Jacques-Alain Miller のまねごとにすぎません. つまり, Lacan のテキストを徹底的に読み込み, そのときどきに読んでいる部分を Lacan の教え全体のなかに位置づつつつ解釈し, 字面においては変わっているかのように見える Lacan の言表をとおして, 不変なもの, 根本的なもの, つまり構造を読み取るという作業のしかたを, わたしは Jacques-Alain Miller から学びました. その意味ではわたしは常に millérien です. たとえ今は, 彼の Lacan 解釈に必ずしも同意できないとはいえ.

さて, 鏡の段階についてですが, それは, 症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ において a が影象的なもの, つまり影象 image である場合の話です. 鏡の段階の理論は, 存在としての主体 ϕ の影象的他 a との同一化により自我の成形を説明するものです.

徴象の位 *l'ordre du symbolique* と徴示素 *signifiant* の概念を導入した
1953 年以降, つまりローマ講演以降, 鏡の段階の理論は, より一般的な症
状の構造の概念のなかに包摂されます. そこにおいては, *a* は *signifiant*
であり, さらには *semblant* 仮象と規定されます. 何に対して仮象であるか
というと, 実在 *le réel* に対してです.

そして, 実在とは, 解脱実存 *ex-sistence* としての主体 ϕ です.

精神分析は, 自我無き主体を成起せしめることを目ざす, という意味のこ
とを Lacan は 1953-54 年に既に言っています. それは, *imaginaire* としての
a を純粋な穴としての *a* へと滅却することとして最終的に公式化されます.
そのことを Lacan は 1967 年に主体滅却 *destitution subjective* と呼んで
います. それは, *ex-sistence* 解脱実存そのものとして存有することであり,
要するに「解脱」と呼び得るものです.

精神分析的救済論において, そのような解脱を論ずることになるでしょう.

御質問くださった方, 納得できない点についてはさらに御質問ください.

「くだい」ということはありません. 納得のゆくまで徹底的に問いつめることが
本質的です.

症状を完全に解消することは可能なのかという御質問をいただきました。
可能です。我々自身がブッダやイエスの実存様態の域に達するならば。
(漫画のブッダとイエスのコンビのことを言っているのではありません。)

死は ϕ そのものです。そこから出発して、死を構造 $\frac{a}{\phi}$ において改めて
生きることが復活です。ただし、そこにおいて a は、imaginaire の側面を
伴う存在事象ではなく、純粋な穴としての a でなければなりません。それ
が、純粋な復活の悦です。

09 July 2014 : 学素 A について; hysteric の言説と女の性別; 大学の
言説と男の性別; 他化的同一化の多重性。

御質問をいただいています。Twitter という媒体の性格上、話が一貫して
いる必要は無いだろうと思いますから、そのときどきの対話に応じて話題が
あちこちに跳んでも全く構わないでしょう。

まず Autre と A の学素についてですが、わたしが“他 A ”と書くのは、単
に Autre と autre を区別するためです。いちいち「大文字の他者」「小文
字の他者」などの書くのは煩雑ですから。Autre は“他 A ”，autre は“他 a ”
です。これは Lacan のテキストを翻訳する際に利用している区別です。

学素 A の Lacan による定義は、「他 A のなかの欠如」[un manque dans l'Autre] です。

他 A は *trésor du signifiant* 「徴示素の宝庫」ですが、そこに欠けている徴示素があります。なぜなら、それは書かれ得ない徴示素 — 抹消されてしか書かれない徴示素 — だからです。

それをわたしは、 Φ という新たな学素を用いて形式化します。

欠如 A は、欠如 Φ そのものです。両者は相互に等価です： $\Phi \equiv A$

Φ も A も、分析家の言説の構造における左下の座、存在の真理の座に位置づけられる *ex-sistence* の学素である、と言えます。 A は、他 A の場処のなかの欠如という観点から思考された *ex-sistence* であり、他方、 Φ は「性関係は無い」の学素として定義されますが、両者が差し徴しているものは同じです。

さて第二の質問は *hysterica* 「ヒステリー者」に関するものです。四つの言説のひとつは *hysterica* の言説と名づけられています。それに対置される

のが大学の言説です。大学の言説は、したがって、強迫神経症者の言説と呼ばれてもよいのではないかとわたしは思っています。そして、hystericaの言説は、当然、女の性別公式と、強迫神経症者の言説である大学の言説は、男の性別公式と関連づけられるはずで

$$\frac{\$}{a} \rightarrow \frac{S_1}{S_2} \qquad \frac{S_2}{S_1} \rightarrow \frac{a}{\$}$$

hysterica の言説 大学の言説

ヒステリー症状の特色は、その著しい多様性と可変性です。そのことは、女の性別公式に基づいて説明され得ます。

女においては、存在論的構造の学素 $\frac{a}{\Phi}$ の a は、基本的に言って、純粹徴示素とも呼ぶべき 0 (zéro) そのものです。その構造は、或る意味で、精神分析の終わりにおいて到達されるべき純化された実存構造そのものです。

その意味において、 0 の代わりに仮象のファロス Φ が能動者の座に位置する男の存在構造は、救済ないし解脱から遠いのです。まずその仮象を閉出しなくてはならない、あるいは、その仮象が最後まで残って、滅却に抵抗しますから。

しかし、女性においても、まずもって、かつ大方は、*zéro* の開在はさまざまな仮象 *a* によって覆われています。ヒステリー症状の多様性と可変性は、仮象 *a* の多様性と可変性により説明されます。*zéro* の穴は、著しく反応性の高い官能基のように、またたくまに様々な仮象と結合して同一化を成り立たせます。他者の自我、他者の幻想、他者の欲望、さまざまな仮象との同一化が起こり得ます。

男の存在構造においては、仮象のファロス Φ への同一化が多かれ少なかれ確固たるものであるため、女におけるような同一化の多様性、可変性は見られません。

Lacan が *hysterica* の言説と名づけた構造そのものについては、明日以降、引き続き考えて行きましょう。

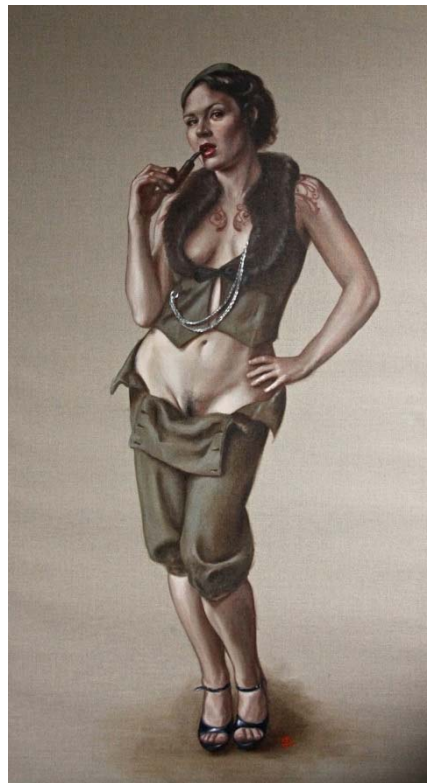
死と復活は輪廻のように反復されるのではないか、という御質問をいただきました。興味深い御指摘です。

精神分析の経験の最中には、そのとおり、死と復活は繰り返し起こり得ます。あるひとつの同一化が清算される時、喪の悲しみと、それと同時に、晴れ

晴れした喜びが訪れます。しかし、また次にほかの徴示素との同一化がすぐさま問題になります。症状の構造すなわち異化的同一化の構造においてかかわる徴示素は単一ではありません。Lacan は S_1 と同音語 *essaim* (群れ) という語を持ち出して、症状の徴示素 a はたくさんある、ということを示唆しています。ですから、異化の構造の解消は、タマネギの皮をむくように何回も繰り返されます。そして最終的に a がゼロにまで減殺されたとき、本当の解脱ないし救済が成起します。それは最終的なもので、唯一のもので、本当の復活は唯一であり、本当の解脱は唯一です。

10 July 2014 : まなざしの挑発.

<http://www.theguardian.com/lifeandstyle/2014/jul/07/painting-pornographic-pubic-hair-outrage>



Portrait of Ms Ruby May, Standing

by Leena McCall

昨晚ふと The Guardian 紙を見ていたら, ある展覧会に出されていた作品がその画廊の責任者の勝手な判断により撤去されてしまった, という記事が出ていました. 撤去の理由は猥褻性に存するとは明言はされなかったよ

うですが、そうであることに疑いの余地はありません。

しかし、猥褻であるのは、肖像画として描かれた半裸の女性の恥毛ではありません。彼女のまなざしです。見る者を見返す挑発的な、挑戦的なまなざしです。それによって、見る者は、Sartre が分析した窃視者と同じ状況に置かれます。つまり、のぞき見をしているところを、第三者に不意打ちされ、そして羞恥を感ずるという状況です。問題の絵は、のぞきの対象であったはずの女性自身が、のぞく者をまなざし返し、それによって、その絵を前にした鑑賞者に一種の居心地悪さを覚えさせます。それが撤去の本当の理由でしょう。

その記事を Facebook に投稿したところ、もっと直接的な行動に出た女性芸術家の事件を教えてくださいました。



<http://leplus.nouvelobs.com/contribution/1213853-j-ai-expose-mon-sexe-devant-l-origine-du-monde-mon-geste-n-a-rien-de-transgressif.html>

Courbet という画家の *L'origine du monde* 「世界の起源」(ないし宇宙の起源)という作品があります。女性の外性器だけを写實的に描いたものです。この絵は、かつて Lacan が所有していました。彼の Guitrancourt の別荘に飾られていました。ただし、普段は Lacan の友人の画家 André Masson が描いた別の絵で覆われて隠されていたそうですが、Lacan の死後、Musée d'Orsay に寄贈され、未成年者でも誰でも見ることができます

Courbet は女性の外性器の部分のみを描きました。つまり、上半身も顔も画面の外に置かれています。つまり、まなざしは描かれていないのです。

そこで、Deborah de Robertis は、Courbet の絵の前で自分の外性器を露出し、かつ、挑戦的なまなざして鑑賞者たちを見返す、という行動に出ました。彼女は、性器にまなざしを与えようと思いました。彼女自身、「わたしは性器によってまなざす」とコメントしています。彼女のまなざしが印象的です。

いずれの例においても、芸術作品として、あるいは、みずからを芸術作品にしたてる行動として、彼女たちは $\frac{a}{\phi}$ を体現しています。

しかし、分析家の言説の外における行動として見るとき、彼女たちの挑発的、挑戦的態度は、*hysterica* の態度の典型例と言えます。

Hysterica の言説について御質問をいただいていたから、考えてみましょう。

四つの言説のうち分析家の言説以外のもの、つまり、支配者、*hysterica*、大学の言説は、当然ながら、精神分析的状況の外で成起するものです。支配者の言説は排斥 *Verdrängung* (抑圧)の言説であると言えます。そして、*hysterica* の言説は、女の性別の公式と関連があると思われます。大学の言説は、強迫神経症者の言説と解釈し得るのではないかと考えています。そして、それは男の性別の公式と関連づけられるはずで

Hysterica の言説や大学の言説の構造のままでは、精神分析になりません。そのような構造のなかにいる主体を、精神分析の言説のなかに導入しなければ治療はできませんし、当然、救済や解脱に至ることもできません。分析の言説に入れば、*hysterica* でも強迫神経症者でも同じ症状の構造に位置づけられます。

分析的状況の外では、事態は異なります。Hysterica の言説では、まさに挑発と挑戦がかかわります。Hysterica は、右上の他者の座に位置する父 S_1 を挑発し、誘惑します。

しかし、hysterica はそれによって性的な満足を得ようとしているわけではありません。悦は彼女にとって不安以外の何ものでもありません。ですから、父は不能者でなければならないのです。

もし万一、 S_1 の立場にある男が hysterica の挑発にまともに答えようとする、つまり、不能でないファロスを以て応じようすると、hysterica は不安にとらわれて逃げ去ります。

Hysterica の言説において、 $\$$ が左上の能動者の座に位置しますが、これは、分析の言説において右上の他者の座にある $\$$ に hysterica は同一化している、ということを表しています。 $\$$ は、versagter Wunsch 断念された欲望です。

これは、Freud が『夢解釈』のなかで取り上げている hysterica の症例の分析にもとづいています。Lacan はその症例について論じています。Lacan の議論も非常に興味深いので、いつか紹介したいと思います。

11 July 2014 : いわゆる境界例としての *hysterica* の言説.

引き続き *hysterica* の言説の構造について考えてみましょう.

Hysterica はラテン語で「ヒステリー女性」です. フランス語で *hystérique* と言うと, それだけでは名詞か形容詞か, 女性か男性かも不明です. 日本語で「ヒステリー女」というと, 完全に侮蔑的なニュアンスが勝ってしまいます. ですから, Freud もときとして用いた *hysterica* を使いたいと思います.

さて, *hysterica* の言説は, 分析家の言説ではありません. つまり, 症状の言説ではありません. ということは, *hysterica* の言説の構造にある *hysterica* は, まだ症状を呈していないということになります.

かつて Jacques-Alain Miller は, いわゆる境界例 *borderline* は, 分析家の言説に入ることに抵抗している *hysterica* だ, とやったことがあります(いつどこで言ったかは覚えていません).

若干の留保は必要です. というのも, ちまたで境界例と呼ばれている患者さんたちの病理は単一ではないからです. 勿論, *hysterica* もいますが, *Schizophrenie* 発症寸前の人もあります.

ともあれ、境界例 *borderline* の概念がはやったのは分析家の言説が優勢でない地域においてである、ということは事実です。つまり USA と日本です。フランス等、分析家の言説が優勢な地域においては、いわゆる境界例は臨床的にほとんど話題になりません。要するに、聴く耳を持つ者がいるかいないかの問題です。

USA や日本のように *hysterica* に耳を傾ける者がいないところでは、彼女たちは分析家の言説に入ることができないので、*hysterica* の言説にとどまります。そうすると、典型的な症状は出ないかわりに、自殺未遂等の *acting out* が繰り返されます。

これは、父 S_1 に対する一種の挑発、挑戦です。Freud の症例 *Dora* にもそれは見てとれます。*Dora* は Freud に会う前、自殺未遂とまでは行かなかったものの、親に対して自殺をほのめかす言動をしていました。それを根拠に、*Dora* は *Hysterie* ではなく境界例だったというような議論をする人がいますが、見当違いです。彼女には、聴く者がいなかったのです。

Hysterica の言説においては、症状の徴示素 a は、自己秘匿としての真理の座(左下の座)に隠れています。神経症症状は、その言わんとするとこ

ろを聴こうとする者がいてこそ、初めて症状として現象します。Freud の前は、Charcot でした。聴く耳を持つ者にだけ、hysterica は症状を現します。

そして、分析家の言説のなかにいる hysterica は、自傷行為などをしようとすることはありません。

Acting out の定義に関して御質問をいただきました。

Acting out は厳密に定義された精神分析用語ではなく、精神医療の領域で漠然と用いられている表現です。一般的には、自殺未遂、自傷行為など、治療上望ましくない行動を指します。

わたしが先ほど使ったのは、分析家の言説の構造に入れないがゆえに起こる行動化という意味においてです。症状の構造は、分析家の言説の構造そのものです。存在の真理が症状により代理されない状況において、acting out は起こる、と言えると思います。

12 July 2014 : 芸術作品の本源; hysterica と「境界例」; 精神分析は主体滅却のために死の本能を利用する.

幾つか御質問をいただきました. ありがとうございます. まず, 芸術に関してですが, Heidegger は『芸術作品の本源』においてこう言っています : Im Werk ist ein Geschehen der Wahrheit am Werk. 芸術作品においては, 真理の成起が現動している.

要するに, 芸術作品の根本的構造は, 存在の真理の現象学的構造 : $\frac{a}{\Phi}$ そのものです. 芸術作品という客体 a は, 存在の真理 Φ を代表します. それが, 芸術作品の定義です.

芸術作品は, 絵画, 彫刻, 映像などのように, 芸術家自身とは異なる一種の独立した客体であることもあり, 演劇・舞踏などにおける俳優・ダンサーなどのように, 芸術家が身を以て芸術作品を体現することもあります.

いずれにせよ, 芸術作品という表象 a は, 存在の真理を, 鑑賞者 S に対して代表します.

そして, この構造は, 分析家の構造であり, そこにおいて成起する症状の

構造です。

しばしば芸術家は精神病理をかかえています。それは、精神病からアルコール依存、薬物依存に至るまで、さまざまです。自殺の危険性もあります。ある意味で、そのような精神病理をみずから癒やすために、芸術家は創造します。症状としての芸術作品を創造します。

鑑賞者は、そこに表現されている悦を、文字どおり享受します。鑑賞者は、己れ自身の存在の真理を、芸術作品という他化された形においてしか悦することはできません。

しかし、言うまでもなく、存在の真理をみずから芸術作品として創造するには、特別な才能が必要です。

フランス等の分析家の言説が優勢な諸国では、今や分析家の大多数が *lacaniens* です。興味深いことに、それらはカトリック諸国です。それに対して、プロテスタントが優勢な英米、ドイツ、そして、そもそも神を畏れない日本では、優勢なのは、分析家の言説ではなく、支配者の言説と大学の言説です。

支配者の言説と大学の言説が優勢な国々は、女性差別がまかりとおっている国々である、とも言えます。USA や英国で *féministe* たちが声を上げなければならないのは、それだけ女性差別が強いからです。日本では、*féministe* たちはようやく声を上げ始めたばかりです。

支配者の言説は父の言説であり、大学の言説は男の言説です。それらの言説が優勢なところでは、*hysterica* を聴こうとする分析家の言説は *marginal* であり、*hysterica* は分析家の言説に入ることができません。それゆえ、*hysterica* の言説にとどまらざるを得ず、精神科医からは *borderline* 扱いされることになります。

Freud の症例 Dora も、Freud と出会う前は自殺をほのめかす *borderline* であり、結婚後 USA に移住してからは、家族にとってお荷物以外の何ものでもない *borderline* 症例でした。

主体の存在の真理は、死の本能と Freud が呼んだものと等価です。死を拒絶したり否認したりするのではなく、死を通して復活へ至ることが、Lacan の教えに準拠する精神分析における目標です。死の本能を無視するのではなく、死の本能による主体滅却を精神分析の目標にします。

13 July 2014 : Hysterica と「境界例」に関する補足；大学の言説について.

Hysterica の言説について一点付け加えると、分析家の言説において真理の座に置かれた知 S_2 は、hysterica の言説においては、右下の生産の座に置かれます.

分析家の言説における S_2 は、主体の存在の真理の座に仮定された知、Lacan の用語で *sujet supposé savoir* 「知の仮定的主体」を表しています。主体の存在の真理の座において語る何かの知、つまり、無意識の知、それが分析家の言説における S_2 です.

それに対して hysterica の言説では、この無意識の知は、生産の座に置かれています。生産の座は、実は、閉出 *forclusion* の座でもあります。つまり、hysterica の言説においては、無意識の知は言説の構造から閉出されてしまっており、無意識の知として機能できません.

それが、borderline の本質です。いわゆる境界例においては、症状は形成されず、それとともに、無意識も機能し得ないのです.

いわゆる境界例を治療するためには、分析家の言説への導入が必要不可

欠です. ところが, いわゆる境界例となると尻込みしてしまう者が少なくありません. 自分が分析の経験をみづからしたことがなければ, いたしかたないことですが.

さて, *hysterica* の言説から, 大学の言説へ話題を移しましょう.

Lacan は, 支配者の言説は古代奴隷制社会における支配構造を表しており, 現代社会の支配構造を表しているのは大学の言説だと言っています. また別のところで, 旧ソ連 (Lacan の時代にはまだ現存していました) の支配構造は大学の言説だとも Lacan は言っています.

大学の言説は男の言説だ, と予備的に言いました.

大学 *université* という語は, ラテン語の *universitas* に由来します. そしてこの語は「全体」「すべて」*totalité* を意義します.

ソ連は全体主義でした. 今の中国もその典型例です. それらの国は非民主的と言われていています.

では民主主義は? 民主主義は *démocratie* です. *démo-* はギリシャ語の

δημος に由来します。δημος は貴族に対して平民であり、本来は被支配者です。つまり、支配者の言説の右上の座、奴隷の座に位置する S_2 です。民主主義とは、この被支配者たる平民 S_2 が支配者となっていることであり、ですから、実は、民主主義も全体主義と同じく、大学の言説、全体性の言説なのです。

議会制民主主義は、多数派を形成することによって運営されます。多数は「皆」です。そこから排除される者を必ず伴います。誰もが子供時代に学校などでこう言われた経験があるだろうと思います：「皆」はこうしているのだから、「皆」はこう考えているのだから、あなたもそうしなさい。これが民主主義の暴力です。

民主主義は「皆」を形成するために必ず排除される者を作り上げます。それは、ヨーロッパではユダヤ人であったり、USA ではアフリカ系市民であったり、歴史上さまざまです。そして、世界中どこでも、男は「皆」を形成するために女性を排除します。そのように排除された者を表すのが、大学の言説における右上の他者の座に位置する a です。

男の性別公式における $(\forall x) \Phi(x)$ 「すべての x について $\Phi(x)$ である」は、男がひとつの集合、ひとつの「すべて」、ひとつの「皆」を形成すること

を意義しています。それは、大学の言説において支配者の座に位置する S_2 , *universitas* です。

真理の座に隠れている S_1 は、Freud の『トーテムとタブー』の神話における殺された *Urvater* 「原父」であり、フランス革命で言えば、*Louis XVI* です。男の性別公式における $(\exists x) \neg \Phi(x)$: 「 $\Phi(x)$ ではない x が解脱実存する」は、そのような父を意義しています。

今や、資本の言説と科学の言説の破綻が明らかになり、あらたな時代への再生がまさに始まろうとしています。そして、今まで少なくともそれよりましな政治体制は無いと言われてきた民主主義も、実は排除の言説であることが明らかになりました。移民、外国人、少数者などを排除することは、「皆」を形成する民主主義の本質に属していることなのです。民主主義とも決別する 때가 近づいています。

ではどのような政治体制を選ぶべきか？ 政治学者でも社会学者でもないわたしには答えることはできません。しかし、理論的には、それは分析家の言説により形式化されるものになるのではないかと考えることができます。

自有 *Ereignis* として実存する $\frac{a}{\Phi}$ が支配者の座につく政治体制。それは、*nationalisme* も差別も無く、ひとりひとりが己れの自有・自由において

生きて行くことのできる社会であるはずですが。それは *démocratie* ではなく、言うなれば *idocratie* です。

どのようにすればそのような *politeia* が作り出されるのか、わたしにはわかりません。しかし、皆さんも考えてみてください。あるいは、John Lennon と共に *imagine* してみてください。

大学の言説における右下の座の \$ はどう解釈されるのかという御質問をいただきました。この \$ は、*hysterica* の言説において能動者の座にあった *désir insatisfait* 不満足な欲望としての *hysterica* の欲望と解釈されると思います。

Lacan は強迫神経症者においては、欲望は *désir impossible* 「不可能な欲望」だ、と言っています。大学の言説において閉出の座にある \$ が、この不可能な欲望に相当すると思います。

社会主義体制では、欲望を持つことはできないとされていました。物質的配分は「皆」が決めたのだから、「誰にも不満は無い」わけです。

勿論、実際にはそうは行かず、ソ連と東欧諸国は崩壊しました。中国もい

ずれその道をたどるでしょうが、その崩壊の際の影響ははるかに大きいでしょう。世界経済にとって壊滅的かもしれません。

isonomia という概念について貴重な御示唆をいただきました。Wikipedia でちょっと調べてみましたが、古代ギリシャで既に唱えられていた「法のもとの平等」だそうです。

はたして、真なる平等を実現し得るのは如何なる politeia か？それが問題です。

資本の言説 discours du capital について御質問をいただきました。Lacan もさほど詳しく論じてはいない主題ですから、lacaniens の間でもさまざまな解釈が為されています。わたしは、discours du capitaliste 「資本家の言説」は支配者の言説、それに対して、discours du capital 「資本の言説」は、症状の言説、超自我の言説としての分析家の言説の構造のものと解釈しています。

資本の言説において能動者・支配者の座に位置する a は、資本家の言説において生産の座に蓄積された剰余価値です。剰余価値は、排斥されたものの回帰としての分析家の言説の構造において、資本として能動者の

座に出現します。そして、資本は、資本の自己増殖として現象する事態が実現されるよう、奴隷の座に位置する $\$$ へ命令します:増やせ, 増殖させよ, と。 $\$$ は、悦することを断念した資本家の欲望です。資本の言説は、残酷無慈悲な超自我としての a が「悦せよ」と命令する症状の言説としての分析家の言説です。

今や、超自我としての資本の命令は、それに従うことが事実上不可能であることが明らかになってきています。利率がほとんどゼロであることがその証拠です。これについては、水野和夫氏の『資本主義の終焉と歴史の危機』が非常に示唆に富んでいます。一読をお勧めします。このような著作がマルクス主義者によって書かれなかったのが残念ですが。

14 July 2014 : 神の御国は近づいている；哲人政治と聖人政治；民主主義の言説は排除の言説である；神を畏れることを忘れた日本人。

来たるべき時代の *politeia* (政治体制)は、分析家の言説により形式化されるものだろう、と言いました。その場合、分析家の言説における存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\Phi}$ における a は、純化されていなければなりません。つまり、 a は、影象のものではなく、純粹に徴象のものとなっています。切れめ、ないし、穴そのものとなっています。それが Lacan が *sinthome* と呼んだものです。

sinthome は *symptôme*「症状」の古い書記です。そして、音の上では *saint homme* : 聖なる人間、つまり聖人と同音です。

存在の真理の現象学的構造において、 a が純粹な切れめ、ないし穴になる、ということが、死からの復活であり、精神分析の終わりとして目ざされるべきことです。

存在論的穴を、何か影象的なものによって塞ぐのではなく、純粹に徴象的な穴として保存し、その穴という欠如の苦痛に耐えること、それが聖人の実存です。それによって聖人は、神を証言します。

来たるべき政治体制, John Lenon が想像した理想的世界においては, すべての者が或る意味で聖人になっています.

Platon は, 哲人による支配を夢見ました. わたしたちは, 聖人の国を夢見ます. それは, つまり, 天の御国です. それをただ単に死後の極楽として空想するにとどまってはなりません. 各人が聖人として, 自有として本自的に実存するような polis, 神の都市 — どのようにそれは実現され得るでしょうか?

とにかく, 精神分析は, 支配者の言説, 大学の言説, hysterica の言説として形式化される支配と収奪と排除の構造を止揚します.

大学の言説に関して, 全体主義(つまり, ファシズム)も民主主義も大学の言論により形式化される, と言いました. そこにおいては, ひとつの「すべて」, ひとつの「皆」が形成され, それに対して, そこから排除される者が必ずそれに伴います.

今の子供たち, 若い人々は, 「皆」から排除されることを非常に恐れています. いわゆる「空気を読む」ことによって, その都度その状況で「皆」を形成

する雰囲気は過剰に適合しようとする。そこから排除されないために。

この現象は、ですから、日本の社会が非常に「民主的」であることの帰結です。しかし、それは、「すべて」や「皆」のファシズムにはかなりません。

分析家の言説においては、支配者の言説において排斥されたもの、大学の言説において排除されたもの、つまり a が、支配者の座に位置します。しかし、それは、超自我の声としてではなく、切れめ、穴そのものとしてです。

分析家の言説により形式化される来たるべき社会においては、各人が欠如の苦痛を辛抱せねばならないかもしれません。各人が、ほかの者ひとりひとりの苦痛を分かち合うことになるでしょう。それが隣人愛と呼ばれるものです。来るべき社会の素描は、2000 年前に既にイエスによって提示されています。

今こそ、神の御国は近づいたのです。つまり、各人が自有として実存する *politeia* の実現を準備すべきときです。

精神分析は、各人が解脱的に救済されるような *politeia* を実現するための方途です。

水野和夫氏は、日本は来たるべき社会の実現に最も近いところにいる、と言います。経済学的にはそうなのかもしれません。しかし、精神的にはどうでしょう？

今こそ、日本に精神分析の言説を確立するときです。今こそ、精神分析の「福音」を広めるときです。

「なぜ日本では精神分析が広まらないのか」と「なぜ日本ではカトリック(つまりキリスト教)が広まらないのか」のふたつの問いは、結局、同じひとつの問いに帰着するように思われます。それらの問いの答えは、「日本人は神を畏れないから」です。

始めからそうだったわけではないでしょう。1867年の最初の開国のとき、ないし、1945年の敗戦による第二の開国のとき以後のことでしょう。

日本で精神分析は精神医療の一手段と見なされてきました。フランスではそうではありません。日本の大学人は、Lacan を構造主義に属する思想家のひとりとし、構造主義の流行が過ぎれば、もう見向きもしなくなりました。しかし、フランスではそうではありません。

フランスと日本と、何が根本的に違うのでしょうか？フランス人は、Lacan の *spiritualité* に対する感受性を持っていた(少なくとも過去には)と思います。

日本で *spiritualité* を語ろうとすれば、哲学の用語ではなく、宗教の用語を用いざるをえません。そして、実際、精神分析において、仏教の言う解脱、キリスト教の言う救済がかかわっていないとしたら、現代社会において、精神分析にいったい何の意義があるでしょう？

15 July 2014 : 知が支配者である構造としての大学の言説について。

御質問を幾つかいただいています。まず、救済を語ることは、支配者の言説への逆戻りではないのか？次に、陰性治療反応は主体が救済を欲していないということを示しているのではないか？

質問において問われていることを考える前に、大学の言説について補足します。大学の言説における S_2 を、昨日までは、もっぱら「全体」と解釈してきました。しかし S_2 は知 *savoir* と定義されてもいます。

現代における支配の構造として、能動者・支配者の座(左上の座)に位置する知 S_2 は、高等教育を受けた官僚です。フランスでは ENA, 日本で

は旧帝大等の法学部を卒業して公務員となった者たちです。つまり、**bureaucratie** です。これは、旧ソ連も今の中国も日本も同じです。

官僚たちは、基本的に、自分たちの利益を追求します。さらに日本では国会議員の少なからぬ部分が 官僚出身者たちにより構成されています。彼らは、支配と収奪のための **know-how** を有しています。そのようなものとして、能動者・支配者の座に知 S_2 として居座ります。そして、特権階級として、ひとつの「すべて」、ひとつの集合を形成します。

民主主義には官僚支配がつきものです。フランスもそれを免れてはいません。日本では言わずもがなです。

知 S_2 が支配する大学の言説の具体例をもうひとつ挙げるとすれば、それは、精神医療の現場です。精神科医は、能動者の座の知 S_2 です。その知は、DSM のようなおそまつなマニュアルから精緻なドイツ精神医学の精神病理学の知に至るまでさまざまですが、とにかく、それらの知 S_2 は支配者として君臨し、観察対象、取り扱い (**treatment** は、取り扱いと治療と両方の意味を有します) 対象の患者 a を支配しようとしています。

当然ながら、そのような構造においては、主体の存在の真理を代表する症

状が現象する分析家の言説は成起し得ません。大学の言説である精神科医の言説に対しては、患者は *hysterica* の言説にとどまらざるを得ません。

医者は病気だけ診て、患者を見ていない、と言われてますが、精神科医の言説においては、医者は症状を見定めることすらできていません。なにしろ、精神科医の言説においては症状は現象し得ないのですから。

大学の言説とは以上のようなものです。

さて、御質問のあった「精神分析的救済論」に話題を移しましょう。

果たして主体は救われたいのか？この問いは、精神分析の主体の根本的な構造にかかわります。つまり、主体の分裂です。「...したい」「...を欲する」と言うとき、誰が欲しているのか？

Lacan は、人間の欲望は他 A の欲望である、と言いました。精神分析においてかかわる欲望、無意識的欲望は、他 A の欲望です。しかも、抹消された $A : A$ としての他 A の欲望です。それは、抹消された存在そのものです。

これ以上続けると長くなってしまいますから、明日続けることにしましょう。解脱・救済は、存在の真理の現象学的構造の解体、つまり、死を経ねばならない、とだけ言うておきましょう。

科学の言説について御質問をいただきました。Lacan が「科学の言説」 *le discours de la science* という表現を使うとき、一義的ではないと思われます。確かに、大学の言説を科学の言説と呼んでいることもあったと思います。知が支配者の座にあるという意味で。また、「先生」 S_1 が右上の他者の座に位置する *hysterica* の言説を科学の言説と呼んでいるくだりもあります。さらにまた、「科学と真理」という書においては、科学の言説の構造は分析家の言説の構造と理解されます。

科学の言説が、数学の言語で書かれた自然が言わんとすることを読み取ることであるとするなら、科学の言説の構造は分析家の言説の構造である、と言えると思います。つまり、真理の座に仮定された知 S_2 を代表する *signifiant a* をキャッチし、記録し、解釈することが科学の営みです。

分析家の言説においてしか症状が現れないということについて臨床的具体例を挙げるとすれば、Freud の「ネズミ男」の症例の一読をお勧めすます。この症例において強迫神経症の症状が明確に形成されるのは、精神

分析治療が始まってからなのです。

これはよくあることです。ですから、分析を始めたせいで病気が悪化した、
という非難も珍しくありません。

しかし、治療のためには、まず症状が出現しなくてはなりません。今まで十分にそれとして症状が出現していなかったところに、症状が「遠慮無く」出現してもらわなくてはなりません。そうでなければ、そもそも治療を始めることはできません。

症状は、それが言わんとしていることを聴く耳を持っている者に対してのみ姿を現します。その言わんとしていることを聴き取るのが精神分析的解釈です。

borderline と言われる症例においても、ほかのところでそう診断された患者さんたちを分析家の言説の構造へ導入し、つまり、聴く耳を以て聴くうちに、さまざまな症状、夢、等の無意識の成形が現れてきて、精神分析治療を進めて行くことができます。そうなれば、自傷行為はもう繰り返されなくなります。

16 July 2014 : 目覚めよと声は我れらと呼ぶ.

日本において、精神分析を新たな相貌のもとに提示しなければなりません.

今朝の新聞の或る記事のなかにこんな文章を見かけました:『*** などの著書がある臨床心理士の *** 氏は、首相の答弁には質問者の弱点を突く「攻撃型」と、用意した文書を読み上げる「官僚型」があると指摘する. 「いずれも首相の深い自己愛から生じているのではないか...』』.

日本では一般にこの手の心理学が精神分析だといまだに思われています.

精神分析家でない者、つまり、みづから分析の経験の無いままに精神医学や心理学の分野の者が書物から Freud やその周辺の著者らの言っていることを自分ができる範囲内で読み、精神分析用語らしい言葉をもてあそび、もっともらしいことを言う. それが日本で精神分析と呼ばれているものです.

彼らは、精神分析においては何が本当にかかわっているのかを知りもしないし、みづから経験したこともないのです.

彼らはたいてい、大学人です。大学の教師たちです。ですから、必然的に大学の言説のなかに位置しています。大学の言説は強迫神経症者の言説であり、男の言説です。

それに対して、精神分析は *hysterica* の治療から生まれたという歴史的事実があります。Freud は *hysterica* を治療するうちに精神分析を発明したのです。*Hysterie* は精神分析の母です。

性別と関連づけるなら、支配者の言説と大学の言説は男の側にあり、*hysterica* の言説と分析家の言説は女の側にあります。

精神分析的な意味における症状が形成され現象するのは分析家の言説においてだ、と言いました。

Lacan 自身は著作のなかではその用語を使っていませんが、予備面接 *entretien préliminaire* と呼ぶものを重視していました。予備面接とは、まさに、患者(患者を Lacan は *analysant* 分析者と呼びます; *analyste* は分析家です)を分析家の言説に導入することによって症状が十分に立ち現れてくるために必要な時間をさします。

予備面接の間に十分に形成されてくる症状こそが、分析されるべき客体、対象になります。

もし症状と呼べるようなものがその間に何も出現してこないとしたら、それは、患者が分析家とは転移の関係に入れなかったということです。

転移が成立しない理由はいろいろあります。いわゆる相性の問題は当然あります。それから、患者が精神病的構造の場合、症状の固着が強すぎて、分析家との転移が成り立つ余地がないこともあります。分析家の側が大学の言説に位置していれば、勿論、転移は維持され得ません。

もしあなたが精神分析を新たにしてみようと思って、始めて「分析家」のところに行ったら、最初にこう質問してかまいません：「あなたは自分自身、分析の経験をしましたか？誰としましたか？」と。失礼なことはありません。もし「分析家」がそれに答えなかったり、怒り出したりしたら、その「分析家」はみずから分析を受けたことはないと思ってまちがいありません。

また、日本では、日本精神分析学会の伝統のなかで教育分析を受けた分析家は、大学の言説の構造のなかにどっぷりつかったままのことがあります。そのような場合、本当に分析を受けたとは言えないこともあります。

いずれにせよ、そのような「分析家」たちを排除する必要はありません。彼らの商売を邪魔しようとは思いません。福音書にもこう書かれています：

ヨハネはイエスに言った：先生，あなたの名において悪霊を追い払っている者を見たので，やめさせようと思いました，彼は我々に従っていませんから。だが，イエスは言った：彼を妨げるな。そも，わたしの名において奇跡を行いながら，その直後にわたしを悪く言う者は無い。我々に反対していない者は，我々の味方である。(Mc 9,38-40)

Barthe も Lacan も日本における仮象の優位を指摘しました。日本では，社会的に認められた形式に従っていれば，不安を感じることは無いのです。あるいは，不安を感じないですむように，その場の「空気」を敏感に感じ取り，それに適合しようとします。

日本は，不安を感じずにすませるためのお作法が発達した社会です。ですから，神を畏れることを忘れていられるのです。実存的不安を感じずにすむのです。

Freud が初めて USA に講演旅行に行ったとき，「彼らは我々がペストをも

たらしに行くことを知らない」と言ったと伝えられています。「ペスト」は、実存的不安です。

日本において皆が巧みに避けて通っているそのような不安を、日本の社会に広めること。あらためて日本人に実存的不安を感じさせること。

精神分析が歓迎されるはずはありません。しかし、精神分析はニヒリズムの頂点を迎えようとしている今、唯一のではありませんが、可能な選択肢のひとつとして、日本にもあってよいものです。

救済と解脱の話が始めるのが遅くなってしまいましたが、キリスト教における救済にはふたつの側面があります。贖罪と復活です。いずれも他 A すなわち神との関係において可能なことです。

仏教においては他 A は関係無いでしょうか？そんなことはありません。

Buddha とは、目覚めた者です。いわゆる悟りのことを仏教用語で「正覚」と言います。

ブッダは、如何にして目覚めに至ったのか？少なくとも、その出発点にお

いて、彼は、「目覚めよ」と呼ぶ声を何らかの形で聞いたはずです。Wachet auf, ruft uns die Stimme. 目覚めよと声は我れらと呼ぶ。御存じのとおり、有名なコラールです。他 A からのそのような呼びかけがなければ、ブッダはブッダにはならなかったでしょう。

17 July 2014: 精神分析家は己れ自身によって己れを精神分析家として認定する.

2002 年のわたしの事件に関する御質問をいただきました.

わたしと分析をしようとする人には, 当然, わたしの事件のことを事前に知っておいていただかなければなりません.

わたしが「患者と恋愛関係」に陥ったとの御指摘ですが, それは事実ではありません. 「おがさわらクリニックにかつて通院していた女性」です. 当時, 治療関係には既にもありませんでした. しかも, その女性は実際には, 精神科医療を必要とする厳密な意味での病者ではありませんでした.

医師と患者ないし元患者との恋愛関係が職業倫理的に許されないのは, 以下の条件のもとにおいてだと考えます: 1) 医師が患者に対する自分の優位な立場にもとづき患者を利用しようとする場合; 2) 両者の関係が病状に悪影響を与える場合.

例えば, 教師とその教え子との恋愛関係についても, それが職業倫理上許されないのは同様の条件においてでしょう: 1) 優位な立場にある教師

が、その優位性にもとづいて教え子を利用しようとする場合；2) 両者の関係が教え子の教育学的状態に悪影響を与える場合。加えて、教え子が未成年ではいけないでしょう。

わたしのケースにおいては、それらの条件は全く当てはまりません。

わたしの事件に関して事実に反する記述は **Internet** 上にまだ残っています。いちいち訂正して行くことはしないつもりでしたが、御質問をいただいた機会に正確な事実をお伝えしました。質問者の意図は明らかに単なる嫌がらせにすぎませんが、あなたが意図せずにこのような機会を提供してくださったことに感謝します。

わたしが殺人罪で服役した経歴を持ちながらも敢えて精神分析家として仕事を続けるのは、精神分析がわたしの **lifework** だからです。**Lifework** とは、**存在**が請求していることです。

Lacan は言いました：精神分析家は己れ自身によって己れを精神分析家として認定する。

この命題の意味は、誰もが勝手に精神分析家を自認してよいということだ

はありません。「己れ自身」とは、精神分析を通じて到達し得る存在の処有という最も本自的なものです。

精神分析家が精神分析家であり得るのは、存在としての最も本自的な自己に基づいてのみです。誰か他者なり、何らかの認定団体、保証機関によるものではありません。

ですから、精神分析家にはあらかじめ自分自身の精神分析の経験が必要なのです。

「分析家である」« être analyste » という表現は、「分析の言説の構造において分析家として機能している」という意義と、存在論的意義と、両方を持ち得ます。

Freud は分析家として機能しましたが、存在論的には分析家であるとは言えません。彼の理論的な構築がそのことを証しています。

存在論的に分析家で在るということを問題にしたのは Lacan が初めてです。

そして, Lacan 自身, 自分は存在論的に分析家で在る(つまり, 聖人である)というところまでは行かなかったと認めています (cf. *Autres écrits*, p.520).

存在論的に分析家で在るようになるためには, いわゆる自己分析で済ますわけには行きません. 必ずみづからの分析の経験が必要です.

ここで, パレスチナとイスラエルの子供たちのために祈りましょう. 今回の武力衝突のきっかけは, 6 月にイスラエルの子供たち三人が誘拐され殺害されたことです. しかし, それはパレスチナで何十人何百人もの子供たちが殺されつつあることを正当化しません.

Facebook を利用している人は, わたしのページを見てください. Facebook を利用していない人は, *Le Nouvel Observateur* の site を見てください. 子供たちが殺された現場の映像が upload されています. 血を流す子供たちを見たくない人には勧めません.

ユダヤ教の YHWH とキリスト教の父なる神とイスラム教の Allah は同じ唯一なる神です. それを心得ていなければ, Freud も Derrida も読むことはできません.

今、頼まれて Derrida の *Mal d'Archive* を読んでいるところですが、Derrida も全く宗教的な哲人です。Derrida をまともに読んだのは今回初めてですが、ユダヤ教を抜きにして Derrida を読むことはできません。

ともあれ、パレスチナとイスラエルの子供たちを主が憐れんでくださいますように。天に召された子供たちの涙を主が御みづからぬぐってくださいますように。

このような悪を神はなぜ起きるがままにするのか？ Freud は第一次世界大戦に関してそう問いました。

今読んでいる Derrida の *Mal d'Archive* の mal も悪という意味を持っています。

イエス自身が信徒に教えた祈りとして「主の祈り」はキリスト教徒にとって最も根本的な祈りです。その短い祈りの最後の言葉は、*Délivre-nous du Mal* 「わたしたちを悪から救ってください」です。

しかし、悲劇はやみません。悪の問題を論ずるには、この場は狭すぎますから、別の機会にゆずります。

Derrida の *Mal d'Archive* が英語で *Archive Fever* と訳されているのには笑ってしまいました. なぜかという、この ... *Fever* はわたしくらいの年齢の者にはいやおうなく 1977 年の John Travolta 主演映画 *Saturday Night Fever* を連想させてしまうからです.

しかし, Derrida の言う *mal* はそんなものでは全然ありません. この *mal* は死の本能そのものを指します. Derrida は, Freud が死の本能を破壊本能, 攻撃本能と呼んだことをも強調します.

Derrida が *archive* と単数形で呼んでいるものは, 要するに *signifiant* です. そして, *mal d'archive* における *archive* は, 抹消された *signifiant* としてのファロスです. つまり, 症状の構造の学素における ϕ です.

Derrida のこのテキストにおける *archive* は, 能動者の座における徴示素 *a* と, 真理の座における抹消された徴示素 ϕ との両方をさしています. ちょうど Heidegger における存在の真理の現象学的構造において「存在」が「存在」を代表しているように:

$$\frac{\text{Sein}}{\text{Sein}} \equiv \frac{\text{archive}}{\text{-archive}}$$

悪は、存在の真理そのものに属しています。善も、存在の真理そのものに属しています。

存在は、その真理において、あらゆる対立を己れのうちに含んでいます。それが、現象学の秘密です。

わたしたちの心を引き裂く悲劇は、存在論的裂口の痛みをわたしたちに教えてくれます。その痛みを、酒や薬物でおしつぶしてしまおうとするのはひとつの否認です。祈りにおいて痛みを耐えねばなりません。それが本自的実存です。

18 July 2014 : 正覚と復活.

覚者と聖人と哲人と精神分析家は、いずれも、自有 Ereignis として実存する者と規定され得ます.

覚者のプロトタイプはブッダであり、聖人のプロトタイプはイエス・キリストです.

哲人は Denker 「思考する者」です。「思索者」とか「考える者」とかよりは「哲人」と呼ぶ方がすっきりしています.

哲学者 philosophe と哲人 Denker, penseur は必ずしも同じではありません.

「思想家」という表現を忘れていました. わたしの頭のなかでは「思想家」はほとんど死語ですが、一般的にはどうなのでしょう？

ともあれ、「哲学者」が大学等で歴史的哲学者の注釈のようなものを学生たちに講ずることを生業としている者を意義するなら、哲学者と哲人は異なります.

覚者と聖人と哲人になるためには、精神分析の経験は必要ありませんが、しかし、特別な神の恵みが必要です。仏教においては「神の恵み」でなく、何と云えば良いのでしょうか？ 特別に恵まれたカルマのおかげとでも？

しかし、そのような特別な恵みを受けていない我々のような人間にとっては、精神分析の経験は、自有になるためのひとつの手段です。そして、「自有になる」ことは、従来の宗教的な語彙で言うなら、「解脱」であり、「救済」です。

Heidegger と Lacan が用いている Ekstase, extase をどう翻訳するかを考えているうちに、わたしは「解脱」という語に行き着きました。

ekstatisch, extatique という形容詞は、存在の真理の座, ex-sistence の座にかかわります。ex-sistence の座は、徴象と影象、つまり仮象の座から見ると、外である場処です。Lacan は le réel 実在を ex-sistence と定義しますが、それは、そのように仮象に対して外であるものとしてです。

「解脱的」とは、仮象から解脱した外の座にかかわるトポロジックな形容詞です。

Ek-sistenz, ex-sistence を Existenz, existence から識別しようとするなら、単に「実存」でなく、「解脱実存」と訳します。

ブッダは覚者であり、解脱的に実存していますが、しかし、彼は死後になって初めて「成仏」したわけではありません。彼は、この世に人間として生きているうちに覚者となり、解脱しました。

ということは、単純に \emptyset そのものになったのではなく、ブッダも、存在の真理の現象学的構造において実存しています。ただし、一旦、涅槃の境地に達し、そして涅槃から復活したのです。

「涅槃に達する」とは、「存在の真理の現象学的構造、つまり、実存の構造が、一旦、解体する」ことです。

Heidegger は Destruktion という語を用いましたが、それを Derrida は déconstruction と言い換えました。

Lacan はもっとそっけなく séparation 分離と言います。実存の構造、存在論的構造が「解体する」とは、 a が \emptyset から分離することだからです。

☉ は「抹消された存在」であり、死そのものです。涅槃です。

そして、そこから復活が成起します。復活においては、 a はもはや全く影象的ではなく、純粹に徴象的な穴、裂けめのままです。

わたしは仏教の教理に精通していないので、「涅槃からの復活」に相当する概念が本当に仏教のなかにあるかどうか知りません。しかし、ブッダは覚者であり、目覚めた者なのですから、涅槃の眠りから目覚めた者と言えるかもしれません。もっとも、覚者は、我々の日常的な非本自的存在様態から目覚めた者であるとも言えます。ともあれ、仏教で言う正覚もひとつの復活である、と言えるだろうと思います。

仏教に「本覚思想」と呼ばれるものがあることを教えていただきました。ありがとうございます。大変興味深い概念です。

如何にして真如へ至り得るのか？真如は、存在の真理そのものです。これからじっくり考えてみましょう。

精神医療と精神分析との関係について御質問いただきました。フランスを

引き合いに出すと、一概には言えませんが、つまり医療施設ごとに異なりますが、精神科医、看護師、臨床心理士、social worker が皆、治療環境を分析家の言説の構造のものにしようと意図的に、積極的に努力している精神病院があります。そのような病院では、患者さんを単なる treatment（治療、取り扱い）の客体として見るのではなく、つまり、大学の言説の構造における a として患者さんを扱うのではなく、患者さんは、分析家の言説の構造の左上の座、能動者の座に位置する a になります。治療者側は、右上の座の $\$$ の立場に立ちます。 $\$$ は聴く者であり、 a が何を言おうとしているのかに耳を傾けます。それによって、治療者側はよりよく患者さんの症状を把握できるようになります。

一般的に言って、Schizophrenie や躁鬱病の治療においては薬物療法は必要不可欠です。しかし、薬をどう使うかが問題です。分析家の言説において症状を正確に把握すれば、病状に合わせてより適切な薬物療法をすることが可能になります。DSM などの診断マニュアルにもとづく精神医療は、大学の言説の典型例です。能動者の座にある知 S_2 としての医者が、要するに専門的知識 S_2 としての医者が、右上の被支配者の座にいる患者さん a を、出来合いの知 S_2 によって支配し、型にはめこんで行くだけです。薬物療法のしかたも紋切り型になります。

しかし、日本においては、要するに、精神科医にはヤブ医者がいかわらず多いようです。

先日相談を受けた或るケースは、かなり年配になってから発病した患者さんで、当初は鬱病であるように見うけられました。Schizophrenie の平均的初発年齢よりかなり高齢の患者さんです。Alzheimer 等でないことは明らかで、医者は鬱病と診断し、家族もそれに納得していました。しかし、数年間治療を続けても全く良くなりません。そのうち、家族の目からみて奇妙な言動がいろいろ出現してきました。家族はそのことを医者に知らせるのですが、医者は鬱病という先入観にとらわれて、いつまでも同じ処方を漫然と続けるだけです。わたしはその患者さんを直接診ていませんが、家族からその患者さんがどのような言動をしているかを聞くだけで明らかに Schizophrenie と診断されるケースであるにもかかわらず、主治医は新たに何もしようとはしません。そして、患者さん自身が、あの医者はヤブだと評しているそうです。まったく同感です。

どんなに良い薬が新たに使えるようになっても、医者が — しかも、街のかたすみで形ばかり個人開業している実質上現場から既に隠退したような高齢の医師ではなく、地域医療の中心的総合医療施設の精神科で診療を行っている中堅どころの医者が — このレベルでは、話になりません。

それが日本の精神医療のお寒い現実です。

19 July 2014 : 「境界例」について；本覚と解脱について；性倒錯について；存在論的穴について。

大変興味深い御意見，御指摘を幾つかいただきました。ありがとうございます。

まず「境界例」についてですが，厳密にはこの表現には括弧が付されるべきです。「境界例」と診断され得る人々は，単一の精神病理学的状態にあるわけではありません。一方には，分析家の言説の外に置かれたヒステリー神経症の人々があり，他方には未発症の *Schizophrenie* の人々がいます。つまり，典型的な精神病症状の無いまま，感情的不安定や極度の攻撃性などだけを呈している患者さんたちです。

そもそも *borderline* という用語は，まだ有効な薬物療法の無い時代，つまり，もっぱら精神療法が治療の主流であった時代に，精神療法ないし精神分析の経過の最中に精神病が発病するケースについて用いられていました。実存構造が比較的容易に解体してしまい，精神病症状によって代補される，そのような状態を *borderline* と呼んだのです。

ですから，今「境界例」と呼ばれている患者さんたちのなかにも潜在的に精

神病発症の危険性を持つ人々がいます。

「境界例」は単一同質の疾病概念ではありません。ですから、一概に言うことはできません。

Hysterica の言説から分析家の言説への転換は比較的容易に起こります。
なにしろ Hysterie は精神分析の生みの母ですから。

「境界例」が hysterica であるとすれば、精神分析への導入はさほど困難ではありません。

ただ、日本ではいわゆる教育分析を受けた者がフランスに比べて圧倒的に少ないので、治療者の側が尻込みすることはあるでしょう。治療者が教育分析を経験していなければ、いわゆる陰性転移に対しておじけづいてしまうでしょう。

攻撃性は、死の本能のひとつの現象形態です。Lacan は、死の本能を積極的に利用して、Freud 的な行き詰まりを打開することが可能だと提起しました。それにもとづいて彼は、精神分析の終わりを規定しました。

分析の経過中の攻撃性は、望ましくないものでは全然ありません。

精神医療の中核を成すのは、いわゆる内因性精神疾患、つまり **Schizophrenie** と躁鬱病の治療です。それ以外の精神病理学的状態の治療も、それに準じて行われます。そこにおいては、社会適応が基本的な治療目標になります。

躁鬱病においては実存構造の解体が起こり、**Schizophrenie** においては実存構造の解体が幻覚妄想症状によって代補されます。少なくとも不安定期には保護的な配慮が優先せざるを得ません。そのような態度が、精神医療の基本的態度になります。

そのような精神医療のなかには精神分析の居場所はありません。精神分析は、基本的に言って、精神医療の外のもので、フランスのように分析家の言説が優位なところでは、精神医療の現場が分析家の言説の構造を輸入しようという試みが為されることはありますが。

精神分析的救済論・解脱論を展開しようとしているところですが、それに関連する興味深い統計があります。先日ちょっと調べた日本のカトリックの人口において、男女比は 2 : 3 です。女性の方が有意に多いのです。日本

だけでなくフランスでもカトリック信者の男女比は 2 : 3 で女性の方が多いです。

女性の方が男性より神の御国により近いのです。男は, **signifiant Φ** との強固な同一化のせいで, 神の御国にも入りにくいし, 分析家の言説にも入りにくいのです。救いようがありません。

フランスの精神分析家の数の男女比の統計があるかどうかわかりませんが, おそらく女性の方が多いでしょう。彼女たちは非常に活動的・積極的です。日本にも数多くの女性の精神分析家が誕生してほしいものだと思っています。

日本の精神医療の現状について, 「男性治療者と男性患者とによる **signifiant Φ** を防衛するための集団的自衛権行使だ」という鋭い分析をいただきました。ありがとうございます。

性倒錯について御質問をいただきましたが, 先に, 昨日教えていただいた「本覚」に触れておきましょう。

本覚は, すべての人間に本自的に備わっている悟りの状態を言います。し

かし、日常性においては、まずもって大方は、本覚は煩悩により覆い隠され、我々は「不覚」の状態にあります。

ですから、煩悩を断つことが必要です。それは、羅刹天や不動明王の持つ剣によって象徴されます。まさに去勢です。

去勢、すなわち煩悩断ちによって達成される悟りは「始覚」と呼ばれます。目覚めることを目的にして始められた試みの結果として到達された「覚」という意味でしょう。

実存の構造の学素に依拠すれば、本覚は Φ そのものです。それは、煩悩 a により覆い隠されています。その場合の a は、純粹徴示素ではなく、影象的なものとしての a です。まさに自我にとらわれた迷いの境地です。

そこから脱するには、 Φ から a を切断せねばなりません。そのために仏教においては、厳しい禁欲が課せられます。それによって煩悩が完全に断たれた状態が涅槃です。

涅槃に達するということは、覚の状態に達したことであり、真如へと目覚めたということです。真如は、まさに存在の真理 Φ です。

涅槃からの「復活」という概念はそのものとしてはやはり無いようですが、始覚において涅槃に達するということは、死の先取りであり、生理学的死ではないわけですから、涅槃から始覚の状態への「復活」を考えてもよいはず
です。

始覚の状態においては、煩悩 a は断たれ、 a は純粹徴示素としての穴へ還元されています。仏教における救済、つまり解脱は、以上のように把握されると思います。

他 A の関与は明白ではありませんが、しかし、やはり、仏陀の慈悲や、仏法の守護神である羅刹天、不動明王の剣による助力が必要であるということとは含意されているのではないのでしょうか。そもそも、仏陀は人間を救済するために仏法を説いたのですから。

性倒錯に話を移すと、Freud は「神経症は性倒錯の **Negativ** だ」と言いました。神経症においては幻想という無意識的なシナリオにとどまっているものが、性倒錯では実際の行為として演ぜられます。

性倒錯も、症状の言説としての分析家の言説に位置づけられます。

性倒錯を精神病理学的に分類していると切りがありませんが、最も基本的なのは Fetischismus です。

Fetisch は、症状の構造としての $\frac{a}{\phi}$ における客体 a です。

性倒錯という病的なレベルの Fetischismus においては、性的興奮のために Fetisch がその場に現存することが必要不可欠になります。

Freud は、Fetisch は母親の欠如せる Phallus の代理である、と公式化しています。それは、症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ そのものです。

のぞきと露出においては、まなざしとしての客体 a がかわります。露出では、他 A のまなざしを喚起するために、自分の身体の一部をさらします。のぞきでは、自分のまなざしを以て客体 a を体現しようとします。

sado-masochisme においてかわるのは、声としての客体 a です。sadique は自分の声を以て客体 a を体現しようとします。声は、超自我の声のように、命令する声です。masochiste は、他 A の命令の声 a を惹起させることを以て、悦びます。

以上のように、症状の構造としての分析家の構造は、神経症、性倒錯、精神病、すべてにおける症状の構造を表します。

穴の概念について御質問いただきました。ありがとうございます。話しているとどうしても表現が雑になってきてしまいますが、わたしが「存在論的穴」と呼んでいるものは、正確には、純粹徴示素としての a そのものです。

徴象 *le symbolique* を Lacan は穴と定義します。それが存在論的穴です。

それに対して、 ϕ は、解脱実存 *ex-sistence* であり、実在 *le réel* です。

存在論的穴は、言ってみれば、この *ex-sistence* によってうがたれた穴であり、*ex-sistence* の場処のエッジ(縁:この漢字は複数の意味を持っているので、混乱を避けるために英語の *edge* を使いたいと思います)を成すものです。

21 July 2014 : 存在論的穴について.

「存在論的な穴」 le trou ontologique は, 「穴」ないし「切れめ」そのものと定義される限りでの徴示素 a のことである.

Lacan による a の規定は多様であり(『ハイデガーとラカン』第一章, 第二章を参照), Lacan のテキストにおいて a が論ぜられているときはその都度, 多様な a の概念のうちいずれの意味における a が問題にされているのか, 注意深く識別しなければならない.

1960 年前後の Lacan のテキストには le symbolique と signifiant a を「切れめ」や「穴」と規定する箇所が幾つか見出される.

徴象 le symbolique を「穴」と規定することは, 1974-75 年の Séminaire R.S.I. において改めて強調される.

そこにおける定義によれば:

l'imaginaire \equiv la consistance 影象 \equiv 定存

le symbolique \equiv le trou 徴象 \equiv 穴

le réel \equiv l'ex-sistence 実在 \equiv 解脱実存

「定存」consistance は, 影像 image が有する一種の「確かさ」, 「確固たるものであること」である. 画像処理に関する IT が非常に発展した今,

あたかもまさに image の明証性, 確固性こそがもつとも現実的なものであるかのごとき錯覚が蔓延している.

「穴」は, ex-sistence という Ab-grund [深淵, 根拠ならざる根拠, Seyn, Sein, 存在]のエッジを成すことによって ex-sistence を徴示する [signifier] ものとしての純粹徴示素 signifiant pur a そのものである.

「解脱実存」 ex-sistence は, 自己秘匿における存在 ϕ の真理である.

ところで Lacan は *Écrits* p.818 において学素 $S(A)$ を「他 A のなかの欠如の徴示素」[signifiant d'un manque dans l'Autre] と定義している. つまり, A は欠如であり, $S(A)$ はその徴示素 signifiant である. Saussure の学素 $\frac{S}{s}$ に代入すれば:

$$\frac{S(A)}{A}$$

徴示素の宝庫としての他 A の場処のなかの欠如 A は, 「常に欠けている徴示素」としての phallus が成す欠如, すなわち, そのものとしては書かれ得ない性関係の公式としての ϕ である:

$$A \equiv \phi$$

穴そのものである純粹徴示素としての a は, $S(A)$ と等価である:

$$S(A) \equiv a$$

つまり, a が純粹徴示素であるとき:

$$\frac{S(A)}{A} \equiv \frac{a}{\emptyset}$$

「存在論的穴」は, 徴象を穴と定義する際の「穴」であり, それは, $S(A)$ としての純粹徴示素 a のことである.

21 July 2014 : 精神分析の倫理について; Bien-dire と parrhesia ; 存在論について.

Lacan は「無意識は前存在論的なものである」と言っている, との御指摘をいただきましたが, わたしには思い当たる箇所がありません. 代わりに, わたしの頭に思い浮かんでくるのは, Séminaire XI (p.35) のこの命題です: 「無意識の地位は, 倫理的であり, 存在事象的ではない」« le statut de l'inconscient est éthique, non point ontique ».

ここで Lacan が「無意識」と呼んでいるのは, 存在 \emptyset そのもののことです. \emptyset は, 「抹消された存在」 das **Sein** そのものとして, 当然, ひとつの存在事象ではありません.

倫理に関しては, Lacan は「精神分析の倫理は l'éthique du bien-dire である」と公式化しています.

bien-dire という表現をどう翻訳するかはさておき, とにかく, 「言う」という行為がかかわっています. どのような「言う」か? それは, \emptyset を覆い隠すことなく, そのものとして **ex-sister** させ得るような「言う」です. この「言う」は, \emptyset が己れを示すことができるようにする「言う」です.

つまり、精神分析の終わりにおいて達成されるであろう我々自身の実存構造においては、 a は純粹徴示素へと純化されており、つまり、穴そのものになっており、 ϕ をそのものとして実存構造において守り保つことが可能になっています。

そして、実存構造は言語の構造です。言語は存在の住まいです。

ϕ がそのものとして住まうことができる言語の構造としての実存構造において自有することの義務、それが *bien-dire* の倫理であり、精神分析の倫理です。

無意識の地位は倫理的で或ると Lacan が言うときの「倫理」は、そのようなものです。

御教示ありがとうございます。確かに、Séminaire XI, p.31 に « la béance de l'inconscient, nous pourrions la dire pré-ontologique » とありますね。そして、p.32 の 1-2 行に « ce n'est ni être, ni non-être, c'est du non-réalisé » とあります。それらの文章は、さきほどわたしが引用した « le statut de l'inconscient est éthique, non point ontique » と合わせて考えてみる必要が

あります。

Lacan がこの 1964 年 1 月 29 日の séminaire の冒頭で「存在論」を問題にしているのは、その一週間前の séminaire の最後に Jacques-Alain Miller が — 当時まだ 19 歳だった Miller が — 「あなたの存在論はいかなるものですか」 « Quelle est votre ontologie ? » と質問したからです。その質問とそれに対する Lacan の答えの記録は残っていないようですが、

ここで「存在論」という用語にはこだわらないでおきましょう。重要なのは、むしろ「倫理」です。さきほど説明した意味での「精神分析の倫理」です。

「無意識」 l'inconscient という用語も、存在の真理の現象学的構造、つまり症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ における a のことである場合と ϕ のことである場合とがあり、Lacan を読むときにはその都度、どちらを指しているのか注意深く識別しなくてはなりません。

さきほどの Lacan の表現のなかで現象学的に有意義なのは non-réalisé という語です。

現象学とは、「そのものとしては常に己れを隠している存在 ϕ が、にもか

かわらず如何にして己れを顕すのか」を問うことです。ですから Heidegger は、「存在論は現象学としてしか可能ではない」と言っています。

この non-réalisé は、存在 \emptyset のことです。

存在 ~~das Sein~~ が如何にして存在 ~~das Sein~~ として己れを顕すか、それを問うのが Heidegger 的な意味での「存在論」です。つまり、かかわっているのは存在の真理の現象学的構造 $\frac{\text{Sein}}{\text{Sein}}$ です。

Lacan は Séminaire XI, p.31 で Miller に向かって、君が「存在論」という語をどういう意味で使っているのか知らないが、というような前置きをしています。そして、Lacan は、Miller がその時点で Heidegger を理解しているとは思っていないでしょう。

ですから、この pré-ontologique という表現には「存在論というような用語を振りかざす前に、よく思考しなくてはならないことがある。それをわたしは béance 裂口という用語で言おうとしているのだ」というような Lacan の考えが読み取れると思います。

わたしは Foucault は学生時代に『狂気の歴史』と『語と物』しか読んだこと

がないので、彼が *parrhesia* について思考していたということは初めて教えていただきました。ありがとうございます。

parrhesia は語源的には $\pi\alpha\nu$ と $\rho\tilde{\eta}\sigma\iota\varsigma$ から成るそうです。つまり、「すべてを言う」です。すなわち、Lacan が「真理をすべて言うことは不可能である」と言うときの「すべてを言う」です。この不可能を敢えて行おうとすることは、確かに、精神分析の倫理に適うことです。御指摘のとおり、*parrhesia* と *bien-dire* は関連しています。

いわゆる客体 a としての a は現象します。たとえば、乳房、糞便、まなざし、声という部分客体として。

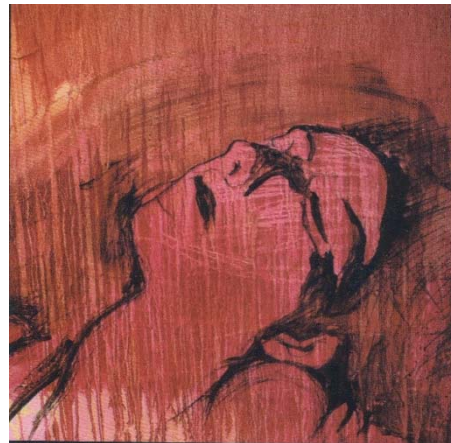
それに対して、「そのものとしては決して実現されないもの」は、自己秘匿における存在, *ex-sistence* としての ϕ です。

RSI のボロメオ結びにおいて a が三つの輪の *intersection* を成す中央部に置かれているのは、 a が R, S, I の三つに参与していること、つまり、影像でもあり、徴示素でもあり、物質でもある、ということを差し徴しています。 a は「症状の構造」である「存在の真理の現象学的構造」： $\frac{a}{\phi}$ における現象の要素です。

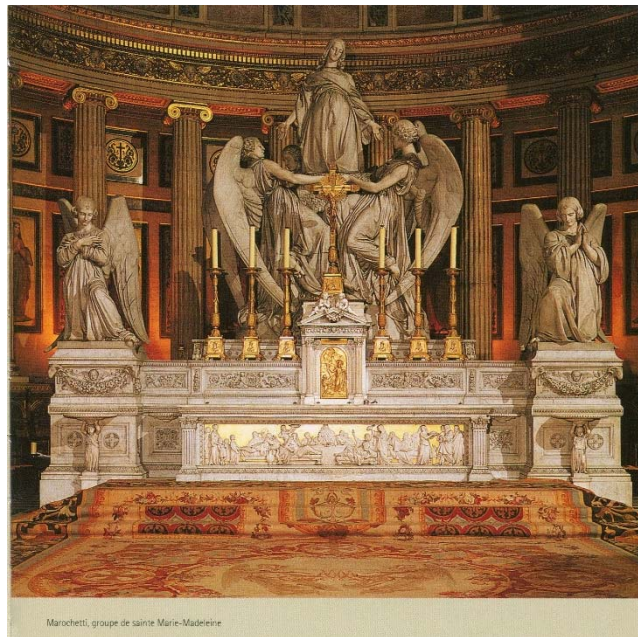
御質問, 御意見, メッセージ等, 御遠慮なくお送りください. 我々自身にか
かわる真剣な問いは, いくら繰り返し問うても「くどい」とか「しつこい」という
ことはありません. 徹底的に問うことが重要です.

22 July 2014 : phallus を形式化するふたつの学素 ($-\phi$) と ϕ の相違；
男が分析に入るためには； マグダラのマリア。

カトリックでは聖人ごとに祝い日が定められています。今日、7月22日は、
マグダラの聖マリアの祝い日です。



画像は、一方は Caravaggio が描いた恍惚状態のマグダラのマリアです。
他方は、Caravaggio の絵をもとにして単色で描き直したものです。ここで
は顔しか見えませんが、オリジナルと同じく上半身全体が描かれています。
この模写は、女性ラカン派分析家の第一人者 Colette Soler のところの待
合室に飾られています。結構大きな画面の作品です。



Paris にはマグダラの聖マリアを守護聖人とする教会があります。有名な Eglise de la Madeleine です。祭壇の向こう側に、輪を成す三人の天使に取り囲まれた Marie-Madeleine の大きな彫刻があります。今年、新年早々、Eglise de la Madeleine で行われたオルガン・コンサートを聴きに行きました。そのコンサートのときには、正月ですから、オルガンだけで Wiener Walzer が一曲演奏されました。点滅する照明の効果で Marie-Madeleine と天使たちが本当に踊っているように見えました。

今日、このように Marie-Madeleine のことを話すのは、彼女がキリスト教の聖人のなかで最も重要な、最も決定的な聖人ではないかと空想するからです。

つまり、聖霊の作用によりイエスを懐胎したのは、実はマグダラのマリアだとしたら？

その前に、回答しそびれていた質問に簡単に答えましょう。

精神分析において *phallus* を形式化する学素のうち、Lacan 自身が用いていた学素 ($-\phi$) と、わたしが新たに工夫した学素 ϕ との相違は何か？

Lacan は ($-\phi$) を「去勢の *imaginaire* な関数」と定義しています。この場合の「関数」は「相関するもの」です。それに対して、 ϕ は、*ex-sistence* としての実在です。*ex-sistence* を一貫して形式化する学素が Lacan のテキストのなかに無いので、 ϕ を作ったのです。

「救済」や「倫理」という用語は日本においては誤解や拒絶反応を招くのではないか、という御指摘をいただきました。確かにそのとおりです。しかし、ほかの用語で言い換えるわけにも行きません。むしろ、日常性のなかにまどろんでいる「世人」*das Man* としての我々にとって違和感を生ぜしめる言葉は、眠りを妨げる効果を持つかもしれません。

真理は、驚き、不安、無気味さ、不快を与えます。真理は、本当らしさよりは、むしろ、信じがたさとして現れます。ですから、第一印象において誤解や拒絶反応を招くとすれば、それは真理を語る言葉に対する当然の反応だとも言えます。

「天の御国は近づいた。回心せよ」という声を聞くと、多くの人是一种のいごこち悪さを感じるでしょう。誤解や拒絶反応も招くでしょう。しかし、真理を語る言葉とは、そのようなものです。

大学の言説と分析家の言説との関係について Lacan は *Radiophonie* の末尾でこう言っています:大学の言説は、分析家の言説への「前進」により解明される。(「前進」 *progrès* という語には括弧が付されています。)

この命題をどう解釈すべきでしょうか？まずは、大学の言説において真理の座に置かれていた支配者 S_1 が、分析家の言説では生産の座へ閉出されます。 S_1 は、或る意味で「父の名」です。「父の名」の概念は S_1 に尽きるわけではありませんが。

男が精神分析可能となるためには、まず「父の名」の閉出が必要です。男

の性別を規定する signifiant Φ を捨てさせねばなりません。さもないと、Freud が克服不可能な抵抗として行き当たった「男性的抗議」が最後に障害物となります。

「男性的抗議」は、signifiant Φ の閉出、すなわち去勢が惹起する不安に対する防御です。その防御をまず解除しなくてはなりません。そのためにも、分析家の言説への導入の際の予備面接の間に、十分に症状を出現させる必要があります。

分析への導入が困難なケースはいろいろありますが、最も困難なもののひとつは、「わたしは、全く正常で、症状も何も無いのですが、分析家になりたいので、教育分析をお願いします」と言ってやってくる比較的若い男性精神科医でしょう。

自分が全く正常だと思い込んでいる人間ほど狂った者はいません。

このような ケースは、まさに大学の言説にひたりきっており、場合によって、かなりの揺さぶりをかけないと、夢すら語ろうとしません。Lacan だったらけとばすくらいのことはしたかもしれません。

さて、救済や解脱の文脈で既に聖人にも言及しましたから、マグダラの聖マリアのことを考えてみましょう。これから述べることはわたし個人の見解であって、カトリック教会のなかにはわたしに同意する人は一人もいないと思います。

きっかけは、福音の物語の中には何故こんなにたくさんマリアがいるのかという疑問でした。福音の物語において最も重要な役割を担わされているマリアは、聖母マリアとマグダラのマリアです。ふたりともマリアと呼ばれているのは偶然でしょうか？

そしてもうひとつ、聖パウロが書いたもののなかには、聖母マリアもマグダラのマリアも言及されていません。何故でしょう？

新約聖書として集められた文書のうち、最も古いものは聖パウロの幾つかの書簡です。福音書はそれより20年から40年後に書かれています。

聖パウロは、復活したキリストは最初に使徒ペトロに現れたと言っています。ところが、福音書は四篇とも、復活したイエスに最初に出会ったのはマグダラのマリアだと言っています。この矛盾をどう考えるべきでしょうか？単なる見解の相違でしょうか？

そして、そもそも、聖母マリアが聖霊によって処女のままイエスを懐胎したという「神話」は、どう解釈され得るでしょうか？

ふたりのマリアは対照的です。聖母マリアは処女であり、無原罪のお宿り（つまり、マリア自身、原罪無しに生まれてきた）であり、清純さそのものです。

それに対してマグダラのマリアは、もと娼婦であり、罪深い女であり、その罪をイエスに赦していただいて涙します。彼女は、イエスの足に香油を塗り、自分の長い髪でぬぐいます。この場面は、イエスがみづから弟子たちの足を洗う場面と対を成していますが、それとは異なり、非常に *érotique* です。

このような両極端の現象を見たら、両者はその起源においてひとつであったらうと考えることは、しばしば有意義です。

より神格化されているのは聖母マリアですが、しかし、より人間的、より真実味があるのはマグダラのマリアです。

わたしはこう空想します。マリアはただひとり、マグダラのマリアであった。彼

女は心の底からイエスを愛していた。イエスは彼女にとってすべてだった。イエスの処刑により彼女はすべてを失った。その喪失は、彼女自身の死でもあった。彼女は、 \emptyset の深淵、死の深淵に至ったのです。まさにそのことによって、死からの復活が成起します。

彼女は、イエスの復活を *concevoir* したのです。復活したイエスを *concevoir* したのです。この *concevoir* という動詞は、「心のなかに思いつく、着想する」という意味と「懐胎する」という意味と両方を有しています。しかし、「思いつく」といっても、単に空想したわけではありません。イエスは、死に至った彼女のなかの欠如から純粹徴示素として復活したのです。それが、聖霊の作用による(つまり、肉体的性行為によらない)受胎 *conception* の神秘の正体ではないでしょうか？

イエスの復活の喜びをマグダラのマリアは使徒たちに伝え、彼らは直ちにそれを分かち合います。キリスト教の成立の瞬間です。

イエスの復活の後、マグダラのマリアは荒れ野に引きこもったと伝説は言います。パウロは、マグダラのマリアのことを知らなかったかもしれません。あるいは、イエスの復活を最初に述べ伝えたのが使徒の頭ペトロではなかったという事実をパウロは排斥しようとしたのかもしれません。しかし、結局、イ

イエスの復活の **conception** はマリアにおいて成起したという排斥された真理は、一方で「聖母マリアは処女のままイエスを懐胎した」、他方で「復活したイエスは最初にマグダラのマリアに現れた」という両極的分裂において回帰したのです。

キリスト教を知るためには何を読むべきかという御質問をいただきました。答えは勿論、聖書ですが、質問なさった方は「聖書以外の書物としては何を読むべきか」とおっしゃりたいのだと思います。これは難しい質問です。最良の本が何かは今すぐには頭に浮かんでできません。結局、やはり、詳しい注釈のついた聖書が最も良いのではないのでしょうか。文庫本でも何種類か出ていると思います。できるだけ詳しい注釈がついたものを選んでみてください。そして、まずは聖パウロの「ローマの信徒への書簡」を読んでみてください。新約聖書のなかで神学的に最も重要とされている文書です。

23 July 2014 : 自有 Ereignis について; 父の名について.

聖人, 覚者, 哲人, 精神分析家の実存構造ないし存在論的構造は, 自有 Ereignis の構造であり, そこにおいては a は純粹徴示素として穴そのものに純化されています. そして, そのような純化は, 死からの復活, 涅槃からの復活と呼ばれている出来事において成起します.

その場合, 死ないし涅槃と呼ばれるものは, ex-sistence 解脱実存, 存在 \emptyset のことです. 自有においては, ex-sistence の深淵を, その裂口が開いたままに守保することがかかわっています. そのように開いたままの裂口, それが純粹徴示素としての a , 穴としての a です. そのように ex-sistence を守保することは, 不安や苦痛を辛抱することであると同時に, 死からの復活の至福でもあります.

さて, 「父の名」 le Nom-du-Père の概念について御質問をいただきました. ありがとうございます. 或る意味で, それは Lacan にとって最も重要な問い, 最も問われるべき問いであった, と言えると思います.

Lacan が「父の名」に言及した最初のテキストは, 1953 年の「ローマ講演」です. そして, 1958 年の精神病についての書, それから, 1963 年 11 月の

一回のみ行われた「父の名」(複数形)についての séminaire, 1969-70 年の「精神分析の裏」, 1973-74 年の Les non-dupes errent (だまされない者たちは誤る: フランス語では les noms du pères と同音), 1975-76 年の Joyce についてのセミナー — 思い出すままに列挙しても, Lacan は彼の教えの出発点から最晩年に至るまで「父の名」に関する問いを問い続けたことがわかります.

なぜそこまで問題にしたか? それは, 「父の名」という用語を以て Lacan は神に関して問い続けたからです.

Lacan は無神論者だっと思われているかもしれませんが, 神について無関心であったわけではありません. むしろ, Lacan は, Heidegger と共に, 神を探し求めて, 神に関して最も真剣に問うた 20 世紀の哲人の一人であったと言えると思います.

ですから, 「父の名」について説明するためには, ひとつふたことではとても足りません. しかし, とりあえず, 手掛かりを幾つか挙げてみましょう.

まずは, 父の metaphora の式. 次いで, 支配者徴示素 S_1 . さらに, 男の性別の公式における $(\exists x) \neg \Phi(x)$ [$\Phi(x)$ でない x が現存する] の式. 最

後に、ボロメオ結びの第四の輪としての「父の名」。

それらが Lacan の教えに登場する時間的順序には従わないで、まず支配者徴示素 S_1 について考えるなら、それは、前性器的な部分客体における部分本能の満足を妨げ、phallus の優位のもとでの性器段階を成立させるものとしての父の機能を形式化している、と見なされます。

その意味においては S_1 は signifiant Φ と等価です。支配者の言説の構造は、 S_1 としての signifiant Φ との同一化の構造と見なすことができます。しかし、父の名の概念は S_1 に尽きるわけではありません。

1953 年のローマ講演において、Lacan は、父の名は徴象の機能の支えである、と言っています。徴象の位の機能の支えとしての父の名は、父の *metaphora* の概念から、ボロメオ結びの第四の輪としての父の名に至るまで、一貫していると思われます。

それに対して、神の名 YHWH としての父の名は、*ex-sistence* としての父の名です。

24 July 2014 : Φ と $\$$ との違いについて; 父の名としての S_1 について.

精神医学であれ精神分析であれ, もともと何らかの精神病理をかかえている者が興味を持ちやすい分野です. わたし自身にも当然あてはまります. だからこそみづから精神分析を受けたいと思ったのです.

Paris ではこんな話も聞きました. つまり, 小学校や中学校の教師のなかに小児性欲者がいることが避けがたいように, 精神科医や分析家のなかに精神病者がいることも避けがたい.

当然, 望ましいことではありませんが, 完全に防止することは困難です.

話は若干脱線しますが, カトリック司祭のなかにも同性愛者, 小児性欲者がいることは事実です. それがゆえの事件が起きており, 教皇は被害者に謝罪しています. 神学校では, 神学生が同性愛者でないかどうか非常に厳しいチェックが行われているそうです.

Φ と Lacan の $\$$ との関連に関する御質問ですが, わたしの推測では, $\$$ という学素を作り出すきっかけを Lacan に与えたのは, Heidegger の **Sein** だったでしょう (Heidegger は Sein を × 印[バツじるし]で抹消して

いますが、そのまま再現するのは手間がかかるので、**Sein** と表記します)。

Heidegger が出版物のなかで **Sein** を使ったときと Lacan が \$ を使い始めたときとの間には 2 年ほどの間がありますが。

Heidegger の「~~存在~~」は、当然、le réel 実在の位のものです。そして、まだ完全に検証していませんが、1958 年の書と 1962 年の書においては Lacan は \$ を実在の位のもの、つまり、 φ に相当するものとして用いています。

それに対して、1969 年に発表された「四つの言説」においては、\$ はそのものとしては ex-sistence としての主体を表す学素ではなくなりました。その切りかわりがいつ為されたのかは、まだつきとめていません。

ともあれ、四つの言説において \$ が ex-sistence そのものの学素ではなくなったので、Lacan のものではない φ という学素を新たに工夫する必要があったのです。

Lacan が「精神分析の主体」「無意識の主体」と言うとき、それは ex-sistence としての主体、存在としての主体、つまり、実在の位に位置づけられる主体です。

ただし、主体の分裂を Lacan は問題にします。主体の分裂は、 $\frac{a}{\phi}$ の構造においては、 a と ϕ との分裂と規定されます。つまり、己れを隠している主体 ϕ と、それを代表する signifiant a との間の分裂です。

この問題は、aliénation とかかわっています。

aliénation は「狂気」「精神病」と訳され得る単語ですが、マルクス主義の文脈では「疎外」と訳されます。そして、語源的には alienus に由来しており、「他の所有物になる」という意味をも持っています。

主体の存在論的構造であり、症状の構造である $\frac{a}{\phi}$ は、主体の存在の真理 ϕ が、主体自身ではない仮象の signifiant a により代理・代表される、言い換えると、 ϕ が a に同一化するという点において「他化」の構造であり、aliénation の構造です。

精神分析は、当然、aliénation を解消することを目的にします。それは、構造から a を分離し、滅却し、それによって、構造の能動者の座に位置づけられるものを穴にまで、つまり無にまで純化することによって為されます。

それは、神学用語では「贖罪」ないし「復活」と呼ばれる「救済」に相当する

ことです。そこまで到達すれば、聖人です。それは、主体が単独で為し得ることではなく、他 A との関係のなかで成起することです。

父の名について少し考えてみましょう。昨日、父の名の概念は単一ではないと指摘しました。まず、 S_1 としての父の名のことを考えてみましょう。

S_1 が能動者の座に位置する支配者の言説の構造は、オイディプス複合を形式化していると解釈することができます。いわゆる前オイディプス期、前性器期において部分客体 a が位置していた座を、父の名 S_1 が占領し、 a は閉出の座である生産の座へ排斥されます。

a が再び能動者の座へ回帰すると、排斥されたものの回帰として、症状の言説としての分析家の言説が成立します。

支配者の言説がオイディプス複合の構造であるとする、そこから大学の言説へ移ることが男の性別を決定し、*hysterica* の言説へ写ることが女の性別を決定する、と考えることができます。

分析家の言説において右上の他者の座に位置する $\$$ に関する御質問をいただきました。ありがとうございます。この $\$$ は、主体の存在の真理 ϕ

ではありません。

ϕ は, $S_1, S_2, \$, a$ の四項とは異なり, 四つの言説のいずれにおいても左下の真理の座に位置します. というより, 真理の座そのものの学素です.

それに対して $\$$ は, 四つの言説においては, *versagter Wunsch*, 満足を断念した欲望を表します.

25 July 2014 : 人生の目的について; ニヒリズムとその克服について; 自由について; 転移の構造について; 聖人について

Facebook で Slavoj Zizek について語るグループのメンバになっているのですが, そこで或る人が「Lacan 的な観点から言うと, 人生の目的は何か?」という問いを立てていました. 多くの人が真剣に答えて, 議論していました. とてもひとくちで答えられるような問いではありません.

或る人は「自由こそが生きる目的だ」と答えていました. しかし, 自由とは何でしょうか?

わたしは Lacan の言葉をふまえて, こう答えてみました: John Coltrane は「わたしは聖人になりたい」と言った. そして Lacan は「聖人があらたに実存するように, わたしは懸命に努力している」と言っている, と.

その後, 或る人は Zizek を引用しました: life is a stupid, meaningless thing that has nothing to teach you. 「人生は, ばかげた, 無意味なもので, 何も教えてはくれない」.

この手の発言は, 文脈から切り離してしまうと誤解を招きます. もとの文脈

がどういうものであるかは、わたしは知りませんが、Zizek が単なる nihiliste であるはずはありません。しかし、「人生は無意味だ」という言葉は nihilisme の言説の典型例です。もしそれが単純な悲観的ニヒリズムであるなら、克服しなければなりません。

前にニヒリズムについてちょっと触れましたが、Heidegger はニヒリズムの超克について真剣に考えました。であるがゆえに、Hitler と Nazi がニヒリズムの克服を実現し得るかもしれない、という幻想に一瞬とらわれてしまったのかもしれない。しかし、それは 1932 年前後の一時的なことでした。Hitler がいくら威勢の良いことを言っても、ニヒリズムは克服できるはずがありません。

現在、ヨーロッパでもアジアでも nationalisme の高揚が起きていますが、それも或る意味でニヒリズムに対する無効な悪あがきです。何か理想を振りかざしても、ニヒリズムは克服できません。三島由紀夫のように美を顕揚しても、ニヒリズムは克服できません。

では、ニヒリズムを超克するためにはどうすべきか？

Heidegger は、存在と無の本質を見定めることから始めました。

存在事象を存在事象たらしめているものが存在ですが、しかし、存在は、実は、*ex-sistence* として解脱的場処に位置づけられるものであり、存在事象から見れば、存在事象ではないものとして、無にほかならない。存在を存在事象と同様に論ずることはできず、存在は抹消されてしか書かれ得ない:存在。そして、存在、無としての存在は、世に生きている存在事象から見れば、死にほかなりません。

Freud が死の本能と呼んだものは、存在事象の存在が無であること、そして、その無の深淵は存在事象を呑み込み、破壊しようとしているという事態に対応しています。存在は \emptyset であり、他 A の場のなかの欠如としては A です。

分析家の言説の構造を図示した *aliénation* の図においては、*a* をはさんで、A と \$ とが対置されています。Lacan の公式:「ひとつの徴示素は、主体を、もうひとつのほかなる徴示素に対して代表する」において、「ひとつの徴示素」は *a* であり、「主体」は主体の存在の真理 \emptyset すなわち A であり、「もうひとつのほかなる徴示素」は \$ です。「ひとつの徴示素は主体をもうひとつの徴示素に対して代表する」という命題は、分析家の言説の構造にあてはまるものです。そこにおいて Lacan は、\$ は「聴く主体」であ

ると規定しています。何を聴くのかというと、他 A の言説である無意識を聴くのです。主体自身の存在の真理の場処において「何か語る」 *ça parle*, その声を聴くのです。その声は、主体の存在の真理を代表する徴示素 *a* です。

ニヒリズムから話がそれてしまいましたが、存在事象の次元でどうにかしようとしている限り、ニヒリズムは克服できません。今の日本ほど、存在事象が無意味、無価値であることが明白である歴史的状況はほかに少ないでしょう。存在事象の次元で、つまり、徴示素の次元で、何か目新しいものや、意味のありそうなもの、高邁な理想などを持ち出しても、それらの仮象性、欺瞞性はごまかしようがありません。

ではどうするか？存在事象を切り捨てるしかありません。主体の存在の真理が同一化している徴示素を切り離して分離するしかありません。そうして、無と死の深淵に一旦身を浸すのです。

それは、言うなれば、ニヒリズムを徹底的に突き詰めることだ、とも言えます。恐らく、先ほど紹介した Zizek の言葉も、そのような文脈において語られたものではないかと推測されます。

Heidegger が「自由」Freiheit と言うとき、ドイツ語でも英語でもフランス語でも frei, free, libre は「あいている」を意味します — そして、その場合漢字は「開, 空, 明」のいずれでも書けます — が、とにかく, Freiheit, freedom, liberté とは、あらゆる存在事象, あらゆる徴示素を切り捨てた「空き地」のことなのです.

あらゆる存在事象, あらゆる徴示素への執着を断ち, 同一化を解消したことによって到達される「空き地」が自由の本質です. それは, 存在論的穴と呼んできたもの, つまり, 純粹徴示素としての a と同じものです.

追加の御質問をいただきました. ありがとうございます. 分析家の言説の構造において, 左側の $\frac{a}{\phi}$ — これは $\frac{a}{A}$ と表記できますが —, この左側の構造と, 右上の座の $\$$ とのどちらが分析家でどちらが分析者 analysant (患者)か, ということは固定されたものではありません.

実際の分析の面接において解釈するのは分析家だけでなく, 当然, 分析者自身も自分の「無意識の成形」に耳を傾け, そして解釈します. 「無意識の成形」について語ることは, 既に解釈を含んでいます.

また, 転移の構造としては, 左側の部分は分析家を表すと言えます. 主体

の存在の真理の座に仮定された S_2 は、「知の仮定的主体」 *sujet supposé savoir* と Lacan が呼ぶところのものです。「知の仮定的主体」が転移の必要条件であり、それが分析家に位置づけられることが臨床的な意味での転移を生じさせます。

聖人について追加の御質問をいただきました。ありがとうございます。おっしゃるとおり、聖人は、存在の真理の証人です。しかし、その場合の「証人」は、具体的に何か言葉に言いあらわして証言するとは限りません。例えば、殉教者は、おのが身を以て、処刑されたキリストにならうことによって、「証言」します。つまり、身をもって「存在の真理」を代表する徴示素 a と成っています。そこには通常の意味での言葉はありませんが、しかし、彼の行為自体が雄弁な証言なのです。

実際に言葉を以て証言したり、芸術作品を生み出すことによって証言することは、それなりの特別な才能がないとできません。しかし、そのような才能が無い者でも、まさに無言のまま、無為のまま、その者が実存することそれだけで存在の真理の証人であり得ます。むしろ、それこそが聖人の典型かもしれません。Mother Teresa を見てください。

26 July 2014 : 死の本能の問いは存在論的問いである; 仮象の座の底を踏み抜いて真理の場処へ到達する; 自己秘匿の座から a を能動者の座へ引き上げる.

1950 年の Lacan の犯罪学に関する書についての御質問ですが, そこにおいて Lacan が問うているのは, 破壊, 攻撃として現れる死の本能です. そして, 死の本能について問うということは, 存在 φ について問うことです. それは, 心理学的な問いでも生物学的な問いでもなく, 而して, 存在論的問いです.

Lacan の問いの出発点は, 1932 年の医学博士論文で取り上げた症例 Aimée です. 彼女の妄想において彼女を迫害する幾人かの人物のうち, 或る女優を彼女は殺害しようとして, 現場で取り押さえられ, Sainte Anne 病院で Lacan と出会うこととなります.

他殺であれ自殺であれ, それは, 死そのものである φ が a を破壊し, 呑み込んでしまうことです. わたしは身をもってその極限状態を経験しました. 文字どおり, 突然足もとに穴が開いて, そこに呑み込まれてしまう感覚でした. 実存構造の突然にして急激な解体が起きた場合, そのようなことが起こり得ます.

神は、わたしを死の底から救ってくださいました。神は、わたしが真実を知り、生きたまま罪を贖うよう、お定めになりました。神に感謝しています。

さて、仮象と真理に関して、大変興味深い御指摘をいただきました。

Lacan が “ a と ϕ との分離において ϕ の場処へ到達する” と公式化した事態を、「仮象の座から真理の場所へと底を踏み抜く」という身体的な表現を以て捉えることは、独創的などてもすばらしい試みだと思えます。

Freud は去勢複合、つまり、男における男性的抗議(即ち、去勢不安)と女におけるペニス妬みを、精神分析治療に対する克服し難い行き詰まりと見なしました。Lacan はその行き詰まりを打開する道を探求しました。まさに「底を踏み抜く」ことがかかわっています。

大学の言説と分析家の言説との関連についての御指摘から、Socrates のことを連想しました。

対話において Socrates は「わたしは自分では何も知らない」と言います。通常、学者と呼ばれる人々は「わたしは何でも知っている」「わたしは知の

体現者である」という態度を取ります。それは、知 S_2 が能動者の座に位置する大学の言説です。Socrates の対話相手たちはそんなふうです。

それに対して Socrates は、「わたし自身は何も知らない。知っているのは神だ」と言います。それは、左下の真理の座に知 S_2 が仮定される分析家の言説の構造に対応しています。そして、Socrates は真理が語る言葉に耳を傾け、それを聴き取り、そして、みづから真理の代弁者として語ります。Lacan が「フロイト的な物」という書において真理の女神に「我れ、真理は語る」と言わせたとおりです。

$$\frac{\$}{a} \rightarrow \frac{S_1}{S_2} \qquad \frac{a}{S_2} \rightarrow \frac{\$}{S_1} \qquad \frac{S_2}{S_1} \rightarrow \frac{a}{\$}$$

hysterica の言説 分析家の言説 大学の言説

確かに、男が精神分析経験に入るときには、自分が今までしがみついていたものが揺さぶられ、無効になり、除去される、という感覚があります。それは、大学の言説から分析家の言説への転回に伴うものだと見なされます。つまり、能動者・支配者の座にあった知 S_2 が、死の座である真理の座へ罷免されるのです。

それに対して、女性が精神分析の経験に入るときは、それまで漠然として

いたものがはっきり見えてくるという感覚を持つでしょう。

御指摘のとおり、それまで自己秘匿としての真理の座にあった a が、能動者の座へ引き上げられ、症状として出現してきます。それによって、真理は、それまでは「断念された欲望」、つまり $\text{frustration } \$$ としてしか表現されていなかった状態から、 $\text{signifiant } a$ により代表される状態、つまり、真理がみづから語るようになるようになります。

御指摘いただいた以上のような表現を用いると、大学の言説から分析家の言説へ、ならびに、 hysterica の言説から分析家の言説への転回がとても見えやすい形で定式化できます。

27 July 2014 : 我々が言語に住まう者である限りにおいて、精神分析は我々各人各自にかかわっている。

日本における精神分析, 特に Lacan 派精神分析の現状, ないし, その受容状況に関する御意見をいただきました。ありがとうございます。

精神分析も Freud も Lacan も, 誰かが独占することはできません。Lacan に関してはまだ著作権は切れていませんが, 精神分析も Freud も Lacan も, 語の字義どおりの意味において public domain です。なぜなら, 精神分析はあらゆる人間に, あらゆる言語存在にかかわることだからです。つまり, 我々が言語に住まう者である限りにおいて, 我々各人各自に精神分析はかかわっています。

ですから, 精神分析に関して, Freud に関して, Lacan に関しては, 誰もが発言する権利を持っています。そして, その際, 誰もが真理を言っています。ただし, すべてではなく, かつ, 仮象を通して。つまり, 真理そのものを言っているわけではないですから, 或る意味で, 誰もが嘘を言い, まちがったことを言っています。

したがって, 誰かが精神分析, Freud, Lacan に関して何かを言っており,

それが的外れなことであっても、咎めることはできませんし、その必要もありません。

以前にも引用した福音書の箇所を再度引用するなら：

ヨハネはイエスに言った：先生、あなたの名において悪霊を追い払っている者を見たので、やめさせようと思いました、彼は我々に従っていませんから。だが、イエスは言った：彼を妨げるな。そも、わたしの名において奇跡を行いなながら、その直後にわたしを悪く言う者は無い。我々に反対していない者は、我々の味方である。

以上のようなイエスの言葉にさらに付け加えても良いでしょう：たとえ精神分析、Freud, Lacan について悪しざまに言うものがいたとしても、言わせておきなさい。それによって彼らは、彼ら自身の存在の真理の言葉に耳をふさごうとしていることをみづから証言しているだけであるから。

精神分析について言われたこと、書かれたことを通して精神分析を学ぶことと、みづから精神分析を経験することとの間には、確かにひとつのギャップがあります。要するに、精神分析を単なる一般論として捉えるか、それとも、まさに自分自身に、わたし自身にかかわることとして捉えるかの差です。

そして、精神分析について真剣に学ぶならば、単なる一般論として済ますわけにはいかないはずです。あるいは、自分自身にかかわる問いを真剣に問おうとしている人だけが、本当に精神分析に関心を向ける、とも言うことができると思います。

Heidegger を読むことは容易なことではありませんが、『存在と時間』を是非読んでみてください。

Heidegger は確かに大学の哲学教授でしたが、「ただの」大学教授ではありませんでした。Heidegger の著作はどれを取っても、彼が存在に関する問いをまさに彼自身、自分自身に関わる問いとして捉えていたことを示しています。だからこそ、Heidegger のテキストは感動的なのです。

Heidegger の教えは、昔、実存主義とか実存哲学と呼ばれていました。それらの表現は今やほとんど死語になっており、あるいは軽蔑的なニュアンスをこめてしか使われないかもしれません。

しかし、今や「実存」という語はひとつの本質的 key word として復活させられるべきです。Heidegger の為したことは、まさに実存分析です。そして、

実存分析においても精神分析においても、かかわっているのは我々ひとり
ひとりの自分自身、自己自身の存在です。そのことを忘れないでください。

28 July 2014: 支配者徴示素 S_1 としての父の名について; 存在の真理としての父の名について.

「父の名」について続けましょう.

前オイディプス期における前性器的部分本能の部分客体における満足を妨げるために介入するものとしての父の機能は, 支配者の言説における支配者徴示素 *signifiant maître* S_1 により形式化されます. それまで部分客体 a が占めていた能動者の座に, 「父の名」である S_1 が支配者として即位します.

そして, S_1 と如何なる関係を持つかにより, 男女の性別が決定されます.

男は, Freud が「トーテムとタブー」で提示した *Urvater* 「原父」の神話のとおり, 父 S_1 を支配者・能動者の座から退位させ, 左下の真理の座, 秘匿性としての真理の座, 死である *ex-sistence* の座へ追いやります. そして, 男たちは, ひとつの「すべて」, 全体性 *universitas* としての S_2 として, みづから支配者・能動者の座につきます. それが大学の言説と Lacan が呼ぶ構造です.

大学の言説における S_2 は、男の性別の公式における $(\forall x) \Phi(x)$: 「すべての x について $\Phi(x)$ である」に対応します。

では、存在の真理の座に置かれた「父の名」は？この父の名は、ユダヤ教の神 YHWH にまさに対応します。男の性別の公式における $(\exists x) \neg\Phi(x)$: 「 $\Phi(x)$ ではない x が ex-sister する」が、存在の真理の座に置かれた S_1 に対応します。

かくして、男の言説としての大学の言説はこのように書かれ得ます：

$$\frac{S_2}{S_1} \longrightarrow \frac{a}{\$} \qquad \frac{(\forall x) \Phi(x)}{(\exists x) \neg\Phi(x)} \longrightarrow \frac{a}{\$}$$

大学の言説

男の言説

しかるに、存在の真理の座に置かれた父の名を、Lacan は、実在 le réel, ex-sistence, 存在そのものとも考えます。その場合、存在の真理そのものと見なされる「父の名」は、 S_1 という項により表されるのではなく、真理の座そのものであると言えます。

話がややもつれてしまいました。

ユダヤ教の神も、キリスト教の父なる神も、イスラム教の Allah も、実は同じひとつの神です。なぜなら、キリスト教もイスラム教もユダヤ教を母胎として誕生したものであり、三つの宗教はいずれも Abraham を信仰上の先祖としています。

神は、ユダヤ教において YHWH と表記される神ただひとりです。ここでは、ヒンズー教や日本神話の神々のことはひとまずおいておきましょう。

興味深いことに、ユダヤ教では紀元前二世紀ころまでには、神の名 YHWH をそのものとして口に出して呼ぶことが不可能になってしまいました。神を畏れるあまり、その名を直接呼ぶことがはばかれるようになり、ついには、YHWH と表記される神の名をどう読むのかもわからなくなってしまうのです。(ヘブライ語やアラブ語などのセム系の言語では、おもに子音で語を表記します。それをどう発音するかは、日本語において漢字をどう読むかが慣習的に決められているのと同様、多かれ少なかれ恣意的です)。

しかし、YHWH という語が「存在」という語に関連していたらしいことは推測されています。旧約聖書「出エジプト記」で、YHWH はモーゼに「我れは

『我れは存在する』である」と啓示します。

したがって、YHWH の名がもはや表言不可能になったということ、もはや不可能な名となっているということは、「存在という語は抹消されてしか書かれない」と Heidegger が言っていることと重なり合うのです：

Sein \equiv YHWH

このことは、むしろ分析家の言説において考える方が良いかもしれません。分析家の言説においては、父の名 S_1 は右下の生産の座へ閉出されています。

ところで、Lacan によれば、閉出されたものは実在へ回帰します。

この命題も多義的に解釈されます。

ひとつには、「 a は実在の位のものである」という Lacan の命題にしたがって、閉出された父の名は症状 a として能動者の座へ回帰する、と考えることができます。

しかし、他方、閉出された父の名は、ex-sistence として存在の真理の座へ
回帰する、と考えることもできます。

話がこみいってしまいました。また明日、整理してみましよう。

29 July 2014 : 律法と超自我について; 割礼について; 分析の言説とカトリックとの親和性について; 症例 Aimée について.

S₁ の概念についてですが, 重要なことを言うのを忘れていました. それは, Lacan 自身が S₁ という用語を必ずしも一義的には使っていない, ということです. 四つの言説において S₁ は *signifiant maître* 支配者徴示素と定義され, 四つの座のいずれかに位置する項として提示されています. ところが, Lacan 自身が, 左上の *agent* [能動者]の座のことを S₁ と呼ぶこともあるのです. ですから文脈を良く読まねばなりません

律法 *loi* の概念は, ユダヤ教的な律法と Kant 的な道德律とを包摂します. その本質は, いずれにせよ, 定言命令 *impératif catégorique* です. 定言命令とは, 「...の場合は...せよ」という条件付きの命令ではなく, 全く無条件的に「...せよ」と命ずるものです.

そのような定言命令を Freud は超自我に帰しました. 1923 年に公式化された第二トピックにおいて超自我と呼ばれるものは, 症状の言説としての分析家の言説における *a* です. それは定言命令の声としての *a* です. その声は「悦せよ!」 *Jouis!* と命令します.

昨日の「父の名」の話と関連を持たせるなら、「悦せよ！」という命令の声 a は、存在の真理の座に位置する不可能な名 $YHWH$ としての父の名を代理するものです。律法の定言命令は、神の意志そのものです。

割礼という徴(しるし)も、不可能な名 $YHWH$ を代理する signifiant a と解釈されます。割礼は、神への従順の徴です。つまり、ギリシャ語大文字で書かれる signifiant phallic Φ , 男の性別を規定する signifiant Φ の閉出の象徴です。

割礼を受けたユダヤ人男性がすべて実際に神に本当に従順なわけでは勿論ありませんが、割礼の宗教的な意義は、神との関係を妨げる signifiant Φ の棄却です。それによって、症状の言説としての分析家の言説が可能になります。そこにおいて剰余悦 a も症状として実現されます。

キリスト教圏におけるユダヤ人に対する差別は、男が女を差別する構造と同じものに根ざしています。そのような差別を動機づけているものは、去勢不安です。別の表現で言えば、「男性的抗議」です。

問題は、キリスト教圏において排除されたユダヤ人たちがイスラエルという国家を、民主主義国家を作ると、そこにおいて支配的である構造は、大学

の言説の構造であり、そこにおいてはユダヤ人たちがアラブ人たちを排除してしまふ、ということです。

この三週間で千人以上のパレスチナのアラブ人たちが殺され、そのうち子供の犠牲者は二百数十人にのぼっています。あらためて彼らのために祈りましょう。ユダヤ人もアラブ人もキリスト教徒も、あらゆる者が原点に立ち返り、神への従順を取り戻すことができますように。

同じキリスト教圏でも、カトリック圏とプロテスタント圏では分析家の言説の優勢さが異なる、というのは「社会学的」な事実です。

1950年代までは、有効な精神医学的薬物療法が無かったので、USAにおいても精神分析は優勢でした。しかしそれは、当時のUSAにおいて精神医学界のなかで精神科医が出世しようと思うと精神分析家の資格認定を受けねばならない、というやはり「社会学的」な動機に基づいていました。精神医学的薬物療法が発達すると、USAでは精神分析はすみやかに過去の遺物になりました。USAは基本的にプロテスタントの国です。カトリックは少数派です。

それに対して今、分析家の言説が優勢である国々、要するに Lacan の教

えに準拠する精神分析が栄えている国々は、フランス語、スペイン語、イタリア語の国々であり、基本的にカトリック諸国です。

この「社会学的」な事実を説明することはできるでしょうか？誰も明確な答えを出してはいません。わたしの推測では、それは、神を畏れる度合いの差によるのではないかと思われま

す。プロテスタントは非常に多様で、一概には言えません。Luther と Calvin は同じではありません。Heidegger は Luther を熱心に研究しました。わたしはプロテスタント神学をまだよく知りません。ですから、こう言っておきましょう:少なくともプロテスタントの一部は、神中心ではなく人間中心の宗教になっている。近代の人間中心主義に則ってキリスト教を「改革」したのがプロテスタントです。

それに対して、あいかわらず神中心を堅持しているのがカトリックです。あるいは、中世に墮落したカトリックですが、近世以降、プロテスタントに対抗するために、人間中心ではなく神中心の精神を復活させました。

人間中心か神中心かによって神を畏れる畏れ方に違いが出てくると思います。

プロテスタントの教義が厳しくないわけではありません。むしろ、カトリックより非常に厳格であるかもしれません。しかし、それは或る意味でユダヤ教的な律法主義への逆戻りでしかありません。ユダヤ教の律法主義は、イエスの時代、墮落して、神を畏れる気持ちを失い、形骸化していました。だからこそ、父なる神はイエスを世に使わしたのです。プロテスタントは、或る意味でイエスの時代のユダヤ教と同じ過ちに陥っています。戒律、律法を厳格に遵守しますが、神を畏れることを忘れていきます。

それに対してカトリックは、律法よりも神の愛を強調します。神は愛です。そして、神を愛することが重要です。そこには、神をうやまい、神を畏れる気持ちが伴います。

以上のような違いが、プロテスタント諸国では大学の言説の優位、カトリック諸国では分析家の言説の優位という違いを生んでいるのではないかと、わたしは推測しています。

神を畏れるところでは、律法を遵守することよりは、神の意志を直接知ろうとします。何を神は人間に請求しているのかを知るために神の声を聴き取ろうとします。それは、分析家の言説と同じ構造です。

さて、1932 年の医学博士論文で Lacan が取り上げた症例 Aimée についてですが、Lacan は彼女を *paranoïa* と診断しています。つまり、妄想症状はあったが、*Schizophrenie* ではなかったのです。

Aimée は、妄想において彼女の迫害者である幾人かの人物のうち或る女優をナイフで襲撃しました。Aimée が自分の攻撃行為の意義を自罰と了悟したとき、彼女の妄想症状は消え去りました。その後の経過において、症状の再発はありませんでした。伝えられているエピソードによると、Sainte Anne 病院から退院した後、或る時期、Aimée は偶然にも Lacan の両親の家で住み込みの家政婦をしていたそうです。そこで Aimée とはちあわせた Lacan は非常にびっくりしたそうです。ともあれ、彼女は再び妄想症状を持つことはありませんでした。

Schizophrenie に比べると、純粹な *paranoïa* の症例ははるかに少ないです。しかし、Freud の症例「狼男」は、大人になってから、一時的に *paranoïa* 症状を呈したことがあります。このことについては別の機会に紹介しましょう。

「父の名の閉出」の概念も多義的です。或る意味で、症状の言説である分

析家の言説においては父の名は閉出されています。父の名が閉出されていないと症状は出現しません。

症例 Aimée においても「父の名」は閉出されていました。だからこそ症状が出現しました。

そして、彼女の症状は、自我理想 Ich-Ideal を攻撃し破壊するという行為において、解体されました。そこが Lacan の注目したところです。

自我理想も、signifiant a の一形態です。死の本能、攻撃本能が仮象 a を破壊することによって aliénation の構造が解体され得る。このことが、後の Lacan の主体滅却 destitution subjective の概念の種となりました。

30 July 2014 : 二階堂奥歯の自殺; Aimée の自罰; 境界例の自傷; ギャンブラーの自己去勢; 結合の機能としての父の名について.

二階堂奥歯というペンネームの女性について教えていただきました. ありがとうございます.

<http://homepage2.nifty.com/waterways/oquba/index.html>

<http://blog.livedoor.jp/genyoblog-higashi/archives/6916092.html>

彼女は 26 歳で投身自殺しました. 出版社で編集者として活躍していました. みづから命を断つ前の約二年間, 彼女は日記を blog に発表していました. それは, 彼女の友人たちによって一冊の本にまとめられました:『八本脚の蝶』. 絶版にはなっていないので, 注文しました. 読んでみます.

Aimée について引き続き御質問をいただいています. 彼女が妄想症状のただなかにいたとき, その妄想について誰かに語る機会は無かったと思います. 1930 年前後のことですから, フランスでも今のように分析家がどこにでもいたわけではありません. 自分の家族にも知人にも話してはいません.

彼女は, 迫害妄想についてではなく, érotomanie と呼ばれ得る妄想の内

容を文章にして書きつけてはいました。その対象は, Prince of Wales, 英国の皇太子です。「彼はわたしを愛している」という妄想的確信を Aimée は持っていました。

Aimée においては迫害妄想と érotomanie とが言うなれば二本立てで、表裏のように対になって現れていることが特徴的です。これは、臨床的には珍しいことですが、構造としては、症状の言説としての分析家の言説によって形式化されます。迫害する他者も愛する他者も $\frac{a}{\phi}$ として形式化されます。迫害の攻撃も、愛の命令も、同じ本能請求の現象です。それは Freud の用語では超自我の現象であり、したがって Lacan は Aimée を超自我精神病の一例として提示しています。

Aimée における「自罰」の「罰」は、司法権力の処罰や身近な誰かの非難によって起こるものではありません。それは、自我理想 a が死の本能 ϕ により攻撃され、破壊された、という事態です。それによって症状の構造の解体が起こり、妄想症状は治療的介入無しに消退します。

いわゆる境界例において起こるような自傷行動は、存在の真理のことばが分析家の言説において文字どおりにことばとして聴き取られることが起き得ないときに、実存構造がみつからに無理やり signifiant をきざみつけようと

する行動です。

純粹徴示素としての a は、切れめ、裂口です。自傷行動における切創は、まさにそのような切れめです。そのようなことばにならないことばを、分析家の言説において本当にことばとして語るができるようにする必要があります。

それに対して、投身のような決定的な自殺行為においては、実存構造は端的に消滅してしまい、存在の真理が仮象によって代理されるという構造そのものが無くなってしまいます。

ここに、ですから、Lacan が分離や主体滅却と呼ぶ事態、分析の終わりを規定する事態は、如何にして実存構造そのものの消滅無しに成起し得るのかという問いが措定されます。 $\frac{a}{\Phi}$ の構造そのものは、 a が純化され、無化され、切れめ、穴そのものに還元されても、保たれていなければなりません。さもなくば、復活も成起し得ません。 $\frac{a}{\Phi}$ の構造そのものを保つものとしての「父の名」の機能が想定され得ます。

そして、そのような構造の支えとしての父の名が閉出されてしまっているときには、投身のような決定的な自殺行為が起こり得る、と考えられます。

男の存在論的構造 $\frac{\Phi}{\phi}$ において、死の本能が Φ を直接に分離・破壊することはないのであるかという御質問をいただきました。難しい問題です。

$\frac{\Phi}{\phi}$ の構造が脅かされそうになると、いわゆる去勢不安が生じます。それは危険信号の役をし、危険から遠ざけさせます。それは言うなれば狭義の去勢不安です。

広義においては、不安はすべて去勢不安です。それは、 a との遭遇において男女を問わず起こり得ます。そして、女性においては a がより分離しやすいので、不安は起こりやすくなります。

男性において $\frac{\Phi}{\phi}$ の構造が直接に破壊される事態として、どのようなものが考えられるでしょうか？もしかしたら、それは賭博かもしれません。

かつて話を聞いたことのある或る病的賭博の男性は、会社で責任ある地位についていました。当時その会社では給料を現金で支給していました。彼は全従業員の給料を銀行からひとりで運んでくる役をまかされていました。あるとき彼は 1000 万 円弱の金を銀行から引き出し、すぐに会社に戻らねばならないのに、彼の足はフラフラと競輪場に向かいました。彼は、あり金

すべてをひとりの選手に賭けました。ゴールはその選手ともうひとりどち
らが一着か、微妙な写真判定になりました。その結果が出るまでの数分間
は、彼自身の言葉によると、彼の人生のうちで最も充実した瞬間だったそ
うです。負ければすべてを失うというあの緊張感、あの不安感、それが最高
の悦なのです。結果は、残念ながら彼の負けでした。彼は、自分の妻に
電話し、もう家に戻れないと告げましたが、彼のギャンブルの性癖を知って
いる妻は彼を必死に説得して何とか帰宅させました。さもないと彼は自
殺していたでしょう。

男たちの大部分は神に従順であろうとはしませんが、男が自分の身を他
A の手に委ねることがあります。ギャンブルはその一例だと思います。負け
ればすべてを失うというような大博打に女性が手を出すという話はあまり聞
いたことはありません。男でも珍しいことでしょうか、ときどき見かけます。男
の存在論的構造において Φ が直接に破壊される例として、ふとそのよう
な病的賭博の例が思い浮かびました。

今日はこのへんにしておきましょう。「八本脚の蝶」については後日お話し
たいと思います。

父の名の機能について御質問をいただきました。ありがとうございます。御

指摘のとおり、今日言及した父の名の機能は「徴象機能の支え」と Lacan が呼んだものです。Ex-sistence としての実在を仮象 a が代理するという存在論的構造をそのようなものとして可能にするもの、それを Lacan は「父の名」という用語によって差し徴しています。そのような機能は、1950 年代に Lacan が *point de capiton* と呼んだものから、1970 年代のボロメオ結びの RSI の三つの輪を結ぶ第四の輪としての父の名に至るまで、たどることができます。そのような結合の機能としての「父の名」が閉出されると、自殺が起こり得ますし、あるいは、実存構造の急激な解体が急性精神病症状によって代補されることも起こり得ます。

31 July 2014 : 大学の言説は差別の言説である；大学の言説としてのプロテスタントの言説；分析家の言説としてのカトリックの言説；復活の概念に対する反感.

わたしがカトリックだからプロテスタントの悪口を言うわけではありませんが、少なくとも USA のプロテスタント諸会派の一部は、大学の言説に陥っています.

大学の言説は、差別の言説です.

あるときヘブライ語の聖書をネットで探していて、<http://theotex.org> を見つけました. そこからヘブライ語原文とフランス語訳を無料で download できるのですが、そのためにはクイズに答えなければなりません. どんなクイズかというと、「ユダヤ人を救済の経済から排除することを正当化しているキリスト教神学システムの名は？」というものです. ヒントとして、*Left Behind* というベストセラー小説と大ヒット映画の筋書きはそのような神学に基づいている、と付言されています.

Wikipedia で調べて、答えは簡単に見つかりました. Dispensationalisme が答えです.

日本語に訳しにくい用語ですが, dispensation は, この場合, 「配分」です. 最終的な救済である世の終わりに至るまでに, 神は幾つかの時代, 期間を人間たちに配分した. そのように配分された時代が dispensation です.

そして, ある時期, 神はユダヤ人に己れを啓示していたが, その時代は過ぎ去った. ユダヤ人は最終的な救済から排除されている, と dispensationalisme の神学は考えます. 少なくとも, dispensationalisme を信奉する人々の一部はそう考えます.

USA のプロテスタントの一部では, そのような差別神学が信奉されているのです. <http://theotex.org> は, そのような差別を告発するために, あのクイズをしかけたのです.

ユダヤ人差別だけでなく, USA のプロテスタントは, WASP : White Anglo-Saxon Protestant 中心主義に組み込まれ, アフリカ系を始めとする少数民族に対する差別を容認してきました.

キリスト教は普遍的な神の愛を説くのに, なぜ差別の言説がまかり通るのか? それは, プロテスタントの聖書絶対主義に起因すると思います.

プロテスタントはローマ教皇の権威を否定するために、信ずるべきは聖書のテキストだけだ、と主張します。それゆえ、プロテスタントでは聖書の解釈学が非常に発達します。それはそれで神学的に有意義なことです。ところが、プロテスタントは、聖書解釈学の知 S_2 が能動者の座に就いて支配する大学の言説に行きついてしまいました。

ある意味で、今のイランの政治体制も同様です。コラーンのテキストの解釈の知を握る神学者たちが支配する大学の言説です。

聖書のテキストを読むのは勿論大切なことですが、本来もっと本質的なのは、神の御ことばであるイエスの声を聴くことです。カトリックはそれを重視します。それは、大学の言説ではなく、分析家の言説の構造のなかに位置づけられます。神の声 a が能動者の座に位置し、それは神の知 S_2 を代表しています。

そのような構造の下地の上に、カトリック諸国での精神分析の広まりは基礎づけられているのではないかと思います。

話は変わって、先日ちょっとおもしろい経験をしました。Zizek の関係のグ

ループの Facebook のページで、わたしが「復活」に言及したところ、嫌悪感を以て反発する反応が返ってきました。英語でやりとりするグループです。反応したのはイギリス人でした。キリスト教圏においても、今や、死からの復活を持ち出すと反感を買うことがあるわけです。西暦 1 世紀に聖パウロがアテネで死からの復活を説いたときと同様に。

01 August 2014 : 「精神分析学」は大学の言説による精神分析の心理学化である； 大学人にとって Lacan は外傷体験； 精神分析にとっての Heidegger の根本的な意義； 精神分析を学ぶ, 教える； 存在の真理の知の伝達.

大学の言説は, 精神分析を「精神分析学」にし, Lacan の教えから lacanisme を作り上げようとしています. それによって大学人は, 精神分析を諸々の心理学理論のひとつに分類し, Lacan の教えを「精神分析学」のひとつの変種と位置づけ, 安心します. 精神分析の真理を塞いだつもりになって.

日本の大学人のなかに「ラカン派精神分析学者」や「ラカン解釈学者」を標榜しようとする人が誰かいるでしょうか？

Heidegger をやっている大学の哲学教師たちも, Heidegger と心中する心構えは無いようで, Heidegger は Nazi だと指弾されれば, たちどころに逃げ出します.

フランスの大学人たちにとって Lacan から受けた trauma の後遺症はいまだに残っています. Lacan の弟子であった Laplanche はその代表例で

しょう。

先日もちょっと触れたように、頼まれて Derrida の *Mal d'Archive* を読んでみましたが、根本的に Heidegger と Lacan に準拠していながら、Derrida が Heidegger の名を挙げたのは一回のみ、Lacan への直接の言及は一切ありませんでした。あたかも Lacan の名を出すと哲学者にとって恥であるかのように。

フランスの大学人・哲学者のうちでまともに Lacan と取り組んでいるのは、Alain Badiou くらいでしょう。

付言すれば、フランスでの Lacan アレルギーは、今や、Jacques-Alain Miller に対するアレルギー反応によって強化されています。

わたし自身、Lacan の教えの根本を把握し得たとすれば、それは、神学と『哲学への寄与(自有によって)』以降の Heidegger とを学んだことによつてです。しかし、同時に、Heidegger を読解するには Lacan と精神分析と神への関わりが必須だと思います。

Lacan は、精神分析にとっての Heidegger の思考の根本的な意義を把

握していました。Lacan が暗示したことを、わたしは今、明確化しているだけです。Jacques-Alain Miller は Heidegger 嫌いなようで、彼が立ち入って Heidegger を論ずるのを聞いたことはありません。

ここで、わたしの個人的な予定をお伝えしておく、新たに開業する部屋へ 8 月 11 日に引越ます。最寄り駅は、都営三田線の白山駅です。そこで精神分析治療、いわゆる個人分析, *personal analysis* を始めます。

精神分析の臨床と並んで、秋からは *séminaire* を開始します。どのようなプログラムにするかは未定ですが、御要望、御意見があればお寄せください。参考にさせていただきたいと思います。例えば、Lacan や Freud のテキストの解説、より一般的な理論的解説、等々。参加しようと思う方々の都合としては、何曜日の何時ごろがよいか、等々。場所は、ある程度の参加人数が見込まれれば、文京区の貸し会議室を借りることもできます。

そもそも、精神分析を学ぶこと、教えることは可能なのでしょうか？もし可能であるとすれば、精神分析を「学ぶ・教える」とはどういうことでしょうか？学び、教えものは或る種の知ですが、では、精神分析において如何なる知がかかわっているのか？

Freud や Lacan がみづから言ったこと、また、Freud や Lacan について誰か他の者が言ったことを、我々はテキストとして読むことができます。そこから何事かを学ぶことができます。それはそれで有意義なことです。確かに、そのようにして精神分析の理論、用語、概念を我々は学びます。

しかし、例えば大学の講義において、あるいは個人的な勉強会のような機会において、そのような事柄を学んだとして、それで本当に精神分析を学ぶことになるでしょうか？

確かに、例えば哲学を勉強し、哲学者になろうとしている人、あるいは、既に哲学者として仕事をしている人は、精神分析の臨床とは別に、用語や概念を「机上」で学んで、理論化し、かくして論文や本を書いて発表し、自分の業績のリストをより長いものにして行くことができるでしょう。大学人にとっては、それは有意義なことです。

しかし Lacan は、そのような営みを *poubellication* と呼びました。*poubellication* は、*pubilication* (出版、発表) と *poubelle* (ゴミばけつ) との合成語です。つまり、もし論文や本を書いて出版すること自体が目的となっているなら、そんなことは廃棄物を作り出しているようなものだ、と Lacan は揶揄したのです。

Lacan は、la psychanalyse en intension と la psychanalyse en extension との二本立てを提唱しました。

intension と extension は、通常、ある概念の「内包」と「外延」と訳されます。「内包」は或る概念の意味であり、「外延」はその概念があてはまる存在事象全体を指します。

しかし Lacan は精神分析の intension という表現を以て、各人がみづから経験するものとしての精神分析、つまり、各人の分析経験のことを差し指します。

それに対して、extension における精神分析という表現においては、精神分析を如何に社会に対して提示・提起するか、ということが問題にされます。

精神分析について何か書いたり発表したりすることは、精神分析の extension に役立つ限りで意義があります。論文や本を発表することが自己目的化してはならないのです。

精神分析の本質・本有は、勿論、intension としての精神分析、各自がみ

づから精神分析を経験することにこそ存します。

では、その場合、精神分析の知の伝達とは如何なることなのか？

講義や勉強会でテキストを読み、用語や概念を学ぶことは、確かに或る種の知を得ることはありますが、**extension** の次元のことにすぎません。それは、自分の、わたしの存在の真理を知ることはなりません。わたしの存在の真理を知るためには、みづから分析を経験する必要があります。

その際、知は如何なるしかたで伝達されるのか？分析の面接の最中に為される解釈によってでしょうか？

Freud はそう考えていたかもしれません。Freud は、分析面接において夢や症状についてできるだけ詳しい解釈を患者に説いて聞かせました。

しかし、それが存在の真理の知の伝達でしょうか？

たとえば『夢解釈』において「夢は願望成就である」という標語のものに為される解釈は、それはそれで興味深いものです。むしろ、大変おもしろい読み物だと言ってもよいでしょう。夢や日常生活の精神病理の解釈は、おもしろ

ろく読めます。なぜなら、そこで Freud は意味を開示しているからです。

ただし、そこで言う「意味」は, *imaginaire* な意味, 影象的な意味にすぎません。そのことは, 例えば Freud が『夢解釈』の第二章で展開している Irma の注射の夢において解釈される夢の願望は何ら小児的なものでも性的なものでもないことに表されています。そのような「意味」は, 分析において本来目ざされるべき実在の次元のものではありません。

それに対して, *intension* における精神分析において, 各自の分析の経験において, 伝達されるべき知は, 各自の存在の真理の知, 実在の知でなければなりません。

分析家の言説の構造において, 左下の真理の座に位置づけられている知 S_2 , それこそが精神分析においてかかわる知です。それこそが, 精神分析において伝達されるべき知です。

では, 知 S_2 は, ひとつの真なる言表として定式化され得るのか?

Lacan は言いました:「我れは常に真理を言う。ただし, すべてではない。真理をすべて言うことは不可能である」。

つまり、存在の真理の座に位置する知 S_2 を、仮象的徴示素 a は代表することはできるが、 a はあくまで S_2 の代理物、代用物にすぎず、 S_2 そのものではありません。したがって、 a を以て真理を言うことはできるが、 S_2 そのものをすべて言うことはできません。Freud のような解釈では知 S_2 をそのものとして伝達することはできません。

では、精神分析における知の伝達はどう為され得るのか？

それは、analysant 「分析者」、つまり、精神分析の患者、分析を経験する我々各自が、analyste 「分析家」に成ることによってです。

転移において、知 S_2 は、分析家 a のもとに仮定されています。そして、分析の終わりにおいて分析者がみづから分析家に成るとき、分析者はみづから $\frac{a}{S_2}$ の構造において実存することになります。 S_2 が位置する場処は、もはや他 A の場処ではなく、Ereignis 自有において、我々各自自身の最も本自的な存在の場処となります。

知 S_2 をひとつの言表として言い表したり書き表したりすることが問題ではないのです。ここに我々は、禅で「不立文字」、「以心伝心」と言われている

この本当の構造を見出すことができます。

秋から行う予定の東京ラカン塾の séminaire, 勉強会について, どのようにするのが望ましいか, 皆さんの御意見, 御要望をお寄せください. そのほかの御質問, メッセージ等も御遠慮なく.

秋から始める séminaire について, 御提案, 御要望をお聞かせください. 内容, テーマだけでなく, 曜日, 時間帯, 等, どのようなことに関するものでも結構です. いろいろな御意見をお待ちしています. 御遠慮なくメッセージを送ってください. わたしの e-mail address へ直接御連絡くださっても結構です : ogswrs@gmail.com

02 August 2014 : 輪廻転生；解脱・涅槃と永遠の命；原罪と無意識的罪意識；贖罪と救済.

秋から行う予定の東京ラカン塾の séminaire に関して幾つか御意見，御要望をいただきました. ありがとうございます. 引き続き御提案，御要望，等をお寄せください. 曜日や時間帯の都合，具体的にどのテキストを読解したいか等，どんなことでも結構です.

「後期ラカンは隠れハイデゲリアンだ」という御意見をいただきました. 実際，1950年代の Lacan があからさまに heideggérien であるのに対して，1960年代，1970年代の Lacan においては Heidegger への準拠はほとんど暗黙のものになります. 確かに「隠れハイデゲリアン」です.

さて，復活のことを話題にしたら或るイギリス人が反発した，ということを先日言いました. キリスト教圏でも復活や永遠の命といったキリスト教の本質的概念，教義が的確に理解されているわけではありません. それは，日本において我々が仏教の教義を必ずしも正確に理解していないのと同じです.

例えば，輪廻転生について誤解している人は少なくないでしょう. お坊さん

のなかにも誤解している人がいるようです。つまり、輪廻転生は望ましいことだ、という誤解です。現世で不幸でも来世では幸せになれるという「希望」について語っているお坊さんをテレビで見かけたことがあります。

ちよつと仏教の教義について本を読めば、それは全くの誤解であることがわかります。本当は、輪廻から脱出しなくてはならないのです。輪廻に捕らわれているうちは解脱できません。善行と禁欲に励み、良い業(カルマ)を積むことによって、幾つかの転生を経た後、やっと輪廻から脱出することができます。

解脱は輪廻からの脱出であり、そうなるともう転生することはありません。この世に再び生まれて苦勞する必要はもうないのです。

このような解脱と涅槃の境地は、ですから、キリスト教に言う「永遠の命」と等価です。

キリスト教では、そこに至るために幾度か転生する必要はありません。神の恵みにより、苦勞の多い現世の人生を送るのは一回きりで良いのです。

基本的に、仏教は「自助努力」、キリスト教は「神頼み」です。勿論、どちら

が良いかは問題ではありません。根本的には同じことを目ざしているのですから。

復活と永遠の命のみならず、キリスト教圏で最も誤解されやすく、反発を買いやすい教義は、原罪の観念です。人間は、まだ生まれたばかりで何も悪いことはしていない新生児でも、原罪を背負っています。何もしていないのに何故罪があるのか、と誰もが反発します。

イエスは神ですから原罪はありません。人間で唯一の例外は、乙女マリアです。彼女は、神の母として、原罪を負っていない、という教義がカトリックでは公式に認められています。この「無原罪のお宿り」の教義は、プロテスタントから見ればマリアの神格化にほかならないので、プロテスタントはカトリックの迷信深さと偶像崇拜をバカにします。ともあれ、神の母マリアの清純さがかくも強調されることのなかに、むしろ、彼女とその対極のマグダラのマリアとが本来同一の人物であったであろうことを読み取ることができます。

それはさておき、原罪は、したがって、何らかの行為の結果ではないのです。神話上は、アダムとエヴァが禁止を侵したからとされていますが、生まれたばかりの乳飲み子にまで原罪があるということは、それが行為によるも

のではなく、而して、存在論的なものである、ということ在意義しています。

原罪の観念は、Freud が「無意識的な罪意識」[unbewußtes Schuldbewußtsein] と呼んだものと関連があります。

「無意識的な罪意識」はあからさまに矛盾した表現ですから、「無意識的有罪感」とか「無意識的有罪性」と言い換えたりもします。

ともあれ、「無意識的」ということは、「何もしたおぼえは無い」ということです。何もしたおぼえが無くても、あなたには罪があるのです。何かしたけれど忘れてしまったというわけではありません。違法行為無しの有罪性です。

無意識的罪意識によって、Freud は原罪の観念を再発見したのです。この有罪性は、存在論的なものなのです。

「人間として存在するだけで有罪である」とはどういうことでしょうか？

Lacan は「徴象的負債」[la dette symbolique] という用語を以て存在論的有罪性の問題を思考しました。

罪と負債は一見関係なさそうに見えますが、Schuld というドイツ語は両方の意味を持っています。罪とは「負いめ」なのです。何らかの負債を抱えていて、それをまだ返済していない状態、それが「負いめ」がある、ということであり、罪がある、ということなのです。

そして la dette symbolique の symbolique という語は、言語との関連を示唆しています。

人間は、言語に住まう存在である限りにおいて、言語存在である限りにおいて、返済していない何かを負っているのです。

それは何か？実存の構造 $\frac{a}{\phi}$ における a です。他化的同一化の徴示素 a を清算しろ、と他 A は請求しています。

『ハイデガーとラカン』の注に書きましたが、村上春樹氏の『1Q84』のあの無気味な場面はまさにそのような請求を描いています。つまり、天吾の父、NHK の集金人を長年勤めていた父は、死のまぎわの深昏睡状態にありつつ、青豆がひそむ部屋の扉を無遠慮に叩き、未払い受信料を請求します。

そのとき天吾の父は、まさに死の代理人です。死ぬ前に、あなたの負債を清算しなさい、あなたの罪を贖いなさい。あの場面の無気味さの意味は、そのようなものです。

Freud は無意識的罪意識を超自我と原初的 Masochismus との関連で思考していますが、臨床においてそれをどう扱うべきかは詳しく論じていません。無意識的罪意識と原罪とを関連づけ、キリスト教における贖罪の観念をも含めて思考したのは Lacan が初めてです。

カトリックの Credo, 具体的には「使徒信条」と「ニケア・コンスタンチノープル信条」がありますが、いずれも、「罪の赦し」と「復活と永遠の命」とを信ずる、と述べています。それらは、キリスト教の救済論の二大要素です。

贖い Redemptio は、それだけで救済の意味にもなります。イエス・キリストにおいて如何に贖いが完成されているかについては、明日以降説明します。

聖書に関しては、ローマ書簡を翻訳でお読みになったなら、今度は是非ギリシャ語原文をお読みなさい、とお勧めしたいところですが、それがちょっと大変なら、他のパウロ書簡を引き続き読んでみてください。パウロ自身が書

いたものと、パウロの弟子が書いたのだらうと推測されているものがありますが、そのような違いを始めから気にする必要はありません。とりあえず、順番どおりに第一・第二コリント書簡をお読みください。

そう言えば、田川健三氏による翻訳が最新のもののはずですが、どのような訳になっているかをわたしは自分では確認していません。学生時代、田川健三氏の著作は幾つか読み、ためになったと思っていますが、今、カトリックの観点から見て、プロテスタントである田川氏の聖書解釈がどのように見えるか、現時点では何とも言えません。

Alain Badiou の *Saint Paul. La fondation de l'universalisme* はわたしも読みました。結構おもしろい本です。Pasolini が聖パウロについての映画を作ることができなかつたのが残念です。

03 August 2014: ベネディクト 16 世の『ナザレのイエス』; 救済の条件は存在論的貧しさである.

以前, 聖書を勉強するにはどうすればよいかという御質問をいただきました. 当然, 聖書を読むのが一番ですが, それだけでなく, 司祭による解説を聞くのも参考になります. つまり, 御ミサでの説教です. 説教というといかにもつまらなさそうな感じですが, そんなことはありません. 勿論, 説教をする神父様しだいですが.

あとは, 神学者が書いたものを読むのも良いことです. 膨大な数の神学書のうち, 今特にお勧めできるのは, 先代の教皇(今は名誉教皇と呼ばれています)Benedikt XVI の『ナザレのイエス』全三巻です. Amazon で見たら, 全部翻訳されていますが, ずいぶん値段が高くてびっくりしました. 皆さんの身近の図書館にあればよいのですが.

Benedikt XVI は保守的で, 今の Francesco 教皇に比べれば人気はありませんでしたが, 神学者としては非常に優れています. 『ナザレのイエス』は内容も深く, それでいて, キリスト教になじみの薄い人にも読みやすい本です. 福音書の物語の展開にそって, イエスの真理をわかりやすく説き明かしてくれます.

今日わたしが行った御ミサの司式をしたのは Mission ouvrière saints Pierre et Paul (聖ペトロ・パウロ労働者宣教会) の Rémi Aude 神父様でした。彼はなかなか参考になることを説教で言っていたので、紹介してみます。

今日の福音朗読は、マタイ福音書 14 章 13-21 節でした。イエスが荒れ野で 5000 人以上の人々にパンを与えたという話です。勿論、現実にそんなことが可能なはずはなく、福音書の話自体がひとつの譬え話です。譬え話は、不可能としての実在 ϕ を代理する仮象 a です。イエスが荒れ野で 5000 人にパンを与えて満腹させたという譬え話において語られていることは、救済という実在です。

抽象的なことは理解できず、さして spiritual でもない一般の人々に救済のことをわかってもらおうとすれば、救済をどう提示するか？ 窮極的満足としてです。もっと具体的に言えば、飢えることも渴くことももうない状態です。

福音書の話のなかで、イエスは僅かなパンと魚を分けて数千人の群衆を満腹させました。そのような満足が救済の具体的なイメージです。

同じような救済のイメージは「天の祝宴」です。天国で神がごちそうをふるま

ってくれるのです。それは旧約聖書において既に語られているイメージです。

ところで、そのような神の宴会(ギリシャ神話におけるような神々が飲み食いする宴ではなく、神が人間たちを招いてごちそうするのです)に参加することができるためには条件があります。ただひとつの条件です。それは何か？ 飢え渴いていることです。

日本でも「山上の垂訓」として知られているマタイ 5 章 3-12 節 — カトリックでは「八つの幸い」と呼びますが —、それは多分、最もよく知られた聖書の一節でしょう。「心の貧しい者は幸い」で始まる一節です。「心」という訳語は不適切ですが、ここでは立ち入りません。ともあれ、マタイ 5,6 の言葉はこうです:「正義に飢え渴く者は幸い」。

単純に言えば、貧しく、飢え渴いていること、それが天の宴に招かれる条件です。

地上的なものに関して豊かであり、この世のもので満腹している者は、主の食卓には招かれないのです。つまり、救済されないのです。

実際に金持ちであるか否かが問題ではなく、どれだけ神に飢え渴いているかが問題です。地上的なものにあきたらず、どれほど真剣に神を探し求めるか。

言い換えると、存在事象にだけ目を奪われ、存在事象の次元のことだけで満足してはならないのです。むしろ、存在事象の専制を打倒し、存在論的な貧しさを達成しなければなりません。それが救済の条件です。そして、そのような意味で貧しくなることを神は人間に請求しています。

「徴象的な負債を支払う」という Lacan の表現を以て昨日言ったことは、同じことです。他化的同一化の徴示素 a を返上し、存在論的穴、存在論的欠如そのものへと貧しくなること。それが、「徴象的な負債を清算する」ということです。その清算が済んで初めて、天の宴に与ることができます。つまり、救済されます。

今日は、御ミサの説教も教えに富んでいる実例を示してみました。この続きはまた明日。引き続き、御質問、御意見、御要望等をお送りください。

04 August 2014 : phallus と去勢； 存在論的穴； 他 A の場処の topologie としての cross-cap； 存在の請求.

幾つか御質問をいただきました. ありがとうございます. まず phallus についてですが, Lacan は精神分析において三つの phallus を区別するよう教えています. それは, 徴象, 影象, 実在の三つの位に応じた区別です.

まず「去勢の影象的な関数」としての phallus : $(- \varphi)$ があります. 第二に「悦の徴示素」signifiant de la jouissance と規定される phallus : Φ があります. 第三に, signifiant de l'*Aufhebung*, signifiant de la perte と Lacan が呼ぶ phallus : φ があります. この第三の学素はわたしの工夫ですが, その概念はちゃんと Lacan のなかにあります.

以上の三つの phallus はいずれも signifiant ですが, $(- \varphi)$ は imaginaire, Φ は symbolique, φ は réel の位にそれぞれ位置づけられます.

他方, 去勢とは何でしょうか? 精神分析において去勢は, 基本的に, 去勢複合, すなわち, 去勢不安として問題になります. そして, 去勢不安という表現は冗語であって, 精神分析においてかかわる不安はすべて去勢不安

であり、去勢との連関における不安です。

不安は、 a が ϕ を代理する限りにおいて、 a との出会いにおいて惹起されます。つまり、去勢とは ϕ そのものです。

かくして、phallus と去勢との関繋を整理すると、こうなります。まず、 ϕ は、今しがた言ったように、去勢そのものです。 $(-\phi)$ は ϕ の影象的な相関者であり、女の欠如せる phallus です。最後に Φ は、男の性別構造において ϕ の穴を塞ぐ仮象であり、質問者の御指摘どおり、男において特に強い精神分析への抵抗(男性的抗議)を惹起するものです。

ですから、le phallus est le signifiant de la castration とひとくちに Lacan が言ったことは無いのではないのでしょうか？勿論、そう言ったこともあったかもしれませぬし、それはそれで、上述の三つのうちのいずれを意義しているのか読解できるだろうと思います。しかし、先ほど Lacan のおもだったテキストを見た限りでは、le phallus est le signifiant de la castration ともろに言われている箇所は見つかりませんでした。

代わりに、わたしの引用した表現は、Lacan 自身のものです。「le phallus est le signifiant de l'Aufhebung」(Ecrits, p.692) は、*La signification du*

phallus の非常に難解な部分に出てきます。その文の直前に « le signifiant ne peut jouer son rôle que voilé » と Lacan は言っているので、この *phallus* は ϕ だと思われます。したがって、« le phallus est élevé (*aufgehoben*) à la fonction de signifiant » における signifiant は、単純に signifiant ではなく、而して、signifiant barré です。「ファロスは、抹消された徴示素の機能へ *aufheben* されている」。抹消された徴示素は、 ϕ すなわち存在にほかなりませんから、*phallus* は存在の尊厳へ高められます。と同時に、*phallus* は抹消されることにおいて廃されます。*aufheben* という語は、まさに、*élever* (上げる、高める)と同時に *abolir* (廃する)という意味において用いられています。*aufheben* を「棄揚、止揚」と訳すとすれば、それはそのような意味においてです。

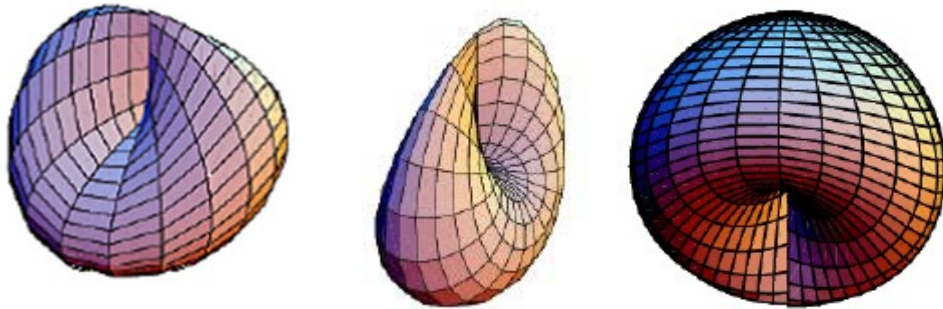
« le phallus est le signifiant de la perte » は *Ecrits*, p.715 にあります。「le phallus est le signifiant de la perte que le sujet subit par le morcellement du signifiant」。「ファロスは、徴示素による分断のせいで主体が被る喪失の徴示素である」。さらに続いて、客体による代償機能について Lacan は語っていますから、この一節の「喪失の徴示素であるファロス」は ϕ のことであると考えられます。

「他 A」と「他 A のなかの欠如 A」との関繋については、「存在論的穴につ

いて」という短い解説文を先日書きましたので、参考に見てみてください:

http://www.lacantokyo.org/trou_ontologique_20140721.pdf

今日はちょっと視点を変えて、cross-cap の topologie で説明してみましよう。というのも、le lieu de l'Autre (他 A の場処, 場所)を Lacan は投射平面, 別名 cross-cap という閉じられた曲面として考えるからです:



他 A の場処はふたつの構成要素 a と φ とから成っています。つまり、存在の真理の現象学的構造, 症状の構造, 主体の存在論的構造, 実存構造などのわたしが呼んでいる $\frac{a}{\varphi}$ は, 他 A の場処の topologique な構造なのです。

cross-cap という閉曲面は, ひとつの円板のエッジとひとつのメビウスの帯のエッジとを同一化することによって得られます。 a は円板に, φ はメビウスの帯に対応します。

そして、cross-cap の図を見るとわかるように、cross-cap は球の一部が鉗子でつままれて、つぶされたような姿をしているのですが、そのはさまれてつぶれた部分の成す直線上の諸点を取り除いてしまうと、残った部分は一枚の円板に還元されてしまいます。(この手の topologique なおもちゃを扱うときは、素材は無限にしなやかに曲げたり伸ばしたり縮めたりすることのできる理想的なゴムのようなものと想像してください。)

つまり、cross-cap の図においては、メビウスの帯の要素はそのものとしては隠れているのです。そのものとして図に描くことは不可能なのです。

Lacan は cross-cap のそのような特質に注目して、自己秘匿における存在である ϕ をメビウスの帯として具象化します。それは、仮象 a というディスクによって覆い隠されてしまっています。 ϕ の成す穴は、円板 a により塞がれてしまっています。

A とは、 ϕ が他 A の場処(場所: Lacan の特殊用語であることを示すために、普通に「場所」と書かずに「場処」と書いています)にうがっ欠如ですから、 A と ϕ とは要するに同じ欠如です。Lacan が「存在欠如」と呼ぶ欠如です:

$$A \equiv \varnothing$$

請求は, Freud が「本能の請求」, Heidegger が「存在の請求」と呼ぶものです. その場合, 「存在」は, *Sein*, ~~Sein~~, \varnothing です. 自己秘匿における存在 \varnothing が, 聴く者としての人間へ, 実行不可能な請求を突きつけてきます: 負債を支払え, と.

その請求の声は a であり, それは徴示素として他 A の場処に属しています. 超自我(良心, 道德律)の声 a は, 欠如(欲望) A の請求を代理しています. その請求は, 我々に, 仮象 a を滅却し, 涅槃へ, 死へ至るよう求めています. 死から復活するために.

負債・罪の贖いのためには, 死の不安にもかかわらず, 予覚において死を覚悟せねばなりません. その実存構造を達成すれば, 覚者, 聖人となります.

05 August 2014 : ファロスの問題と父の問題は表裏一体である.

始める前に夏休みの予定をお伝えしておきます. 7日は終日所用で tweet している時間がありません. そして, 11日に引越をする予定です. その前後は当然, ごたごたします. ですから, 7日から約1週間, この Tweeting Seminar on Psychoanalysis は夏休みとします. 来週何曜日から再開できるか, 現時点では正確には言えません. 引越の後どの程度迅速にかたづけが済むかによります. ともあれ, 夏休み期間中も, 御質問, 御意見, メッセージ等は御遠慮なくお送りください. 一応, スマホもノートパソコンも持っていますから, 時間の余裕があればすぐお答えすることも不可能ではありません.

ファロスの学素について御質問を幾つかいただいていますので, 昨日に引き続きファロスについて考えてみましょう. Lacan がオイディプス複合と去勢複合とを一体の問題として考えたように, 父の問題とファロスの問題は表裏一体です. Lacan が父の問題を問うことをやめなかったとすれば, それは, 彼はファロスに関して問うことをやめなかったということでもあります.

わたしが工夫した学素 ϕ は, Lacan の $(-\phi)$ にもとづいています.

1960年のテキスト「主体のくつがえし」で Lacan は $(-\phi)$ を「去勢の影象

的関数」と定義しましたが、その後、1967年のテキストなどでは $(-\varphi)$ が存在、*ex-sistence* を表すために用いられていると解釈できるところがあります。

であれば $(-\varphi)$ を実在的 *phallus* の学素として使えば良いではないかと思われるかもしれませんが、それは混乱を招くこと必至です。

それゆえ、 $(-\varphi)$ の代わりに、*ex-sistence* を形式化する学素として φ を導入しました。

しかし、学素は、形式論理学の記号と同様、まったく形式的な、任意のもので。わたしはここではこう定義する、と宣言すれば、どの記号をどう使おうと勝手です。ただし、一貫性がなくては混乱してしまいますが。

ギリシャ語大文字の Φ については、Lacan は1960年の「主体のくつがえし」のなかでこう定義しています：« Φ (*grand phi*), le *phallus symbolique impossible à négativer, signifiant de la jouissance* » [大文字の Φ , 負の記号を付することの不可能な徴象的ファロス, 悦の徴示素].

ここで *impossible à négativer* と言っているのは、小文字の φ が $(-\varphi)$:

phallus négatif であるのとは異なって、ということです。

また、1958-59年の Séminaire VI, p.534 で一回だけ Lacan は Φ を抹消して提示していますが、その学素はその後定着しませんでした。

そして 1960 年に結局、 Φ は負の記号を付けて用いることは不可能だ、と宣言されることとなります。もっとも 1972 年の性別の公式の父の機能では Φ は否定の記号を付されることとなりますが。

ともあれ、「主体のくつがえし」(*Ecrits*, p.823) の一節にも書かれてあるとおり、 Φ は源初的なものではなく、後から、つまりオディプス期になって初めて登場するものです。そして、男女の性別にかかわる *signifiant* だ、とそこでも述べられています。

したがって、 Φ が「悦の徴示素」であるとしても、それは、「性関係は無い」： \emptyset という欠如の穴塞ぎの仮象としてでしかありません。それは、世界のところどころで見うけられる多産、豊穡の象徴としてのハリボテの男根にすぎないのです。男根を御神体になっている神社は、わたしが知る限りでも日本に複数あります。

しかし、 Φ は、厄介なことに、大学の言説の構造である男の言説の構造において、排他的な「すべて」の暴力を規定する *signifiant* でもあります。今日の新聞にも、どこかで平然と *male chauvinism* を正当化する発言が為されたことが報道されていました。

話をもとに戻すと、ギリシャ語大文字の Φ はオイディプス複合と男女の性別にかかわります。小文字の ϕ は、それに対して、より源初的なものにかかわります。 ϕ は、本当の源初そのもの、失われた源初そのものです。

ex-sistence として、 ϕ はそのままでは限りなく横滑りして行き、捕らえようのない *signifié* です。Freud も *unfaßbar* 「とらえようのない」という形容詞を使っています。

そのように常に己れを離退し、己れを隠し続ける存在の真理は、しかし、存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ のなかに位置づけられることによって、仮象 a に代理されて、己れを顕すこととなります。

ですから、 ϕ の離退を食い止める *point de capiton* を成すのは、構造 $\frac{a}{\phi}$ そのものです。あるいは、その構造において a が ϕ をつなぎとめている、と言っても良いと思います。

いずれにせよ, ではこの $\frac{a}{\phi}$ の構造を可能にしているものは何なのか?と

いう問いが措定されます. それが「父の名」の問題です.

06 August 2014 : aliénation と séparation ; aliénation から Ereignis へ, 他化から自有へ; 聖状 sinthome の悦; 欲望に忠実であること; phallus imaginaire は去勢の否認である.

Tweeting Seminar on Psychoanalysis : Freud, Heidegger and Lacan を6月12日に開始して, 今日でほぼ2ヶ月たちます. 今までに tweet したことをPDF にひとまとめにして東京ラカン塾の site に公表するつもりです.

aliénation と séparation について御質問をいただいています. ありがとうございます. この問題については HEIDEGGER AVEC LACAN 第四章に詳しく論じたのですが, その部分を含む日本語版はまだ公表できていません.

aliénation と séparation について Lacan が論じているのは『無意識の位置』 *La position de l'inconscient* という書においてです. それは1960年のある学会での発言をもとに1964年に書かれたもので, つまり, Séminaire XI 『精神分析の四つの基礎概念』と同時期の書です. そして, Lacan 自身が, 『無意識の位置』の書はローマ講演の続きを成すものだという意味のことを言っており, 重要なテキストです.

何が『無意識の位置』の書において重要かと言うと、まさに *séparation* の概念です。 *séparation* は 1967 年に *destitution subjective* と命名し直され、精神分析の終わりにかかわる概念となります。言い換えると、Lacan が精神分析の終わりを初めて規定することができたのは、 *séparation* の概念を以てです。

séparation と *destitution subjective* の概念無くしては、精神分析は Freud が言ったように、 *unendlich* に、際限無く続けざるを得ないことになります。

もし精神分析家を「精神分析された者」と規定するなら、そこにはひとつの完了が含意されています。ですから、精神分析の終わり、完了を定義することができなければ、精神分析は、みづからは精神分析家とは何かを規定することもできず、したがって、自分が何をやっているのかもわからないような、文字どおりわけのわからないしろものだということになってしまいます。

pragmatism の英米圏では、とりあえず治療が何とかなれば良いと考えますから、それでも困らないでしょうが（本当は、にっちもさっちも行かなくなってしまう）、Lacan はそこに甘んじませんでした。

精神分析の出発点は *aliénation* です： $\frac{a}{\phi}$ 。そこにおいては、主体の存在の真理 ϕ は他 A の場処に属する徴示素 a によって代理され、主体

自身ではないものとして出現します。主体の存在の真理が主体自身のものではなく、他のものとして現れること、それが *aliénation* です。哲学用語で「疎外」と呼んでも良いでしょうし、精神医学では「狂気、精神疾患」一般のことですし、精神分析の臨床においては症状であり、無意識の造形です。症状のなかには自我も含まれます。*narcissique* なものとしての自我もひとつの症状です。

主体の存在の真理 φ が仮象 a により代理されているという構造 $\frac{a}{\varphi}$ が *aliénation* であり、精神分析はその構造を解体せねばなりません。*aliénation* を解消しないのであれば、精神分析に何の意義があるでしょう？

“*aliénation* から Ereignis へ”：これが Heidegger と Lacan とに準拠する精神分析の標語です。*aliénation* の *alienus* (他のもの)から Ereignis の *eigen* (己れ自身のもの)へ。それが本当の意味での自有・自由です。それが精神分析の本当の目標です。

本当の己れ自身は、存在, *Sein*, φ です。自有においては、その深淵の穴を、何か他のもので塞ぐのではなく、穴・切れ目が開いたままに保ち、 φ の不安と苦痛に辛抱しなくてはなりません。

それは、Freud が源初的 Masochismus と呼ぶものと関連しています。もし精神分析の終わりとしての「症状」sinthome の悦について語るとすれば、それは、源初的 Masochismus の悦です。それこそが、死からの復活の悦です。

Lacan が Joyce との関連で用いた sinthome には saint 「聖人」が含まれています。ですから、sinthome は sainthome と書くことができます。発音は全く同じです。ですから「症状」は「聖状」となるのです。このばあい「聖」の字は「聖人」を「しょうにん」と読むときのように読んでください。「聖状」は、ですから「しょうじょう」です。それが sinthome の訳語です。「聖状」は聖人 saint として実存することです。それは、存在の真理 \emptyset を、仮象で覆うことなく、そのままに ex-sister させることです。

そのような実存の手本を、我々は、ブッダとイエスに持っています。覚者となること、死からの復活において永遠の命を実存すること、それが精神分析の終わりであり、目標です。そして、それは可能です。Heidegger が「死」を我々の最も本自的な存在可能性と規定する限りにおいて。

séparation 「分離」に話を戻すと、分離とは、aliénation の構造、症状の構

造 $\frac{a}{\phi}$ において ϕ から a を分離することです. あるいは, 両者を相互に分離することです. これは, 『無意識の位置』を読めば, 明白です.

分離によって, A と ϕ とが実際にひとつになります. それまで「他 A のなかの欠如」と「主体自身の存在欠如」として別々のもののように思われていたものが, 同じひとつの欠如に重なりあいます.

それは, 死の予覚的覚悟です.

予覚は Heidegger の Entwerfen, 覚悟は Heidegger の Verstehen です.

死の予覚的覚悟は, しかし, 生理学的な死をもたらすのではなく, 死からの復活へ至ります. 死からの復活の成起が Heidegger の Ereignis 「自有」であり, Lacan の sinthome 「聖状」です.

分離は, ですから, 文字どおり, 去勢の完了である, と言ってよいと思います. 去勢とは ϕ そのもののことですから.

わたしが欲望について話題にしてこなかったという御指摘をいただきました. 文面の上では確かにそのとおりです. しかし, 欲望とは何でしょうか? 心理

学的に理解してはいけません。存在論的に問わねばなりません。Lacan の答えは、「フロイト的な物、それが欲望である」です。

「フロイト的な物」 la chose freudienne, それは, ex-sistence としての主体の存在, φ です。 φ のことは毎日のように問題にしてきました。そして, φ こそが, 精神分析的な意味での欲望なのです。

「欲望に関して譲歩する」という表現は『精神分析の倫理』 (p.368) この命題に由来します : « la seule chose dont on puisse être coupable, c'est d'avoir cédé sur son désir » [我れらの唯一の罪は, 己れの欲望に関して譲歩したということである]。

すなわち, 有罪性は欲望に関して譲歩したことに存する。この有罪性は, 無意識的罪意識のことです。存在論的有罪性のことです。

「欲望に関して譲歩する」とは如何なることでしょうか? それは, 「欲望 φ を仮象 a で覆い隠してごまかして, 満足を得た気になってしまう」ということです。

まことには, 欲望 φ は如何なる仮象客體 a によっても満足しません。ご

まかしはききません。ですから、本当の意味で欲望 ϕ に忠実であろうとすれば、あらゆる客体 a を棄却せねばなりません。

それは、構造論的には分離と同じことであり、主体滅却 **destitution subjective** と同じことです。つまり、自有、聖状に成ることです。

欲望という語は容易に心理学的に理解されてしまうので、非常に誤解・曲解を招きやすいものです。たしかに **catchy** な言葉ですし、精神分析は「性欲」を扱うと一般には思われていますから、欲望を論ずることは必要です。しかし、欲望が何であるかを明確に踏まえなければなりません。精神分析における欲望とは、フロイト的な物、**ex-sistence** としての存在、 ϕ です。心理学的誤謬は避けねばなりません。

最後に、いただいた御指摘のうち重要な一点に言及しないわけには行きません。それは、**phallus imaginaire** ($-\phi$) はそのものとしてひとつの **aliénation** にほかならない、という御指摘です。これは大變的を射た御指摘です。わたしも気づいていませんでした。

たとえば **Hans** 少年が彼の母親や妹のペニスを想像するとき、それは去勢 ϕ に対するひとつの防御です。去勢の存在を否認するために、妹にも、

今は小さくてわからないけど、ちゃんとペニスがあるのだ、と彼は想像します。

そのような *image négatif* としての *phallus imaginaire* (- φ) は、まさに、去勢 φ の *fonction imaginaire* であり、

$$\frac{(-\varphi)}{\varphi}$$

という学素に形式化できます。

大変重要な御指摘をくださり、ありがとうございました。

では今学期はここまでにしましょう。引き続き御質問、御意見、御要望等を随時お送りください。お待ちしております。また来週、可能な限り早く再開します。 *Allez, bonne soirée et bonnes vacances !*